

京都大学構内遺跡調査研究年報

2008年度

京都大学文化財総合研究センター

序

本年報は、2008年度に文化財総合研究センターがおこなった、大学敷地内の遺跡調査の報告と、それらの資料にもとづいた研究成果をまとめた紀要からなっている。第Ⅰ部で報告する発掘および立合調査では、先史時代から近世にいたる歴史を刻んだ資料を整理し、北白川を中心とする地域史に新たな情報を加えている。

京都大学の構内では、吉田キャンパスや各地の研究施設の施設内に、すでに登録された多くの周知の遺跡があるが、新たな整備が計画される機会には、該当する地域の遺跡の範囲や内容を再検討する作業を進めている。第Ⅱ章で報告する医学部附属病院西構内の調査地点は、京都市遺跡地図の中で、聖護院川原町遺跡として登録されている部分の西端にあたるが、工事予定地がこの遺跡範囲のさらに西側を含んでいた。遺跡の発掘を始めたところ、調査区全体にわたって遺物包含層が良好に残されていたので、新たな遺跡範囲を確認し工事予定地全体を発掘した結果、この地域の開発が開始された時期や、中世以降の土地利用の変遷に関する新たな情報を加えることができた。

また、発掘と出土資料の調査を進める中で、多くの分野から検討を進めながら、歴史的環境を復元するための具体的な蓄積をはかっており、その一端は本年報にも反映されている。第Ⅱ部の紀要は、北部構内の調査で明らかになった平安時代の遺構や遺物を、古代史の視点から史料との関係を検討して、古代寺院の具体的な所在地について考察したものである。ご高覧いただきご批判下さるようお願いしたい。

おわりに、これらの調査を進める上でご指導ご助言をいただいた、学内学外の関係者および調査機関、とりわけ、発掘にあたって多くのご協力を賜った、施設部、医学部附属病院の関係各位には、ここに厚くお礼申し上げる次第である。

2011年3月

京都大学文化財総合研究センター長

上原真人

例 言

- 1 本年報は、京都大学構内で2008年4月1日から2009年3月31日までに発掘、整理作業をおこなった埋蔵文化財調査と保存の報告、および京都大学文化財総合研究センターにおける研究成果をまとめたものである。
- 2 国土座標にしたがって一辺50mの方形の地区割りをして、遺跡の位置を表示した。
- 3 層位と遺構の位置については、国土座標第Ⅵ座標系（日本測地系、 $x = -108,000$
 $y = -20,000$ ）が（ $X = 2,000$ $Y = 2,000$ ）となる京都大学構内座標により表示した。
- 4 遺構の略号は、奈良文化財研究所の方式にしたがって、井戸：SE，土坑：SKのよう
に表示し、各調査ごとに通し番号を1から付した。
- 5 遺物には、遺跡の調査名を示すローマ数字と、調査ごとの通し番号を1から付した。
この遺物番号は、本文、実測図、写真を通じて表示を統一した。
I：京都大学病院構内AG13区の発掘調査
（例 I 1：京都大学病院構内AG13区出土遺物1番）
- 6 原則として、遺物の実測図は縮尺1/4、遺物の写真は約1/2に統一した。他の縮尺のも
のは、それぞれに縮尺を明記した。
- 7 参考文献は、本文中に〔著者名 発表年〕の形式で表わし、巻末に一括した。
- 8 古代・中世土師器の型式分類は、とくにことわりがない場合、『京都大学埋蔵文化財調
査報告Ⅱ』（1981年）にしたがっている。
- 9 本文の執筆者名は各章の初めに列記した。また、遺物の撮影は、それぞれ報告者が担
当した。
- 10 編集は、富井眞が担当し、清水芳裕、千葉豊、伊藤淳史、笹川尚紀、磯谷敦子、柴垣
理恵子が協力した。

京都大学構内遺跡調査研究年報 2008年度

目 次

第 I 部	2008年度京都大学構内遺跡発掘調査報告	
第 1 章	2008年度京都大学構内遺跡調査の概要	1
1	調査の経過	1
2	調査の成果	1
第 2 章	京都大学病院構内 A G 13 区の発掘調査	3
1	調査の概要	3
2	層 位	4
3	遺 構	7
4	遺 物	13
5	小 結	33
参 考 文 献		36
京都大学構内遺跡調査要項		38
報 告 書 抄 録		46

第Ⅱ部 京都大学文化財総合研究センター紀要XXI

円覚寺・東名寺・東明寺にまつわる基礎的考察	49
1 はじめに	49
2 円覚寺の所在	49
3 2つの栗田寺	56
4 栗田山庄の沿革	60
5 おわりに	65

図 版	巻末
-----	----

図 版 目 次

- 図版 1 京都大学吉田キャンパスの地区割と調査地点
- 図版 2 京都大学病院構内 A G 13 区
- | | |
|------------------|------------------|
| 1 完掘後の調査区全景（西から） | 2 調査区東辺全景（南から） |
| 3 東西畔の層位（南西から） | 4 井戸 S E 19（南から） |
- 図版 3 京都大学病院構内 A G 13 区
- | | |
|------------------|-------------------|
| 1 南辺の井戸・野壺群（南から） | 2 井戸 S E 3（北から） |
| 3 井戸 S E 6（西から） | 4 井戸 S E 15（北東から） |
| 5 土坑 S P 1（南から） | 6 瓦溜まり S X 1（西から） |
- 図版 4 京都大学病院構内 A G 13 区
S E 19 出土遺物, 土製品
- 図版 5 京都大学病院構内 A G 13 区
土製品, 銭貨

挿 図 目 次

病院構内 A G 13 区の発掘調査	
図 1	南北畔西面の層位…………… 4
図 2	東西畔南面の層位…………… 5
図 3	近世 I 期の遺構…………… 8
図 4	近世 II 期(古)の遺構…………… 9
図 5	近世 II 期(新)の遺構…………… 10
図 6	井戸 S E 3 …………… 12
図 7	S E 21 出土遺物(1)…………… 15
図 8	S E 21 出土遺物(2), S E 19 出土 遺物…………… 16
図 9	S E 20 出土遺物, S E 18 出土遺物, S X 4 出土遺物, S E 16 出土遺物, S E 15 出土遺物…………… 18
図 10	S E 14 出土遺物, S E 13 出土遺物, S E 5 出土遺物, S E 1 出土遺物, S E 4 出土遺物, S E 3 出土遺物 …………… 19
図 11	S E 6 出土遺物…………… 20
図 12	S E 2 出土遺物, S X 3 出土遺物, S P 1 出土遺物, S D 14 出土遺物 …………… 22
図 13	S D 9 出土遺物, S D 8 出土遺物, S D 3 出土遺物, S D 2 出土遺物, S D 1 出土遺物, S D 13 出土遺物, S E 10 出土遺物…………… 24
図 14	土製品(1)…………… 25
図 15	土製品(2)…………… 26
図 16	土製品(3)…………… 28
図 17	土製品(4)…………… 29
図 18	土製品(5)…………… 30
図 19	土製品(6)…………… 31
図 20	土製品(7)…………… 32
図 21	錢貨…………… 34
円覚寺・東名寺・東明寺 にまつわる基礎的考察	
図 22	221 地点周辺 …………… 50

表 目 次

表 1	京都大学構内のおもな調査…………… 39
-----	----------------------

第 I 部 2008年度京都大学構内遺跡発掘調査報告

第1章 2008年度京都大学構内遺跡調査の概要

第2章 京都大学病院構内AG13区の発掘調査

第1章 2008年度京都大学構内遺跡調査の概要

上原真人 清水芳裕 富井 眞

1 調査の経過

京都大学文化財総合研究センターは、吉田キャンパスおよび附属施設の敷地内における建物の新営やそのほかの掘削工事に際し、予定地の埋蔵文化財調査を、既知の遺跡との関係や過去の調査結果により、発掘・試掘・立合にわけて実施している。2008年度には、以下のように発掘調査2件、立合調査5件を実施した（括弧内は図版1および表1の調査地点番号）。

発掘調査	西部構内課外活動施設新営（西部構内A W20区）	（整理中，図版1-348）
	病院構内 i P S細胞研究施設新営（病院構内A G13区）	（第2章，図版1-349）
立合調査	北部総合研究棟（農学部総合館）改修その他工事（北部構内B E33区）	（第1章，図版1-350）
	附属病院積貞棟建設に伴う電気設備工事（病院構内A H14区）	（第1章，図版1-351）
	西部総合研究棟等改修その他工事（西部構内A U20区）	（第1章，図版1-352）
	フィールド科学教育研究センター研究棟新営工事（北部構内B G33区）	（第1章，図版1-353）
	本部構内ガス配管改修工事（本部構内A Y30区）	（第1章，図版1-354）

2 調査の成果

前節で掲げた発掘調査のうち、整理を終えたものについて、その成果を略述する。なお、病院構内A G13区は、第2章において調査成果を詳述しているので参照されたい。

病院構内A G13区 本調査区は、病院東構内のおよそ中央に位置している。遺跡の基盤を構成する砂礫層は厚さ2 m以上に達するが、その中に含まれる土器破片の年代的検討から、調査区一帯は、13世紀頃までは鴨川（高野川系の流路）の氾濫原で、その後徐々に河原が西へ移動していき、16世紀頃から安定した環境になっていたことがわかった。それに連動するようにして、この辺りの開発は、17世紀頃から活発になる。調査区西辺では、砂礫層の最上部に中世の遺物の細片を含みつつもわずかに江戸時代の陶磁器類が出土している部分が認められるが、安定して広がるわけではない。調査区全体に広がる遺物包含層は2枚である。下位の包含層は淡褐色土で、出土遺物は17世紀～18世紀前半におさまる。砂礫層群の上面では、この淡褐色土を埋土とする井戸や鋤溝や小ピットなどの遺構が確認

2008年度京都大学構内遺跡調査の概要

される。上位の包含層はさらに土壌化が進んだ黒灰色土で、遺構も数多くなるとともに、切り合い関係になる遺構も多数認められる。この包含層の年代は、18世紀後半以降19世紀にかけてであり、この時には農地としての開発が本格化していたことがうかがえる。なお、250m東の338地点で確認された18世紀の土石流は、この地点では確認されていないものの、年代的にはおよそ対応する性格不明の黄白色粗砂層が部分的に分布している。

京都大学構内における立合調査 北部構内B E 33区では、現地表下約6mの標高58.5m付近で、北北東から南南西にはしる厚さ1m以上の砂礫層が確認された。5mm程度の粗砂を基質として拳大から人頭大の花崗岩の角礫が主体となるので、白川系の流路と思われるが、頁岩も散見できる。この砂礫層は、東に広がる黄白色粘土層を切っているが、その粘土層をえぐった斜面堆積の部分には、流路が削っていった後にしばらく水が引いて植物が茂っていたことを示唆するように、暗褐色の粘質土が散在するのを確認できた。どの地層からも遺物を確認できなかったため、これらの堆積層については、先史時代ということ以上には年代を特定できない。南接する125地点の中央南辺では、同程度の標高で、南に広がる土壌化層が北を流れる流路にえぐられていることが確認されているので、先史時代に大きな出水があったことがうかがえる。

西部構内A U 20区の立合調査では、現地表下約1.2mに、厚さ30cm程度の近世の遺物包含層である黒灰色土があり、さらにその下位に中世末期頃の可能性のある黄灰色土が堆積していたのを確認している。現在整理中の、北方の348地点でも同様の層序が確認されており、この一帯にも中近世の遺跡が広がっていることがうかがえる。

病院構内A H 14区の立合調査では、現地表下約1.5～2.0mで、やや明るい褐色を呈する近世の遺物包含層を確認した。周辺で確認される、中近世の遺物包含層である灰褐色土や茶褐色土とは異なる層相だが、この下位には砂礫層が堆積しているため、A G 13区とは異なった土地利用がおこなわれていたのかもしれない。

第2章 京都大学病院構内A G13区の発掘調査

千葉 豊 富井 眞

1 調査の概要

本調査区は、京都大学医学部附属病院の西構内、鴨川まで直線距離で150mの地点に位置する（図版1-349）。ここに、i P S細胞研究施設の新営が計画された。新営予定地は、聖護院川原町遺跡の指定範囲の内外に位置する場所にあっており、当初、その範囲内にあたる新営予定地東側部分700㎡を対象として調査を開始した。表土掘削を終了後、遺物包含層が新営予定地の西側まで広く連続していることが新たに確認されたので、新営予定地全域の発掘調査をおこなうこととした。調査期間は2008年7月28日～10月31日、調査面積は2164㎡である。

発掘調査の結果、近世から近代にかけての井戸・野壺・溝・土坑などを検出し、近世の土器・陶磁器類を主体として整理箱で123箱を数える遺物が出土した。

鴨川にほど近いこの地一帯がいつごろ安定化し人間の活動領域に取り込まれていったのかの解明は、調査にあたってのひとつの課題であった。過去の調査においては、本調査区の南東100m前後に位置する19・39・122地点では中世の遺物包含層と多種多様な遺構が検出されているにもかかわらず、その地点から西側一帯（192・198・291地点）では、中世の遺構が検出された地点はない。

今回の調査でも、近世の遺物包含層の下には砂礫が厚く堆積しており、この砂礫層からは摩滅の著しい中世の土師器類が出土したことから、中世段階ではこの地点はなお高野川系流路の氾濫原であったことが明らかになった。

江戸時代の遺物包含層は17世紀～18世紀前半と18世紀後半以降19世紀の2枚確認できた。この結果、17～18世紀前半段階に農地としての開発が開始されたこと、ただし遺構が散漫で遺物も少ないことなどから、なお本格的な開発には至らなかったことが明らかとなった。聖護院村の畑地としての本格的な開発は18世紀後半以降であり、その後この地は、絵図・地籍図などによれば幕末に練兵場となり明治期には牧畜場となってから大学敷地へと変遷していった。このように、中世以降の土地利用の変遷に関する知見を得ることができたといえよう。

なお、本章は、第1・4・5節を千葉、第2・3節を富井が分担して執筆した。

2 層 位

本調査区は、発掘調査前には駐車場であり、建物が存在しなかったため、遺物包含層の残りはよい(図1・2)。50cm前後の表土(第1層)を除去すると、18世紀後半から19世紀にかけて堆積した黒灰色土(第2層)が、調査区全域に厚さ20cm前後で広がる。黒灰色土の下位は、調査区中央北辺には無遺物の黄白色粗砂(第2'層)が部分的に堆積しているが、広く分布しているのは、18世紀前半までの遺物が出土する層厚10cm前後の淡褐色土(第3層)である。黄白色粗砂の性格は不明だが、本調査区の東方250mに位置する338地点では18世紀の土石流が確認されており〔富井・笹川2010〕、年代的には近い関係にある。淡褐色土の下位には、高野川系流路ないし鴨川による厚さ2m以上の自然堆積の砂礫層群(第4層)が堆積している。調査区西辺のY=1630よりも西側では、砂礫層群の最上部に黄褐色土が薄く広がっており、そこからは、中世の土師器や陶器の細片が目立つものの、わずかに江戸時代の陶磁器破片が出土した。

第4層の砂礫層群は、粒径3~5mm程度の粗砂層が目立つが、拳大の礫層やシルト層も介在している(図版2-3)。土師器や瓦などの細片が含まれ、中にはあまり摩滅していないものもある。ラミナの向きは総じて、東西畔では西に下がり、南北畔では非常に緩い傾斜で南に下がる。出土遺物の傾向を見ると、東辺では、上位に1段撫で手法のF類が出土

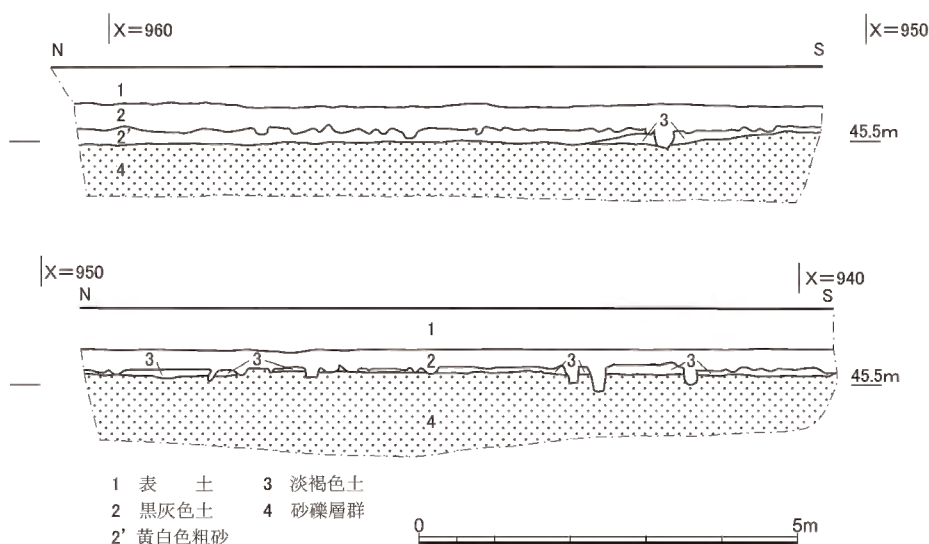


図1 南北畔(Y=1650ライン)西面の層位 縮尺1/100

層 位

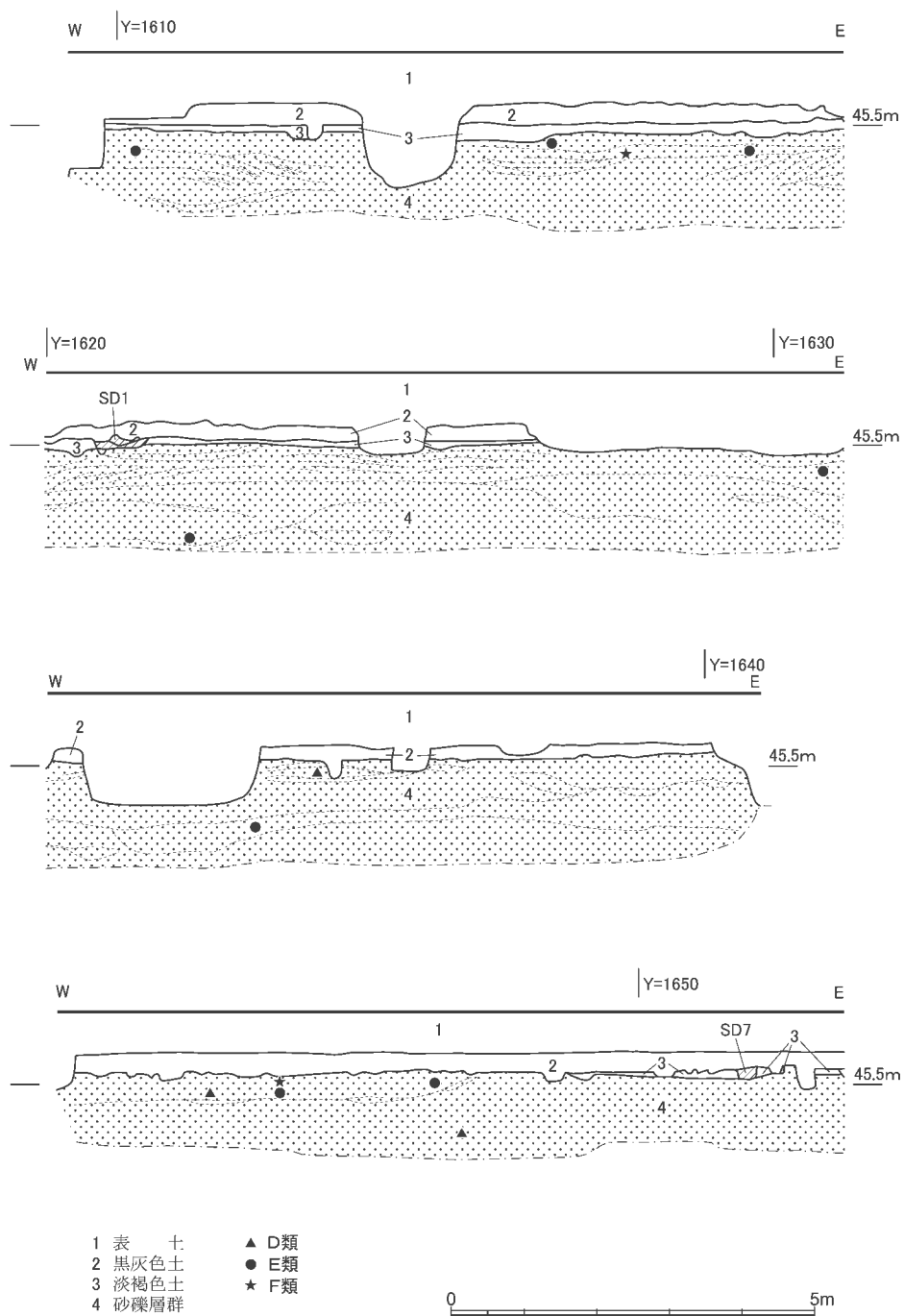


図2 東西畔 (X = 950ライン) 南面の層位 縮尺1/100

京都大学病院構内A G13区の発掘調査

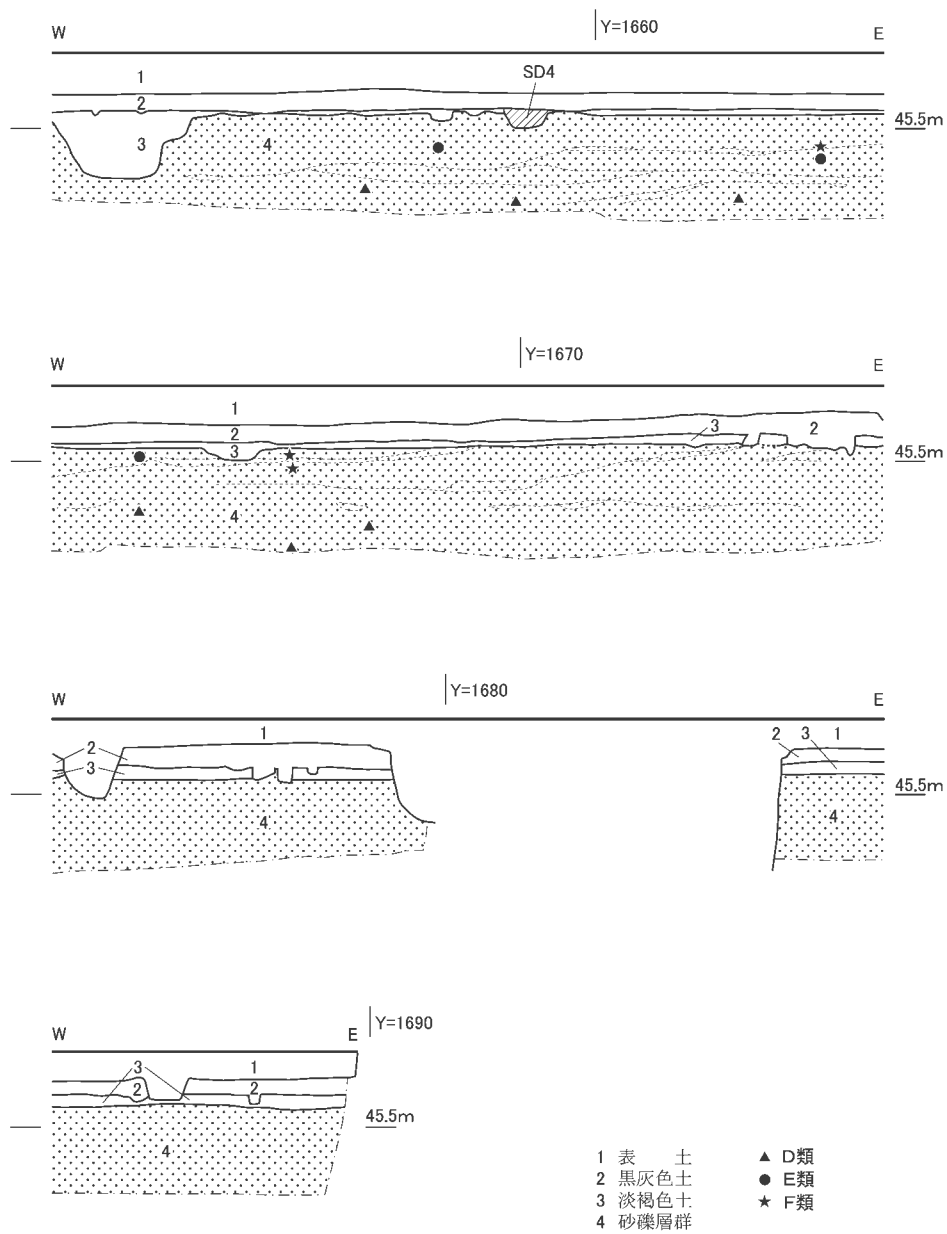


図2つづき

遺 構

するが、下位では、1段撫で面取り手法のD類までしか出土しない。また西辺では、現地表下2.5m程度の砂層からも1段撫で素縁手法のE類が出土する。このように、ラミナの走向と出土土師器破片の時期的傾向はおよそ整合的である。こうした状況から、13世紀ごろまで氾濫原だったこの地が、河原が徐々に西へ移動していった、16世紀ごろから水がほとんど引いていったことがうかがえる。

3 遺 構

出土遺物には、中世の土師器や陶器や輸入青磁など、包含層の形成年代よりも古いと思われる細片も含まれるが、そうした時期の遺構は認められなかった。淡褐色土を埋土とする遺構は、第4層の砂礫層群上面で検出され、17世紀から18世紀前半のものである。また、第2層の黒灰色土を埋土とする遺構は、淡褐色土や砂礫層群の上面で検出され、18世紀後半から19世紀までのものである。前者を第Ⅰ期、後者を第Ⅱ期として、以下に時期別に主な遺構の説明をする。

(1) 第Ⅰ期の遺構（図版2，図3）

SE17・18は、調査区中央東辺で検出された円形土坑で、遺物はほとんど出土していない。木製の野壺と思われる。同様の円形土坑は、調査区西辺にも2基ある。SE18と並んで検出されたSE19は石組の井戸（図版2-4）で、井戸底の標高は44.1m。上部を大きく削平されているが、残存する石組に花崗岩はほとんど含まれない。調査区東南辺で検出されたSE20は、円形の土坑で、井戸の可能性はある。底面の標高は44.8m。同様の円形土坑は東西畔内でも中央付近で確認しているが、こちらは遺物は出土しなかった。このSE20は、長方形を呈する土坑SX4に切られているが、両者の出土遺物には時期差を認められなかった。それらのさらに東側で検出されたSE21は、井筒は不明瞭だが水溜を確認できたので、木製の井戸だったと思われる。井戸底の標高は、44.3m。SE21から出土した陶器片は、SE19出土のものと接合している。

調査区中央北辺には、淡褐色土上面で、北北東から南南西にはしる溝を部分的に確認できた。埋土は淡褐色土よりやや明るい明褐色土だが、この時期の遺構と判断している。

(2) 第Ⅱ期の遺構（図版2・3，図4～6）

黒灰色土を埋土とする遺構を第Ⅱ期としたが、切り合い関係を持つ遺構があり、複数の時期の遺構群であることは明らかである。SD1・2などのように北北東から南南西に走る溝や、一辺20cmほどの方形ピットや直径20cmほどの円形ピットがこの面でもっとも古い

京都大学病院構内AG13区の発掘調査

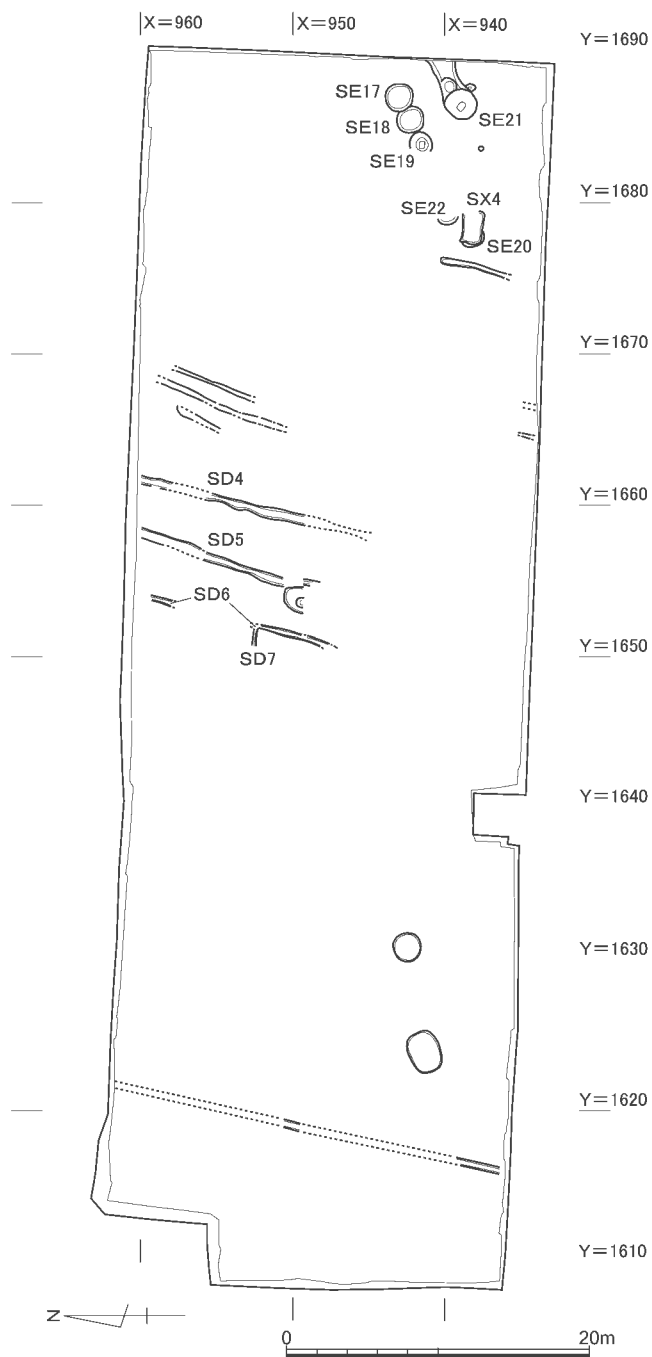


図3 近世I期の遺構 縮尺1/500

遺 構

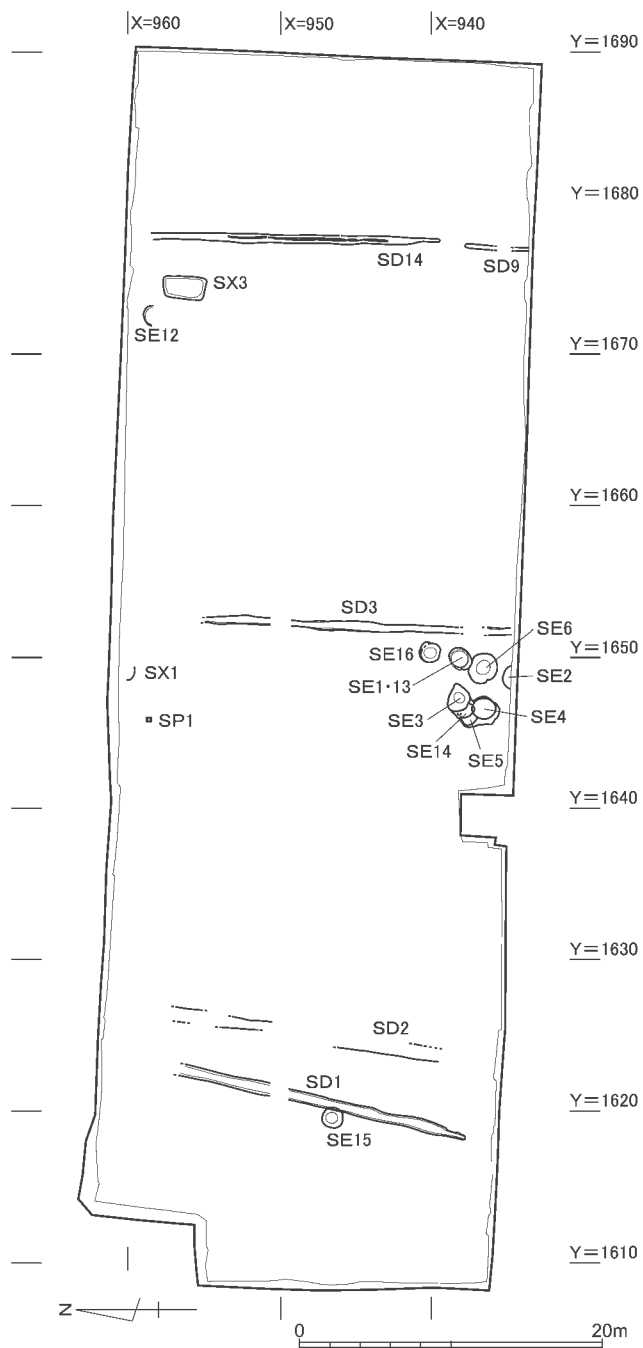


図4 近世Ⅱ期(古)の遺構 縮尺1/500

京都大学病院構内A G 13区の発掘調査

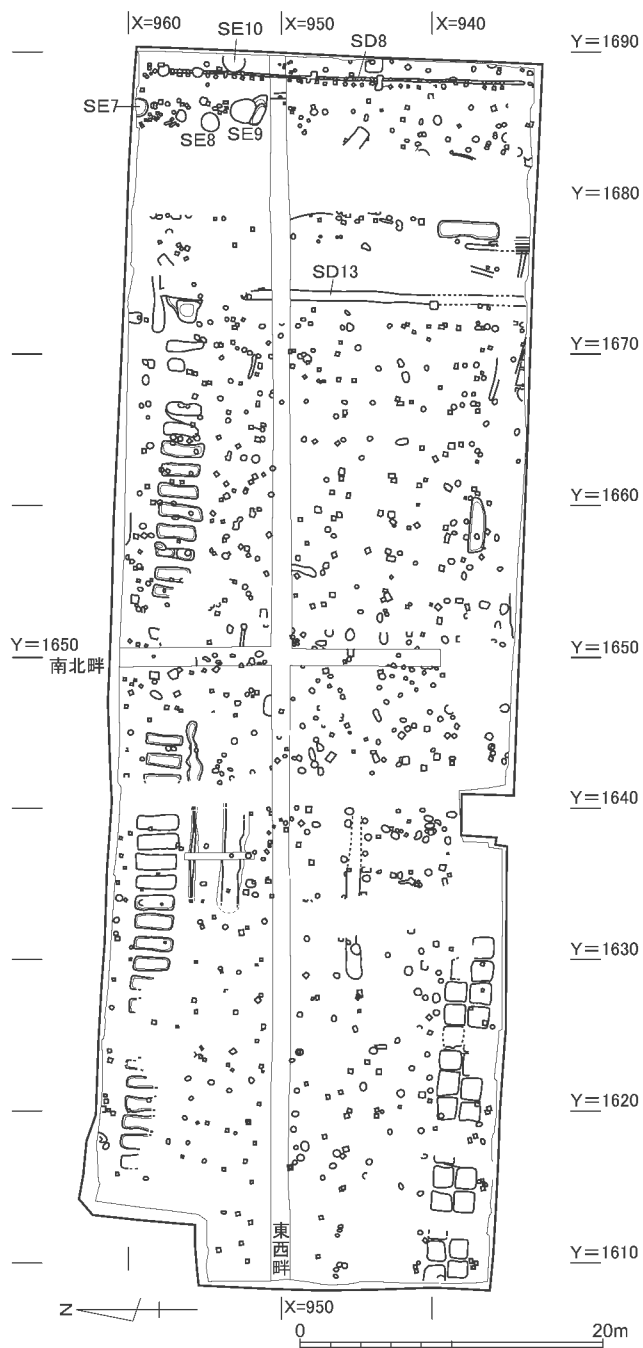


図5 近世Ⅱ期(新)の遺構 縮尺1/500

遺 構

と思われる遺構群である。20cm前後のピットの中には、第Ⅰ期の溝群におよそ直行するように、1.5～2.2m間隔で直線上に並ぶものも何列か確認できる。

こうした溝やピットを切って南北にはしる溝には、SD3・9・14などがある。そして、もっとも新しい遺構としては、調査区西南辺に二列並ぶ一辺約2mの方形土坑群と、調査区北辺に並ぶ0.5m×2m程度の長方形の土坑列がある。これらの土坑群は、ピットを切っている。またこの土坑列に挟まれた空間ではこれと平行して、東西にはしる一辺30cmほどの方形ピット列があり、それが途切れた調査区東辺には、その土坑列・方形ピット列に直交して南北方向の溝SD13がはしる。さらに、東方には、SD13に並行して南北方向にはしり、直径10cm程度の小さなピットを両脇および底面にともなう、溝SD8がある。また、調査区東辺の円形落ち込みSE10は明治期の遺物を包含していた。なお、もっとも新しい時期の遺構は、南北方向にはしる溝やそれに直交する土坑列やピット群で構成されているので、SD3・9・14もそれと同時期の可能性はあるものの、出土遺物に明治期に下るものはなかったので、次節では、第Ⅱ期の遺構とともに解説をしている。

以下、個別に略述する遺構は、主として第Ⅱ期でも古い段階のものである(図4)。

調査区中央南辺に群在していた井戸・野壺のうち(図版3-1)、SE1・2・4・5・13・14は漆喰製の野壺。SE1はSE13を、SE4はSE5を、SE5はSE14を、それぞれ切っているが、いずれも出土遺物には明確な時期差を認められない。SE16は、円形の土坑で、木製の野壺と思われる。SE3(図版3-2、図6)は石組の井戸で、SE14を切っている。井戸底の標高は、43.1m。廃絶後には、残存する井筒の中位と水溜に、人の胴体ほどの大きさの花崗岩塊が落とし込まれていた。いずれも接合関係にはなかった。SE6も石組の井戸で(図版3-3)、井戸底の標高は42.1m。石組は10段前後しか残っておらず、上部をかなり削平されているので、SE13に先行していたと思われる。石組を構成する礫種には花崗岩はほとんど含まれない。

SE15は、調査区の西辺中央で検出された石組の井戸で(図版3-4)、井戸底の標高は43.8m。これも石組の石材に花崗岩をほとんど認められない。調査区中央北辺で検出された直径50cmに満たない土坑SP1からは、残存率の高い京焼の土瓶1点が出土した(図版3-5、図12-I 223)。SX1も調査区中央北辺で検出された遺構で、10cm四方程度に割られた棧瓦が100点あまりまとまって出土した(図版3-6)。接合するものはほとんどなかった。SX3は、調査区東北辺で検出された長方形の土坑。拳大の礫が多く出土したが、井戸のような掘り込みは認められなかった。

京都大学病院構内A G 13区の発掘調査

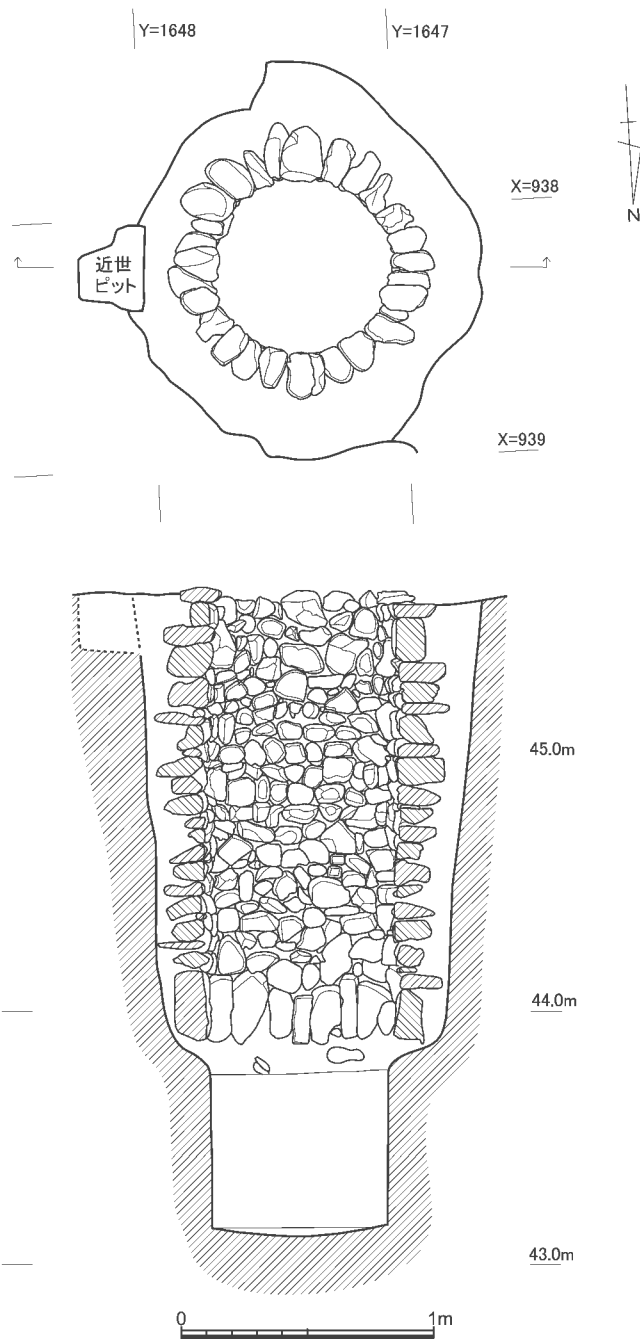


図6 井戸SE3 縮尺1/30

4 遺物

出土遺物は、整理箱123箱を数えるが、その大半は近世～近代の遺物である。近世～近代の遺物は、土器・陶磁器類を中心に、土製品・瓦類・青銅製品・鉄製品など多岐にわたっている。遺構出土遺物は、17世紀後半～18世紀前半（第Ⅰ期）、18世紀後半～19世紀中葉（第Ⅱ期古）、19世紀後半以降（第Ⅱ期新）の3期に大別できるが、量的に多いのは18世紀後半～19世紀中葉のもので、そのなかでも幕末期の資料が主体を占めている。

ここでは、遺構出土の遺物を中心に報告し、土製品・銭貨にかんしては包含層出土品もあわせて解説しておきたい（図版4・5、図7～21）。

SE21出土遺物（I1～I44） I1～I6は土師器皿。見込みに圈線をもたないI1～I4と圈線をもつI5・I6があり、圈線のない皿は口径5.5cmのI1、9～10cm台のI2～I4に細分できる。圈線をもつ皿の口径は10.5cm前後である。I5は口縁端部および底部内外面に煤が付着しており、灯明皿として用いられたものであろう。I7は口径2.4cm、高さ2.2cmを測る土師器の壺。灰白色を呈し、手づくねで成形されている。伏見稲荷門前で売られていた「つぼつぼ」とみてよいだらう〔堀内2001〕。I8は土師器炮烙。口縁端部は丸くおさめ、口縁部内外面ともに横撫で調整を施す。難波洋三分類のD類に比定することができる〔難波1992〕。

I9～I19は陶器椀。I9・I10・I17・I18は肥前系とみられ、それ以外は京・信楽系の製品であらう。I9は見込みを蛇の目釉剥ぎしている。I10は褐色を呈する粗い胎土で、鉄絵で文様を描いたのち施釉する。外面の釉が十分溶けきらなかったためか白濁している。I16は色絵の椀で、残存部分では青と緑の着彩がみられる。I17は高台の高い呉器手の椀とみられ、高台畳付けを除いて全面施釉している。I18は白土を用いて内外面とも直線文様を描いている。I19は見込みに鉄絵で文様を描いている。

I20は外面に鉄釉を施した陶器壺。I21は内外面に鉄釉を施した陶器鍋。I22は陶器鉢。肥前系で、見込みに白土を象嵌した文様をもつ。I23は備前焼で壺か。底面に、円形の刻印をもつ。I24は陶器の壺の類か。胎土は灰白色を呈し外面に半透明の釉を施すが、縦方向の縮みが生じている。I25～I27は陶器すり鉢。I25・I26は堺系とみられ、口縁部外面が縁帯状となり突出する内面に1条の沈線がめぐっている。I27は中世の備前すり鉢であり、混入品であらう。

I28～I44は磁器。I28～I31・I33～I41は椀の類で、I42～I44は皿。I32は袋状

の口縁部形態を呈する。壺の類であろうか。I 33は型紙刷り。I 34・I 43は外面に青磁釉を施しており、I 43は口鏽とする。

SE19出土遺物 (I 45～I 54) I 45は口径5.8cmを測る土師器小皿。I 46は土師器鍋。外型を用いて成形しており、内面は回転横撫で調整、口縁端部は面取る。口径約29cm。口縁部外面を中心に煤が厚く付着する。I 47は軟質施釉陶器の鬢水入れ。全面に透明釉を施している。I 48は陶器すり鉢。底面のすり目は、クロスパターンをとっており、堺系とみてよい。I 49は焼き締め陶器の甕。口縁部外面が縁帯化し頸部は短く胴部が張る形態を呈する。胴上部に井桁状のヘラ記号をもつ (図版4左上)。備前焼であろう。

I 50・I 51は磁器椀。I 51は口縁部が端反りとなる小椀で、コンニャク印判による菊花文を施している。「大明年製」の底裏銘をもつ。I 52は磁器皿で、見込みを蛇の目釉剥ぎとしている。I 53・I 54は磁器染付。段重の蓋で、いずれもつまみの部分を欠損している。

SE20出土遺物 (I 55～I 62) I 55・I 56は見込みに圈線をもつ土師器皿。I 57～I 61は陶器。I 57は鉄釉を施す壺。I 58は土瓶の蓋。I 59は鉢で、見込みに白泥と鉄絵で、梅花文を描いている。I 60は灰釉を施した椀。I 61は、肥前京焼風の椀。見込みに山水楼閣文を描き、「清水」の刻印を底部にもつ。I 62は磁器染付の小椀。

SE18出土遺物 (I 63・I 64) I 63は口径31cmをはかる土師器鉢。面取りする口縁端部は、内側へ肥厚する。外面は磨き、内面は横撫調整である。I 64は磁器染付の小椀。口縁部が端反りとなる。

SX4出土遺物 (I 65～I 71) I 65・I 66は土師器の皿で、I 66は見込みに圈線がめぐる。I 67は土師器焼塩壺の蓋。内面に布目痕が残る。I 68は土師器の蓋。I 69・I 70は陶器碗で、I 70は見込みに鉄絵で草花文を描く。I 71は磁器染付の小椀。

SE21・SE19・SE20・SE18・SX4出土の遺物は、おおむね17世紀後半以降18世紀前半までのものである。

SE16出土遺物 (I 72～I 83) I 72は土師器皿。I 73は口径3cm、高さ2cmをはかる土師器小壺。灰白色を呈し、手づくね成形である。「つぼつぼ」の一種か。I 74は陶器椀の底部。I 75は陶器灯明受け皿。I 76は鉄釉を施した壺の口縁部。I 77は焼締陶器の鉢。底部と胴部の境に、反時計回りの削りで面取りを施している。I 78は内外面ともに鉄釉を施した陶器甕。I 79～I 83は磁器。I 79は椀蓋で、内面染付、外面は色絵を施す。I 80はくらわんか椀。I 81・I 82は外面に青磁釉を掛けている。

SE15出土遺物 (I 84～I 93) I 84は見込みに圈線をもつ土師器皿。I 85は焼締陶

遺 物

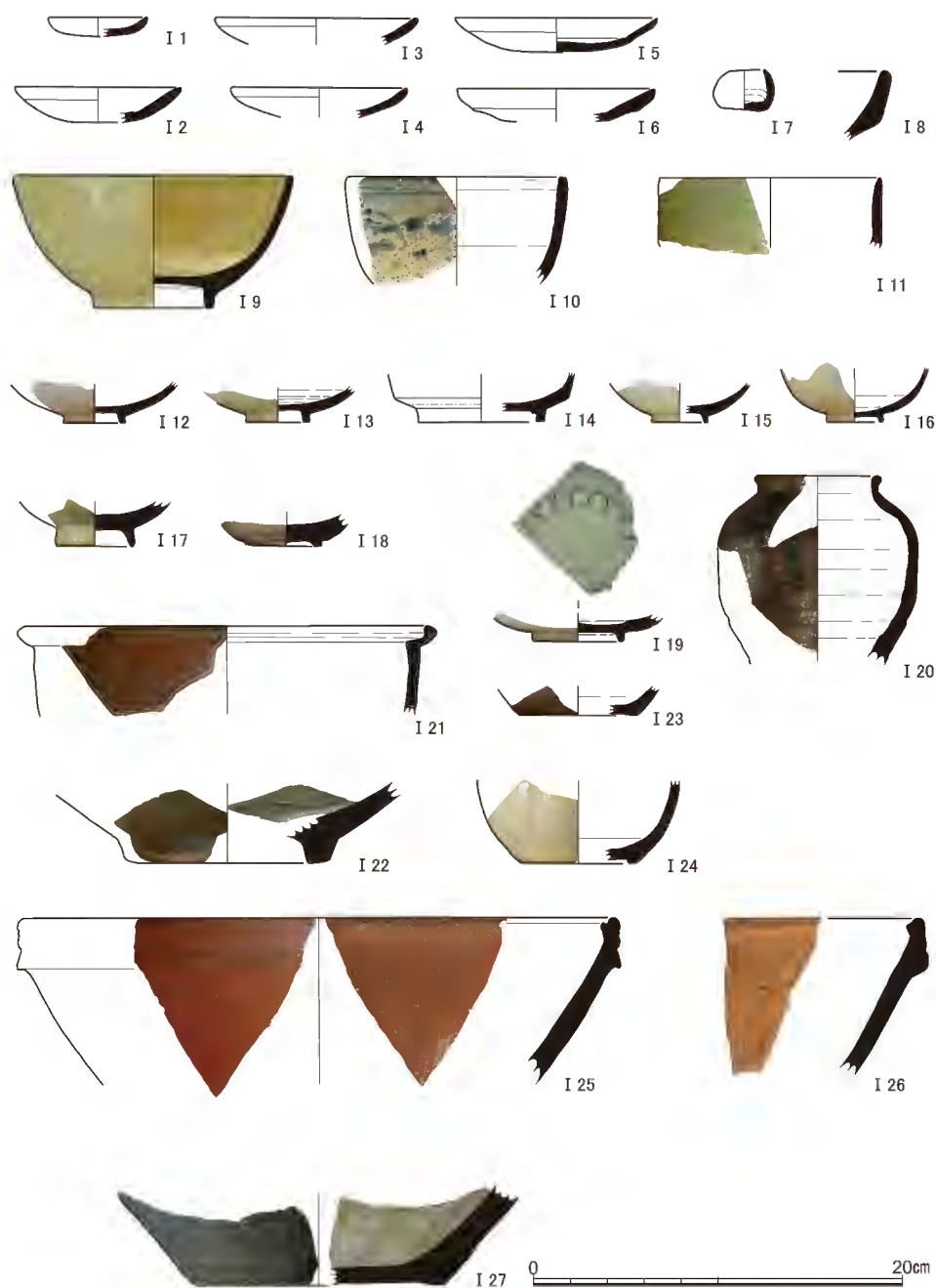


図7 SE21出土遺物(1) (I 1~I 8土師器, I 9~I 27陶器)

京都大学病院構内A G13区の発掘調査

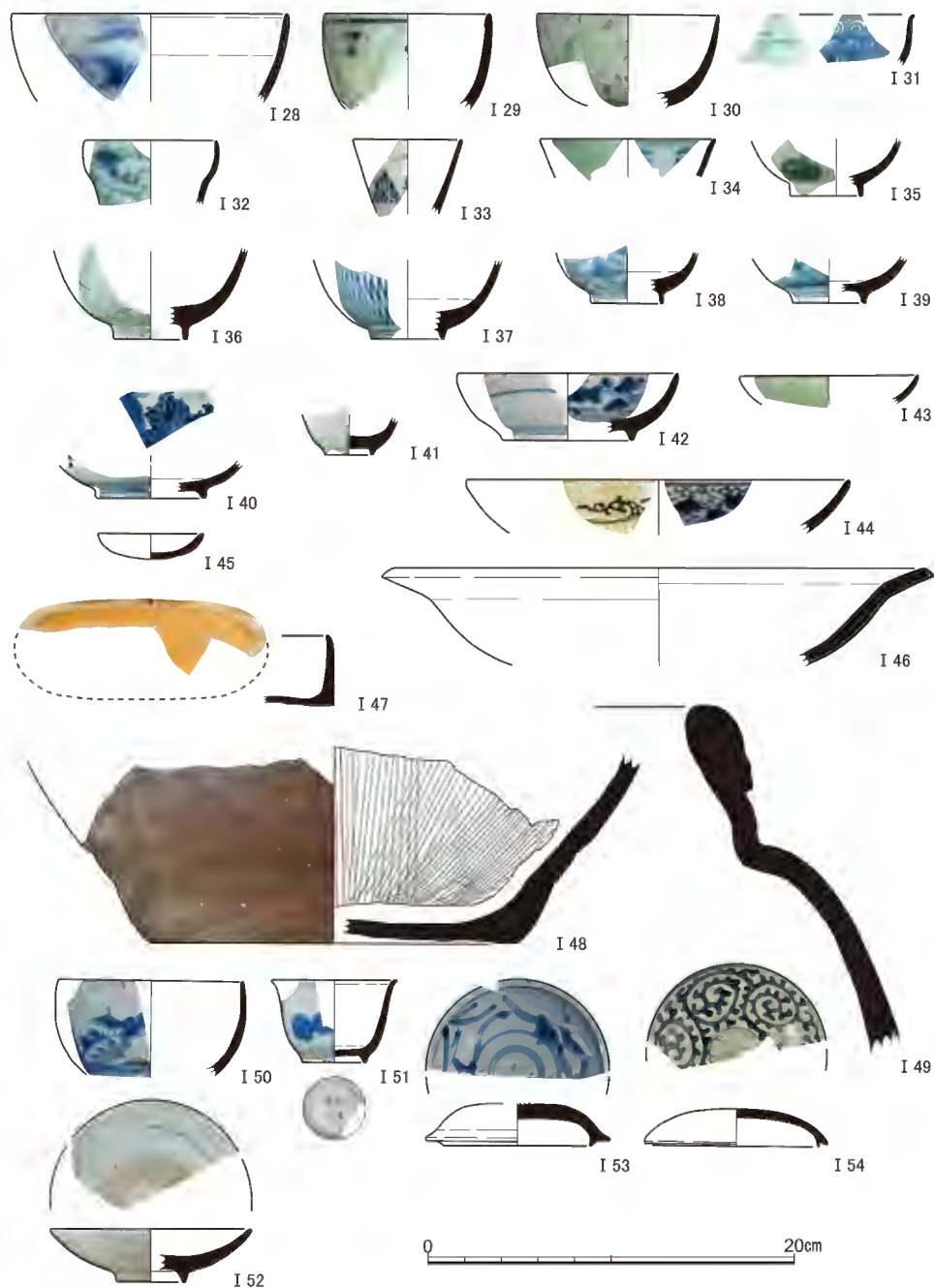


図8 S E 21出土遺物(2) (I 28~I 44磁器), S E 19出土遺物 (I 45・I 46土師器, I 47~I 49陶器, I 50~I 54磁器)

遺 物

器で、底面から胴下部に削りによる調整痕を残している。I 86・I 87は陶器碗。ともに、胴中位で屈曲するタイプで、I 87は鉄絵をもつ。I 88～I 90は磁器。I 88は小椀で、赤絵を施す。I 89はくわんか椀。I 90は皿。見込みに文様を描く。I 91は土師器鍋。外型を用いた成形で、口縁端部は面取りする。外面に煤が付着する。I 92は土師器鉢。I 93は陶器鉢で、見込みに白土を用いて波状文を描いている。

SE 14 出土遺物 (I 94～I 106) I 94は見込みに圏線をもつ土師器皿。I 95・I 96は陶器椀。I 96は茶・緑・黄を用いた上絵をもつ。I 97～I 106は磁器。I 97～I 102は椀で、I 98・I 100は外面に青磁釉を掛けている。I 103・I 104は皿で、I 104は見込みに蛇の目釉剥ぎとする。I 105・I 106は染付の仏飯。

SE 13 出土遺物 (I 107～I 114) I 107～I 110は土師器皿。いずれも口径10cm前後で見込みに圏線がめぐる。I 109・I 110は口縁端部の半周ほどに煤が厚く付着している。I 111～I 113は陶器。I 111は鉄釉を施した鍋、I 112は杳形の椀、I 113は堺・明石系のすり鉢である。I 114は磁器染付の椀。

SE 5 出土遺物 (I 115・I 116) I 115は鉄釉を施した壺の口縁部。I 116は陶器の鍋蓋。口縁端部を除いて、内外面に灰釉を施している。

SE 1 出土遺物 (I 117) I 117は土師器焼塩壺の蓋。内面に布目痕が残る。

SE 4 出土遺物 (I 118～I 129) I 118は土師器炮烙。難波分類のG類で、外面には煤が付着している。I 119～I 121は陶器。I 119は銅緑釉を施す。徳利形を呈する仏飰具であろう。I 120は灯明受皿。I 121は仏飯の脚部か。底面に回転糸切り痕が残り、垂直方向に焼成前の穿孔をもつ。鉄釉を施す。I 122～I 129は、磁器染付の椀。I 122～I 125は口縁部が端反りとなる。I 126は高い高台の付く広東椀。I 127は線描きによる文様を施している。

SE 3 出土遺物 (I 130～I 145) I 130～I 136は陶器。I 130は椀。判読できないが、胴下部に墨書がある。高台内部から畳付けにかけて墨が付着しているため、墨溜のようを用いた可能性がある。I 131は皿。I 132は煎茶椀。錆絵で16弁菊花文を描いている。I 133は鍋、I 134は鍋の蓋。I 135は水注の蓋か。I 136は土瓶の蓋。白化粧したうえに、茶・緑で文様を描いている。I 137～I 144は磁器の椀。I 140・I 141は外面に青磁釉を掛けている。I 144は見込みに赤の上絵を施す。I 145は砥石。

SE 6 出土遺物 (I 146～I 187) I 146～I 154は土師器皿。I 146～I 151は見込みに圏線がめぐる。I 147は見込み、I 148は口縁端部に煤が付着する。I 155～I 157・I 165

京都大学病院構内AG13区の発掘調査

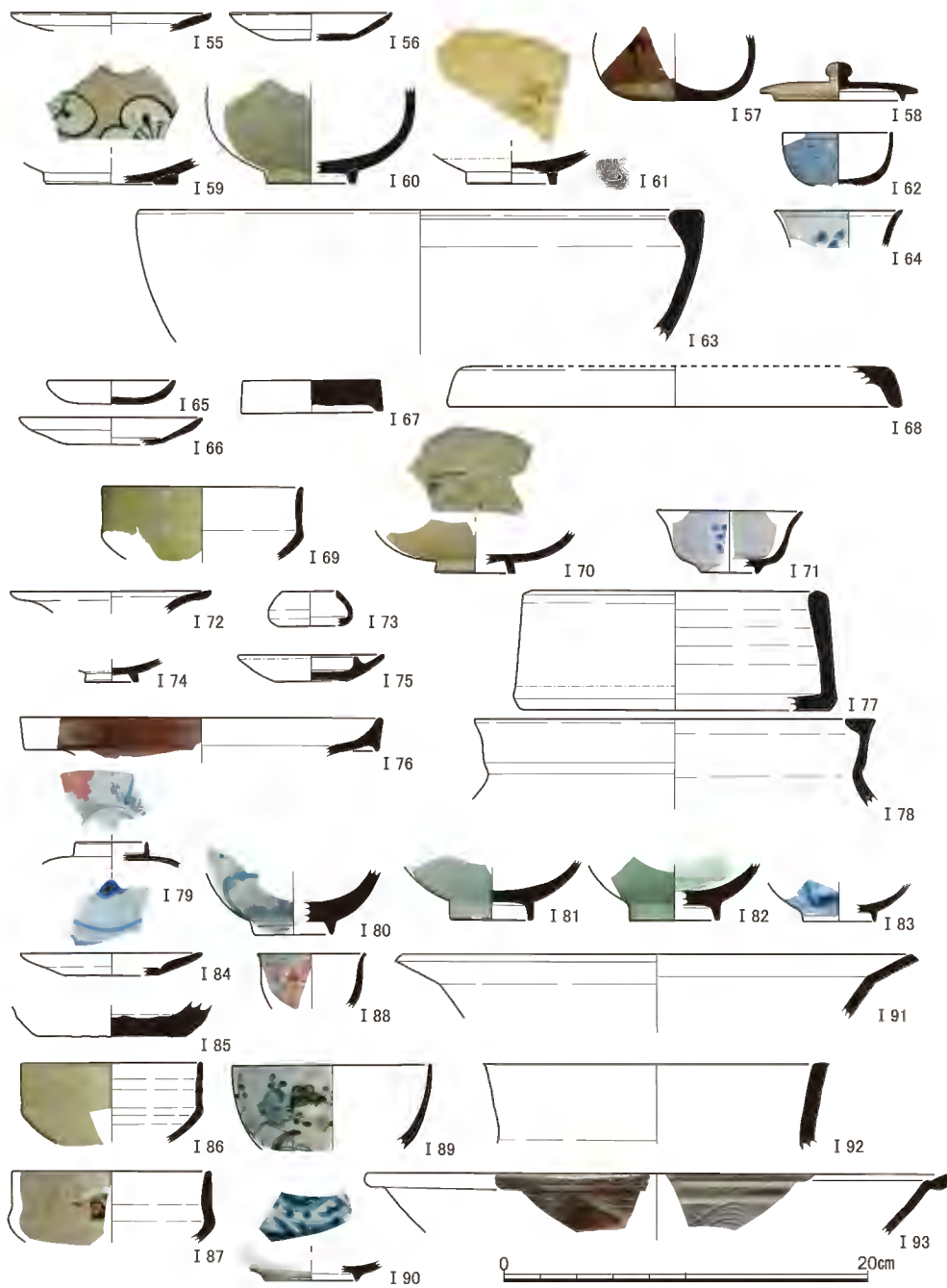


図9 SE20出土遺物 (I 55・I 56土師器, I 57～I 61陶器, I 62磁器), SE18出土遺物 (I 63土師器, I 64磁器), SX 4出土遺物 (I 65～I 68土師器, I 69・I 70陶器, I 71磁器), SE16出土遺物 (I 72・I 73土師器, I 74～I 78陶器, I 79～83磁器), SE15出土遺物 (I 84・I 91・I 92土師器, I 85～I 87・I 93陶器, I 88～I 90磁器)

遺 物

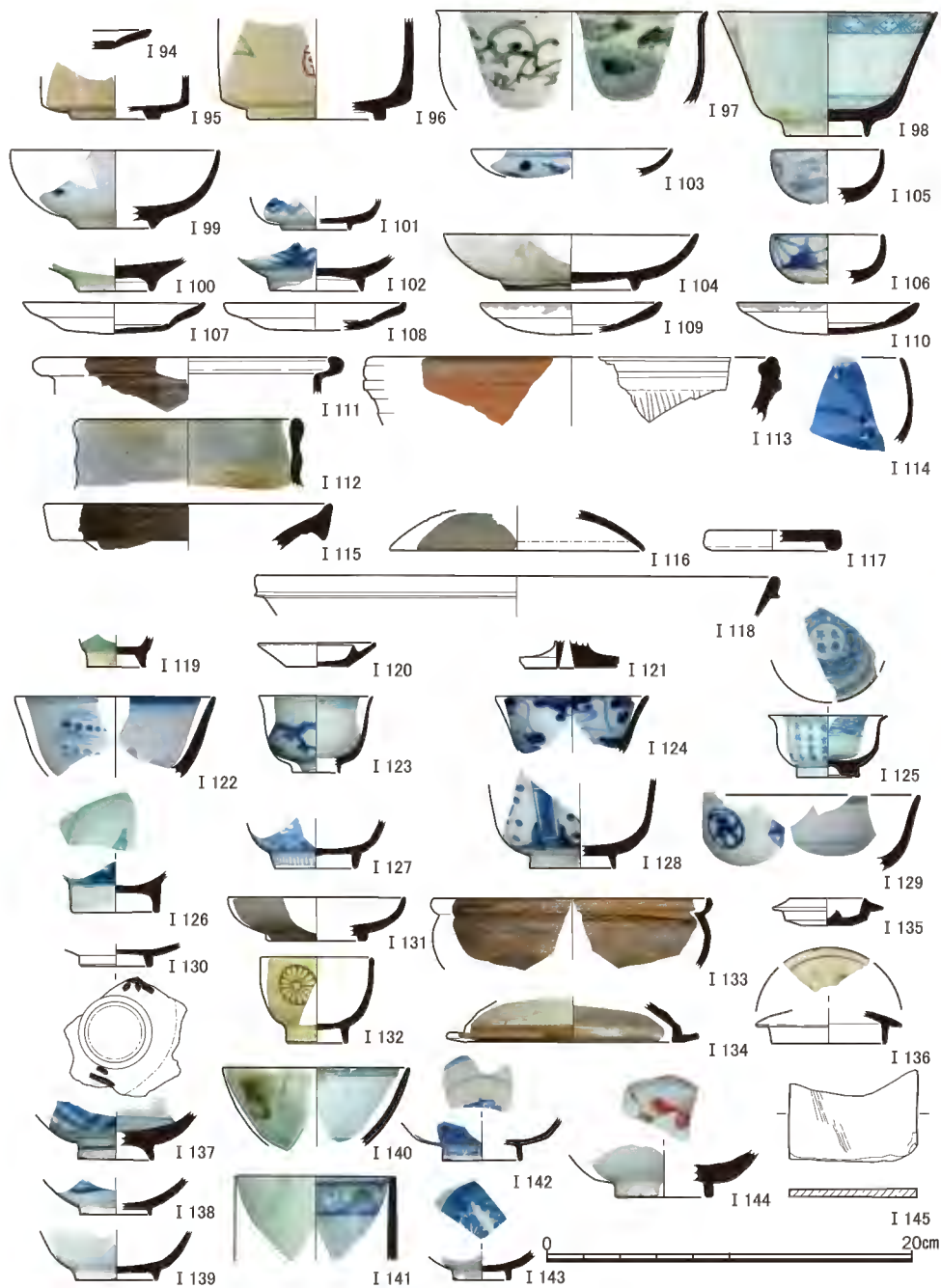


图10 SE14出土遺物 (I 94土師器, I 95·I 96陶器, I 97~I 106磁器), SE13出土遺物 (I 107~I 110土師器, I 111~I 113陶器, I 114磁器), SE 5 出土遺物 (I 115·I 116陶器), SE 1 出土遺物 (I 117土師器), SE 4 出土遺物 (I 118土師器, I 119~I 121陶器, I 122~I 129磁器), SE 3 出土遺物 (I 130~I 136陶器, I 137~I 144磁器, I 145砥石)

京都大学病院構内A G 13区の発掘調査

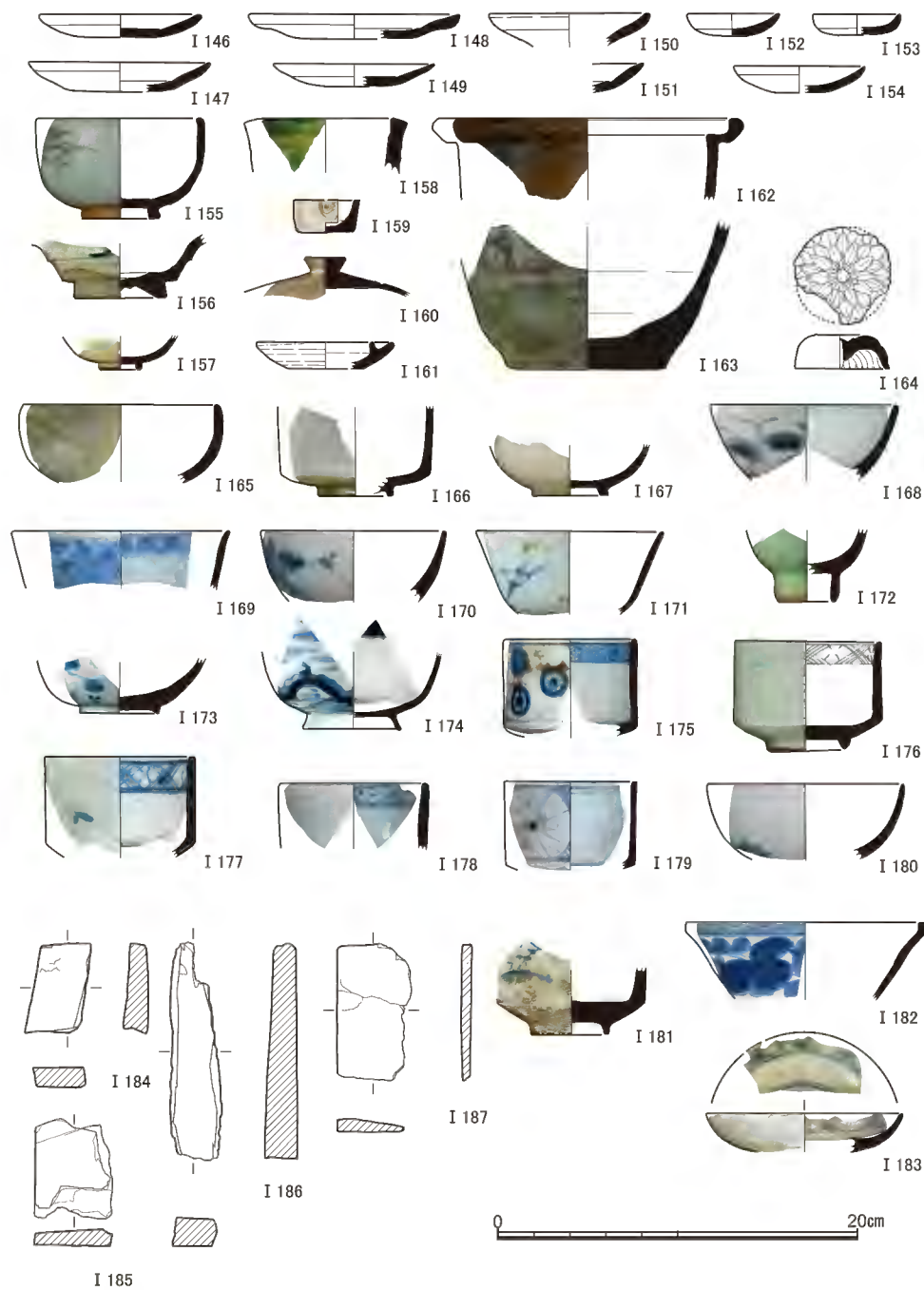


図11 SE 6 出土遺物 (I 146~ I 154土師器, I 155~ I 167陶器, I 168~ I 183磁器, I 184~ I 187砥石)

遺 物

～I 167は陶器碗。I 158・I 159は軟質施釉陶器。I 158は緑釉，I 159は透明釉を内外面に施している。I 160は陶器蓋。I 161は陶器灯明受皿。I 162は陶器鍋。内外面に鉄釉を施す。I 163は陶器の壺ないしは瓶の底部。鉄釉を施している。I 164は無釉陶器の蓋。型作りで，内外面ともに離型材の雲母が付着する。I 168～I 183は磁器。I 168～I 171・I 173～I 175・I 177・I 179・I 180・I 181は染付の碗。I 172は内外面に青磁釉を施す小碗。I 176・I 178は外面に青磁釉を施す青磁染付の碗。I 182は染付の蓋物。口縁端部の釉をかきとる。I 183は皿。I 184～I 187は砥石。

SE 2 出土遺物 (I 188～I 200) I 188は土師器炮烙。外型成形で，口縁部と体部の境を面取りしている。I 189・I 190は鉄釉を施す陶器鍋。I 191は陶器灯明皿。口縁部内面に，菊花の貼り付けをもつ。I 192～I 194は陶器蓋で，I 192・I 193は鉄釉を施し，I 194は銹絵を描いた後，透明釉を掛けている。I 195は青磁染付の鉢。底面は蛇の目凹形高台である。I 196～I 200は磁器染付の碗。I 199は焼継されており，底裏に，焼継と同じ原料で「ヒ川一」と見えるマークを入れている。

SX 3 出土遺物 (I 201～I 222) I 201は陶器甕。I 202は陶器灯明受皿。I 203・I 204は陶器灯明皿。内面に櫛描沈線をもつ。I 205～I 207は陶器碗。I 205・I 206は口縁部が端反となる碗で，ともに内面を白化粧した後，施釉している。I 207は胴下半から底部にかけて残存している。外面は露胎であり，鉄錆を用いて胴部および底裏に文字を書いているが，判読できていない。I 208・I 209は陶器蓋。I 210～I 222は磁器。I 210・I 212・I 213～I 215・I 217～I 221は染付の碗。I 215は焼継されている。I 211は上絵，I 222は上絵染付の碗。I 222は焼継の痕跡を残す。I 216は白磁の紅皿。

SP 1 出土遺物 (I 223) I 223は陶器土瓶。口径6.5cm，器高10cmをはかる。注ぎ口と体部・底部の一部を欠損する。白化粧したのち，茶・緑を用いて文様を施している。

SD 14 出土遺物 (I 224～I 231) I 224は陶器灯明皿。内面に櫛描沈線文をもつ。口縁端部外側に煤が付着する。I 225は陶器灯明受皿。I 226は肥前京焼風陶器の底部片で，底裏に「木□(下カ)弥」の刻印をもつ。I 227は備前焼広口壺。I 228～I 231は磁器。I 228は染付の仏飯。I 229は白磁の紅皿。I 230は染付の碗で，焼継をしている。I 231は染付の鉢。

SD 9 出土遺物 (I 232～I 235) I 232は陶器煎茶碗。高台に切り込みをもつ。I 233～I 235は磁器。I 233・I 234は染付の蓋と碗。I 235は白磁紅皿。

SD 8 出土遺物 (I 236～I 239) I 236は陶器灯明皿。口縁部外面に煤が付着する。

京都大学病院構内AG13区の発掘調査

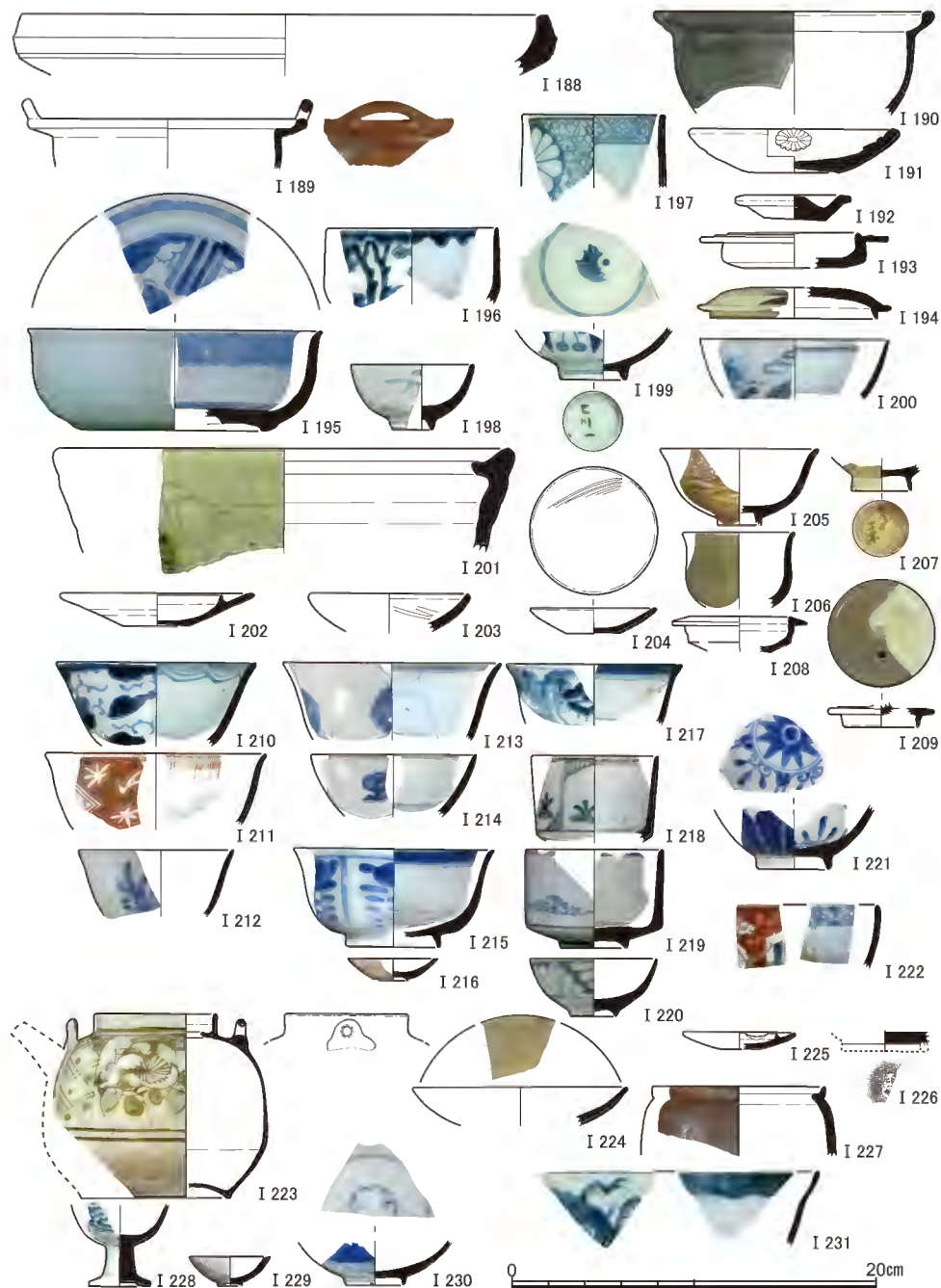


図12 SE 2 出土遺物 (I 188土師器, I 189~I 194陶器, I 195~I 200磁器), SX 3 出土遺物 (I 201~I 209陶器, I 210~I 222磁器), SP 1 出土遺物 (I 223陶器), SD14 出土遺物 (I 224~I 227陶器, I 228~I 231磁器)

遺 物

I 237～I 239は磁器染付の椀。

SD 3 出土遺物 (I 240～I 249) I 240は見込みに圈線のめぐる土師器皿。I 241は土師器炮烙。難波分類のG類。I 242は軟質施釉陶器のミニチュア椀。内面に、緑釉を施している。I 243は陶器皿。I 244・I 245は陶器椀。I 246は備前焼広口小壺。I 247は土瓶蓋。I 248は磁器染付の皿。口銹を施している。I 249は磁器染付の蓋物。口縁端部の釉をかきとっている。

SD 2 出土遺物 (I 250～I 254) I 250は陶器灯明受皿。I 251・I 252は陶器の鍋と蓋。I 252は白泥を用いて、いっちゃん描きしている。I 253・I 254は磁器染付の椀。ともに口縁部が端反りとなる。

SD 1 出土遺物 (I 255～I 264) I 255からI 262は陶器。I 255～I 257は灯明皿。内面に、I 255は櫛描文、I 257はボタン状の貼り付けをもつ。I 258は灯明受皿。I 259・I 260は土瓶の蓋。I 259は白泥を用いて、いっちゃん描きした後、I 260は白泥と銹絵を施した後、透明釉を施釉している。I 261は水注の蓋か。I 262は蓋物。I 263・I 264は磁器で、I 263は蓋、I 264は椀である。

SE 4・SE 3・SE 6・SE 2・SX 3・SP 1・SD 14・SD 9・SD 8・SD 3・SD 2・SD 1は18世紀後半以降19世紀中葉ごろまでの年代が与えられる。

SD 13 出土遺物 (I 265～I 269) I 265は灰釉を施す陶器の蓋。仏餉具の水玉の蓋であろう。I 266は磁器染付の椀。I 267は磁器上絵染付の盃。I 268は磁器染付の湯飲み茶碗。銅板によるプリントである。I 269は磁器染付の皿。

SE 10 出土遺物 (I 270～I 275) I 270～I 275は磁器。I 270～I 272は染付の椀で、I 271は銅板プリント、I 272は型紙刷りである。I 273は染付の皿で、見込みの文様は型紙刷り。I 274は赤絵の椀。I 275は染付の皿。

SD 13・SE 10は明治時代に下る遺物である。

土 製 品 (I 276～I 547) 遺構および遺物包含層から出土したおもな土製品を解説しておく。

I 276～I 311は人形の類。モチーフは、人物を象ったもの (I 276～I 299) と、狛犬・狐・猿・牛馬・魚・蛙など動物を象ったもの (I 300～I 311) に大別できる。土師質のものが主体を占めるが、陶製 (I 300) および軟質施釉陶製 (I 286・I 287・I 290・I 292・I 294・I 303・I 307・I 310) もある。後者には、透明釉のみ施す場合と、I 286・I 290・I 292のように部分的に緑彩を施した後に透明釉を施す場合、I 303のように底面を除く全

京都大学病院構内A G13区の発掘調査

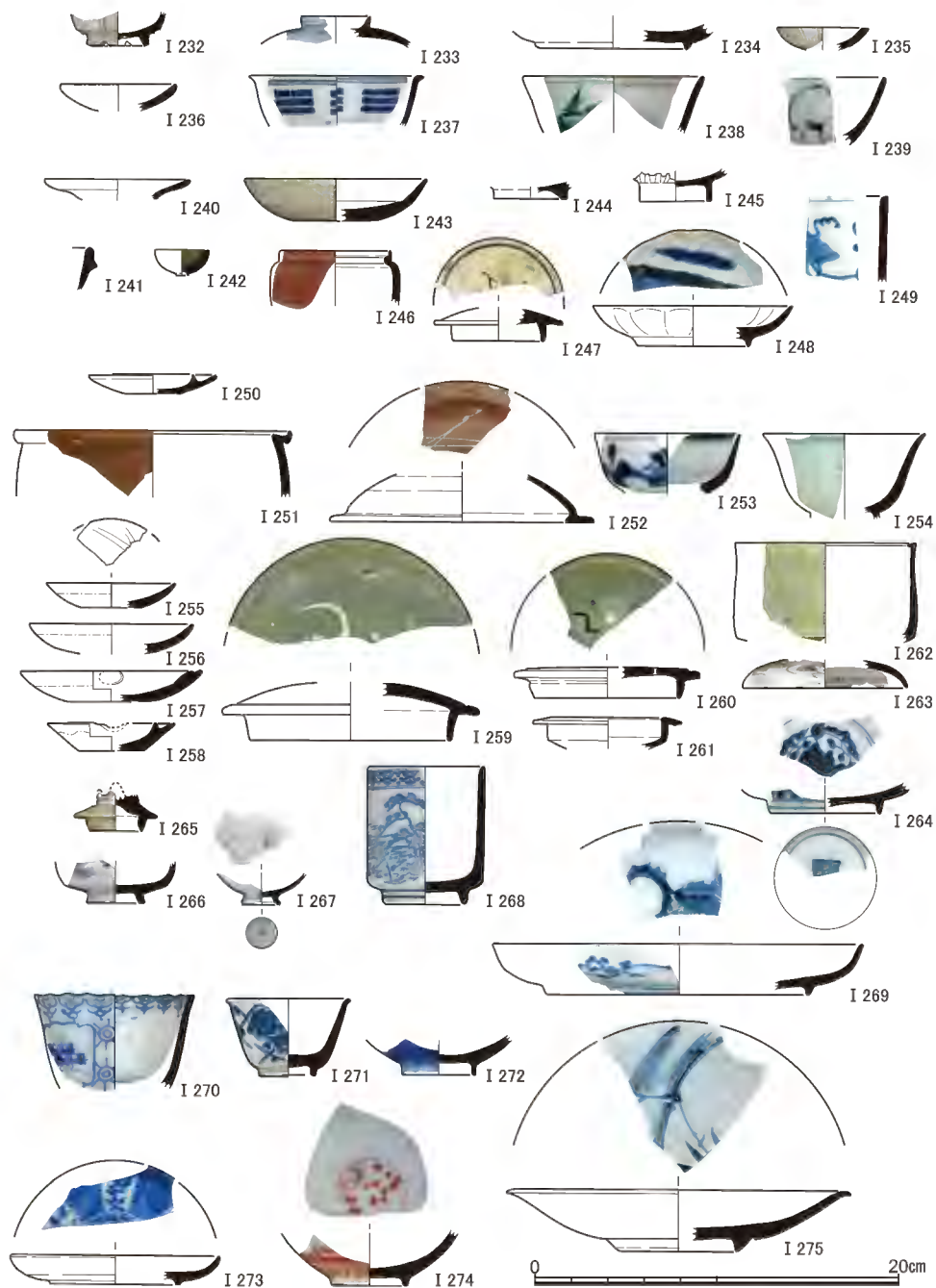


図13 S D 9 出土遺物 (I 232陶器, I 233~I 235磁器), S D 8 出土遺物 (I 236陶器, I 237~I 239磁器), S D 3 出土遺物 (I 240・I 241土師器, I 242~I 247陶器, I 248・I 249磁器), S D 2 出土遺物 (I 250~I 252陶器, I 253・I 254磁器), S D 1 出土遺物 (I 255~I 262陶器, I 263・I 264磁器), S D 13 出土遺物 (I 265陶器, I 266~I 269磁器), S E 10 出土遺物 (I 270~I 275磁器)

遺 物



図14 土製品(1) (I 276~ I 291人形) 縮尺1/2

京都大学病院構内A G13区の発掘調査

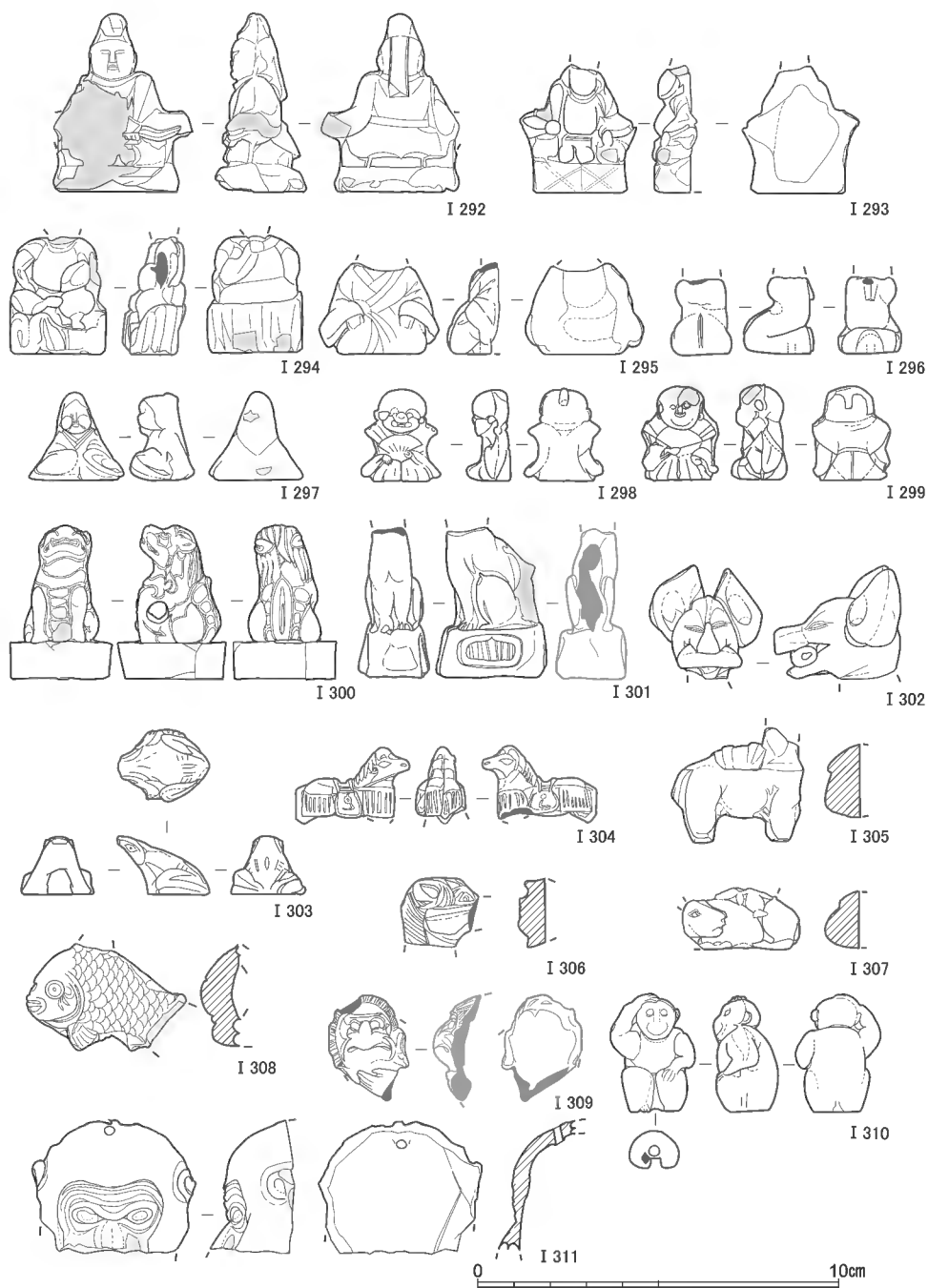


図15 土製品(2) (I 292~I 311人形) 縮尺1/2

遺 物

面に緑釉を施す場合がある。

土師質のものでは橙褐色を呈する胎土と灰白色を呈する胎土が認められるが、施釉品は、いずれも灰白色を呈する胎土を用いている。成形は、正面と背面をそれぞれ型で作った後、貼り合わせるものがほとんどであるが、I 296は手捻り成形である。型合わせのものは、中が中空タイプと中実タイプの2種類が認められる。

これらの中には、径2～3mmの小孔を底面中央から上方へ向けてあけているものがある。これは施釉品（I 287・I 310）、土師質品（I 276・I 278・I 279・I 281・I 296・I 299）のいずれにも認められる。施釉品は中空タイプ（I 287）と中実タイプ（I 310）ともにみられるが、小孔をもつ土師質品はすべて中実タイプである。

I 312～I 314は円錐形を呈する土製品。直径3～3.5cm、高さ2～2.5cm。I 313は全面に離れ砂が付着しており、I 312・I 314も含めて、型作り成形と考える。I 313は側面に溝がらせん状にめぐり、I 312は5条、I 314は8条の小溝が同心円状にめぐっている。I 313は上面にも型押し痕跡が残り、I 312・I 314は指押さえて成形しており、I 314は指紋の痕跡が顕著に残っている。

I 315～I 317はミニチュアのままごと道具。いずれも型作りである。I 315は白色の胎土を用いた土師質の七輪。I 316は土師質羽釜。鏝の部分で上下分割し型作りしたのち、貼り合わせている。離型材の雲母が付着している。I 317は軟質施釉陶器の片口。内面に透明釉を施している。

I 318は土師質の鳩笛。型作りで、黒・茶の着彩が一部に残っている。I 319・I 320は土師質の男根状土製品。I 319は灰白色、I 320は橙褐色を呈する。

I 321～I 547は泥面子の類。I 321～I 331は、芥子面と呼称されるもので、人物や動物などを型抜きしている。90点出土。全長は0.8cm～4.8cm、最大幅は1.5cm～4.0cmまでであるが、長さ、幅ともに2cm台のものが多数を占める。体全体を表現しているI 323を除いて、顔面のみを表現している。裏面は、指押さえて成形しているため多少の凹凸はあるものの、おおむね平坦であるが、図示したI 329を含めて、内側に大きく凹んでいるものが7点ある。色調は、I 329が灰白色を呈する以外は、淡橙色～赤褐色を呈している。I 332～I 547は、面打（めんちょう）と呼称されるもので、型押しにより上面に文様を施している。885点出土。文様には、文字・家紋・将棋の駒・動物・貨幣など多種多様であり、文様のバリエーションに配慮して掲載した。上面形が円形を呈するもの860点以外に、四角形（I 381・I 457・I 460）、六角形（I 409・I 410・I 412～I 414）、王冠形（I 491・I 547）

京都大学病院構内AG13区の発掘調査

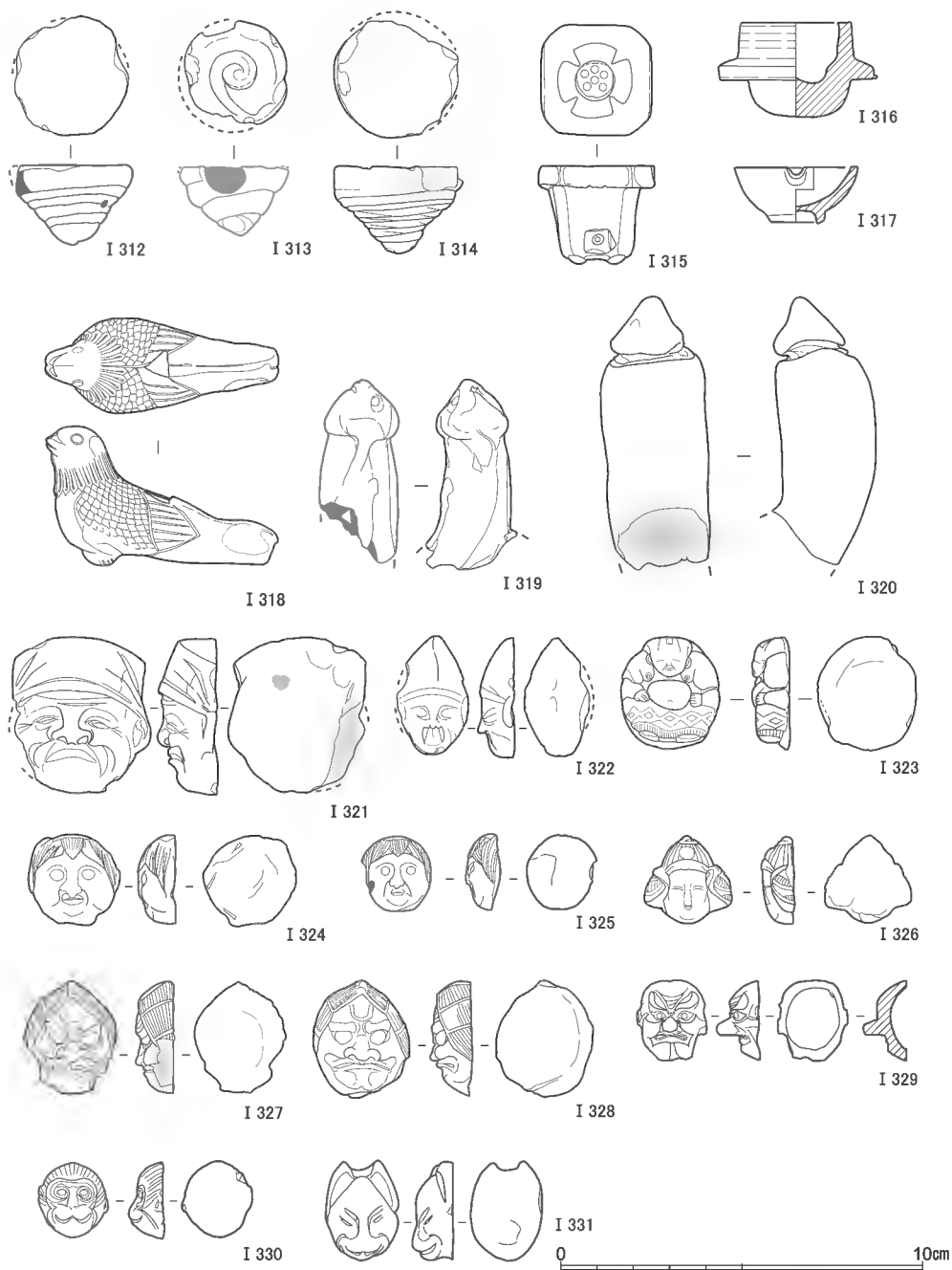


図16 土製品③ (I 312~I 314玩具?, I 315~I 317ミニチュア, I 318鳩笛, I 319・I 320男根状土製品, I 321~I 331泥面子) 縮尺1/2

遺物



図17 土製品(4) (I 332~ I 385泥面子) 縮尺1/2

京都大学病院構内A G13区の発掘調査



図18 土製品(5) (I 386~ I 439泥面子) 縮尺1/2

遺 物

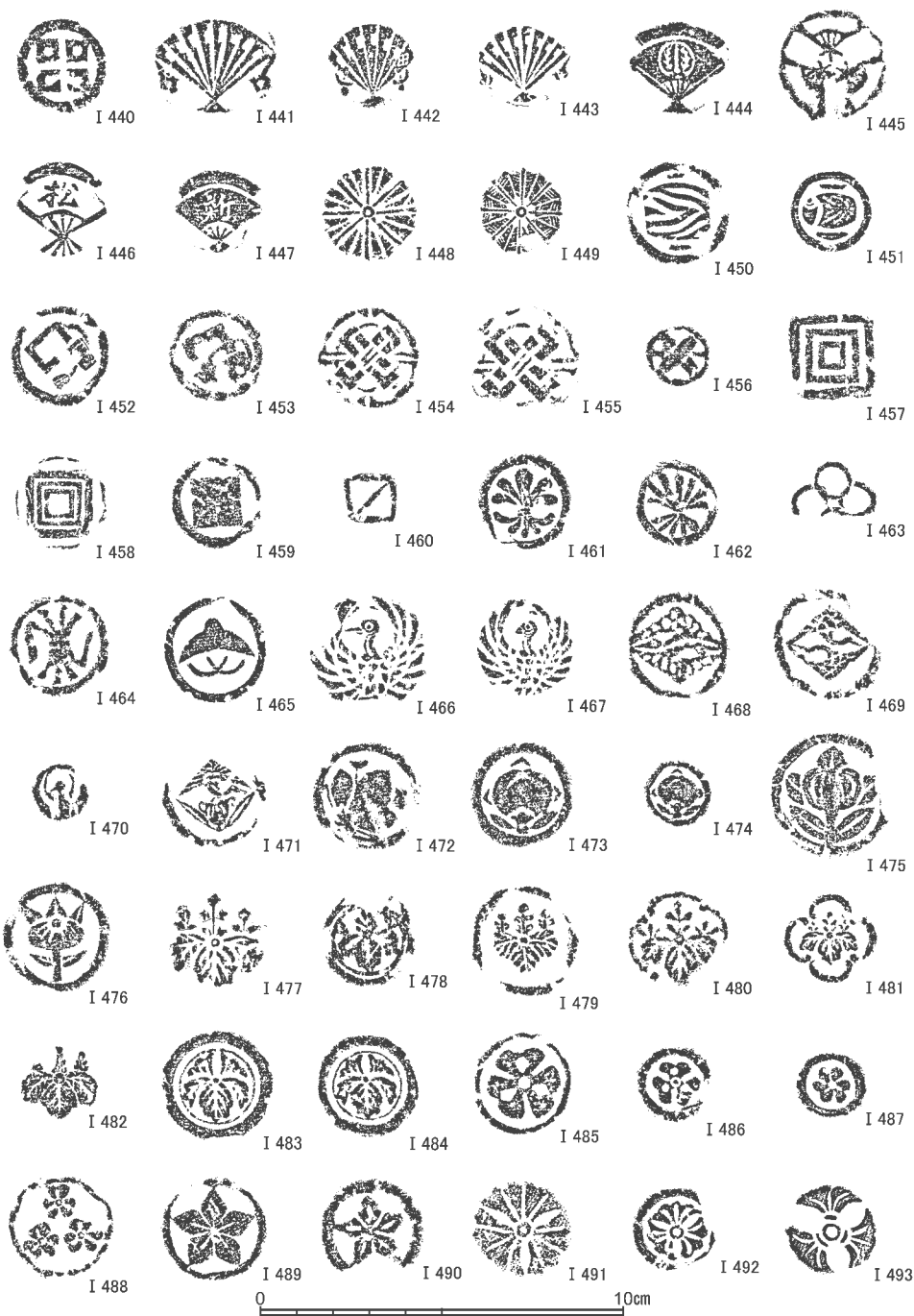


图19 土製品(6) (I 440~ I 493泥面子) 縮尺1/2

京都大学病院構内AG13区の発掘調査



図20 土製品(7) (I 494~ I 547泥面子) 縮尺1/2

小 結

などが合わせて25点みとめられる。

円形を呈する860点のうち径の判別する673点の大きさは、最小値が直径8.0cm、最大値が47.2cmで、平均値は28.9mmである。5mm区分で度数分布を見てみると、5mm以上10mm未満が1点、10mm以上15mm未満が0点、15mm以上20mm未満が16点、20mm以上25mm未満が56点、25mm以上30mm未満が334点、30mm以上35mm未満が247点、35mm以上40mm未満が14点、40mm以上45mm未満が2点、45以上50mm未満が3点となり、25mm以上35mm未満のものが多数を占めている。

円形以外の四角形・六角形・王冠形も含めた厚み（計測可能点数874点）は、最小値が3.8mm、最大値が14.1mmで平均値は8.2mmである。2mm区分で度数分布を見ると、2mm以上4mm未満1点、4mm以上6mm未満27点、6mm以上8mm未満343点、8mm以上10mm未満423点、10mm以上12mm未満72点、12mm以上14mm未満7点、14mm以上16mm未満が1点となり、6mm以上10mm未満に集中している。

銭 貨（I 548～I 568） 包含層（黒灰色土）より出土した銭貨を一括して報告する。I 548は洪武通宝。I 549～I 566は寛永通宝。I 549は背面に十一波をもつ四文銭、I 550～I 566は無背銭である。I 567は文久永宝。背面に十一波をもつ。

I 568（図版5 - I 568）は二朱金である。縦13.1mm、横8.0mm、厚さ1.6mm、重さは1.5gをはかる。表面には上部に桐文、下部に「二朱」の文字が刻印されており、裏面には上部に「光次」の署名、下部に花押が刻印されている。刻印の特徴などから判断して、天保3年（1832）に発行された天保二朱金ではないかと考える。

5 小 結

今回の調査では、中世から近世・近代にいたる遺構・遺物が発見され、この地一帯の土地利用の変遷を解明するための材料を得ることができた。

遺跡の基盤は粗砂や礫・シルトから構成される。高野川系流路あるいは鴨川によって形成された自然堆積層で、2m以上の厚みをもっている。この堆積物と、ここから出土した遺物の観察から、調査地点は13世紀ごろまでは氾濫原であったが、その後、河原が徐々に西へと移動した結果、16世紀ごろには水がほとんどひいていた状況が明らかとなった。

江戸時代の開発は、このような流路の西への移動と固定化を背景にして始まったと想定できる。江戸時代の遺物包含層は第2層と第3層の2枚を確認できるが、第2層は18世紀後半以降19世紀、第3層は17世紀～18世紀前半の遺物を包含している。また、調査区西辺

京都大学病院構内AG13区の発掘調査

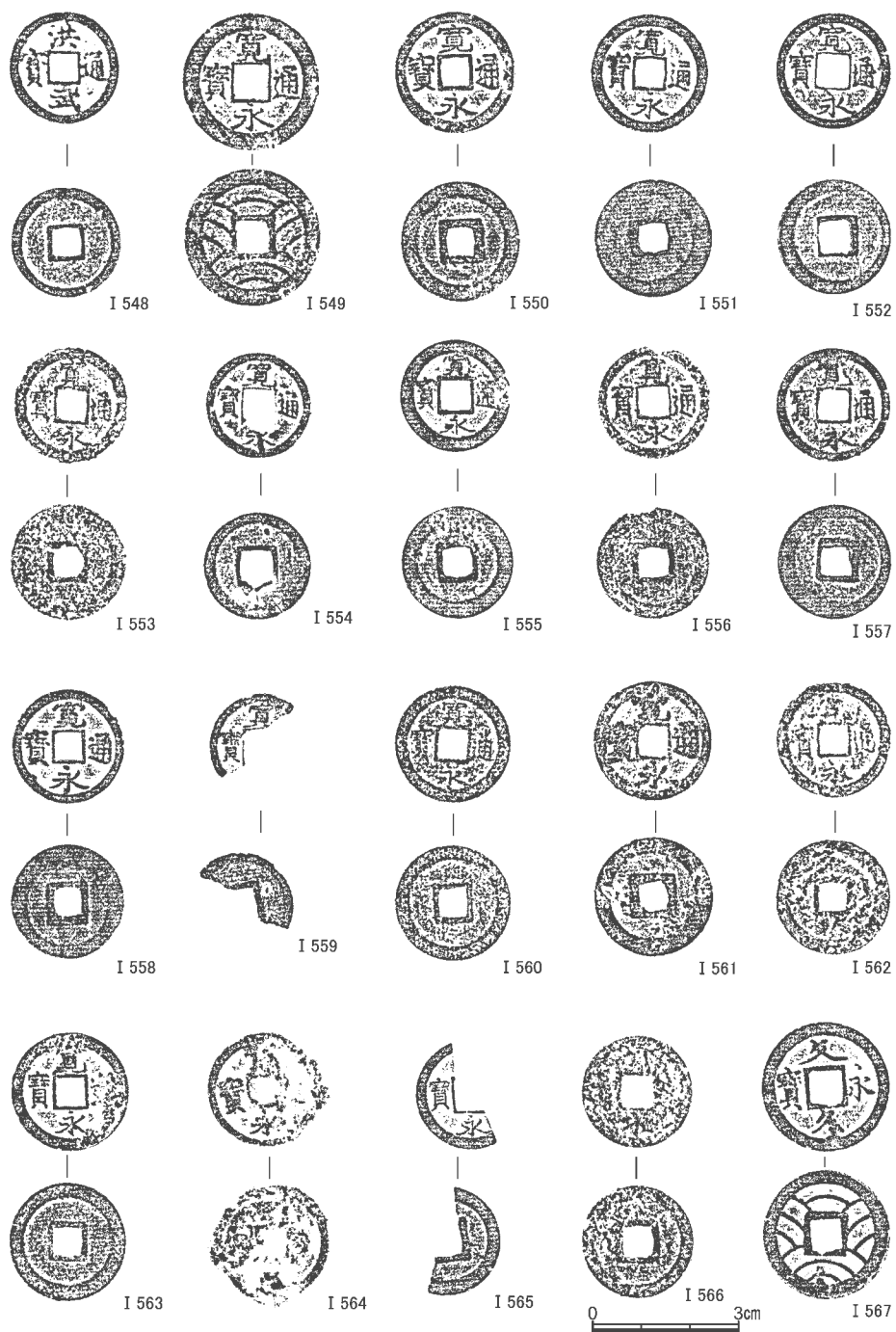


図21 銭貨 (I 548洪武通寶, I 549~ I 566寛永通寶, I 567文久永寶) 縮尺2/3

小 結

で砂礫層の最上部に堆積する黄褐色土は、中世の土器・陶磁器の細片を主体としつつも、江戸時代の陶磁器片も少量包含していた。

このような状況から判断して、17～18世紀前半段階には、農地としての開発が開始されたことがうかがえる。ただし、この段階の遺構は散漫で遺物も少ないことなどから、なお本格的な開発には至らなかったと考えられる。遺構や遺物のあり方から見ると、聖護院村の畑地としての本格的な開発は、18世紀後半以降とみられるだろう。その後この地は、絵図・地積図などによれば幕末に練兵場となり明治期には牧畜場となってから大学敷地へと変遷した。

現地調査および整理作業は千葉豊と富井眞が担当し、磯谷敦子・下坂澄子・長尾玲・中山太良・春日俊成・飯田恵里奈・越坂裕太・菊永苑花・平山珠美・白井健太・工藤二郎・西川華子が測量や出土資料の実測・復元などをおこなった。なお、堆積物観察について、増田富士雄氏（同志社大学）から貴重なご教示を賜りました。末尾ながら、記して感謝いたします。

参 考 文 献

- 石田志朗・中村徹也・中村友博 1972年 『京都大学理学部構内遺跡発掘調査の概要』
- 泉 拓良 1977年 「京都大学植物園内遺跡」『仏教芸術』115号
- 泉 拓良・三宅由美 1986年 「京都大学北部構内B E 3314区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和58年度』
- 伊藤淳史 1999年 「北白川追分町弥生時代遺跡の展開—北部構内B A 30区（追分地蔵地点）出土資料の紹介—」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1995年度』
- 伊藤淳史 2010年 「鴨東の古代—古墳～奈良時代の遺跡調査成果からみた集団動態—」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2007年度』
- 梅原末治 1923年 「京都帝国大学農学部敷地ノ石器時代遺跡」『京都府史蹟勝地調査會報告 第5冊』
- 1935年 「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告 第16冊』
- 1936年 「撰津阿武山古墓調査報告」『大阪府史蹟名勝天然紀念物調査報告 第7輯』
- 小野山節・都出比呂志 1973年 『高槻市安満遺跡の条里遺構』
- 小野山節・中村徹也 1976年 『京都大学教養部A号館増築予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要』
- 梶原義実 2003年 「13世紀における「中央官衛系」瓦工の編成と展開—京都大学医学部構内A O 18区の資料から—」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1999年度』
- 京大調査会（京都大学農学部構内遺跡調査会・京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所構内遺跡調査会）
1977年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和51年度』
- 京大埋文研（京都大学埋蔵文化財研究センター）
1978年 a 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』
1978年 b 『京都大学埋蔵文化財調査報告第1冊—京大農学部遺跡B G 36区—』
1979年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和53年度』
1980年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和54年度』
1981年 a 『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ—白河北殿北辺の調査—』
1981年 b 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和55年度』
1983年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和56年度』
1984年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』
1985年 『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ—北白川追分町縄文遺跡の調査—』
1986年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和58年度』
1987年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和59年度』
1988年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和60年度』
1989年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1986年度』
1990年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1987年度』
1992年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1988年度』
1993年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1989～1991年度』
1995年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1992年度』
1997年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1993年度』

参 考 文 献

- 1998年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1994年度』
 1999年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1995年度』
 2000年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1996年度』
 2002年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1997・1998年度』
 2003年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1999年度』
 2005年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2000年度』
 2006年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2001年度』
 2007年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2002年度』
 2008年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2003年度』
- 京大文総研（京都大学文化財総合研究センター）
 2009年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2004～2006年度』
 2010年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2007年度』
- 京都市文化市民局 2007年 『京都市遺跡地図台帳【第8版】』
- 京都市埋文研（京都市埋蔵文化財研究所）
 1991年 『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
- 島田貞彦 1924年 「京都市北白川追分町発見の石器時代遺跡」『考古学雑誌』第14巻第5号
- 島田貞彦・水野清一・小川五郎・三宅宗悦
 1929年 「撰津国高槻「撰津農場」石器時代遺跡調査報告」『人類学雑誌』第44巻第7号
- 清水芳裕 1991年 「遺跡の形成と地形の変化」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ』
- 千葉 豊 1995年 「京都大学病院構内A G 14区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1992年度』
- 千葉豊・森下章司 1993年 「京都大学病院構内A E 12・A E 13区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1989～1991年度』
- 富井 眞 1998年 「北白川追分町遺跡出土の縄土器—北白川C式の成立を考える—」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1994年度』
- 富井眞・笹川尚紀 2010年 「京都大学病院構内A G 16区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2007年度』
- 中村徹也 1973年 『京都大学農学部総合館周辺埋蔵文化財発掘調査の概要』
 1974年 a 『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅰ』
 1974年 b 『京都大学理学部ノートバイオトロン実験装置室新営工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要』
- 1975年 『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅱ』
- 難波洋三 1992年 「徳川氏大坂城期の炮烙」『難波宮址の研究 第九』大阪市文化財協会
- 浜崎一志 1984年 「京都大学病院西構内A F 15区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』
- 藤岡謙二郎 1973年 「北白川扇状地と教養部構内発見の遺物包含層並びにその先史地理学的意義」『人文』第19集（京都大学教養部）
- 堀内寛昭 2001年 「土製小壺と茶の湯の“つぼつぼ”」『土の中の京都 2』京都市埋蔵文化財研究所
- 横山浩一・佐原眞 1960年 『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第1部日本先史時代
- 吉江 崇 2006年 「中世吉田地域の景観復原」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2001年度』

京都大学構内遺跡調査要項 2008年度

京都大学文化財総合研究センター要項

- 第1条 この規程は、京都大学文化財総合研究センター（以下「文化財総合研究センター」という。）の組織等に関し必要な事項を定めるものとする。
- 第2条 文化財総合研究センターは、文化財の調査・保存・活用に関する総合的教育研究を行うとともに、京都大学敷地内の埋蔵文化財についての調査研究及びその保存のため必要な業務を行う。
- 第3条 文化財総合研究センターに、センター長を置く。
- 2 センター長は、京都大学の専任の教授をもって充てる。
 - 3 センター長の任期は、2年とし、再任を妨げない。
 - 4 センター長は、文化財総合研究センターの所務を掌理する。
 - 5 センター長に事故があるときは、あらかじめセンター長が指名する者がその職務を代理する。
 - 6 センター長が欠けたときは、あらかじめセンター長が指名する者がその職務を行う。
- 第4条 文化財総合研究センターに、その重要事項を審議するため、協議員会を置く。
- 2 協議員会の組織及び運営に関し必要な事項は、協議員会が定める。
- 第5条 文化財総合研究センターに、学際的教育研究拠点の構築に係る関係機関等との連携に関する重要事項についてセンター長の諮問に応ずるため、連携協議会を置く。
- 2 連携協議会の組織及び運営に関し必要な事項は、連携協議会が定める。
- 第6条 文化財総合研究センターは、次に掲げる研究科の教育に協力するものとする。
- 文学研究科
工学研究科
- 第7条 文化財総合研究センターに置く事務組織については、京都大学事務組織規程（平成16年達示第60号）の定めるところによる。
- 第8条 この規程に定めるもののほか、文化財総合研究センターの内部組織については、センター長が定める。

センター長

上原 真人（文学研究科教授）

協議員会委員

上原 真人（文学研究科教授）
清水 芳裕（センター准教授）
藤井 譲治（文学研究科教授）
竹村 恵二（理学研究科教授）
高橋 康夫（工学研究科教授）
荒木 茂（アジア・アフリカ地域研究科教授）
大野 照文（総合博物館教授）

センター教員

清水 芳裕
千葉 豊

伊藤 淳史
富井 眞
笹川 尚紀

センター教務補佐員

磯谷 敦子
北尾 敬子
柴垣理恵子

センター事務室

古市 博（文学研究科・事務室長）
松本 一代（派遣）

京都大学構内遺跡のおもな調査

表1 京都大学構内遺跡のおもな調査

(地点は図版1を参照, 文献中「埋」は京大埋文研, 「調」は京大調査会, 「文」は京大文総研をさす。)

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
1923	農学部	1・2	濱田耕作	表採掘			縄文土器, 石器	梅原23, 鳥田24	
1924	農学部	不明	藤本理三郎				石棒	横山・佐原60	
1929	大阪府満		高田貞彦 水野清一 ほか	発掘			弥生土器	鳥田・水野ほか29	
1934	大阪府阿武山古墳		梅原末治	発掘			乾漆棺, 玉飾枕	梅原36	
1935	北白川町小倉		梅原末治				縄文土器, 石器	梅原35	
1956	農学部	3	羽館易	採集			縄文土器		
1971	農学部	4	石田志朗	採集			弥生土器	埋79	
1972	農学部	5		採集			石棒		
1972	大阪府満		小野山節 都出比呂志	事前発掘	1500	条里の溝	弥生土器	小野山・都出73	建物をずらし条里の溝を保存
1972	追分地蔵	6	石田志朗 中村徹也	事前発掘	600		弥生土器	石田ほか72, 伊藤99	
1972	教養部	7	藤岡謙二郎	工事中採集・実測			縄文土器	藤岡73	
1973	農学部	8	中村徹也	事前発掘	13	瓦溜	縄文土器, 瓦(平安)	埋78 b	瓦溜埋戻し
1973	農学部	9	中村徹也	事前発掘	600		縄文土器, 土師器	中村73	
1973	植物園	11	中村徹也	事前発掘	400	縄文後期甕棺・配石遺構	縄文土器	中村74 b, 泉77	甕棺・配石遺構の移築を決定
1974	農学部	12	中村徹也	事前発掘	800		縄文土器	中村74 a	
1974	農学部	13	中村徹也	事前発掘	800		縄文土器	中村75	
1975	教養部	14	小野山節 中村徹也	事前発掘	750		土師器, 瓦, 陶磁器	小野山・中村76	
1976	農学部 B E 33区	16	泉拓良	事前発掘	900	縄文晩期土壙墓	縄文土器, 土師器, 瓦	調77	
1976	病院 A E 15区	19	岡田保良	事前発掘	2200	古代・中世溝, 池, 土器溜	土師器, 瓦, 陶磁器	調77, 埋81 a	
1976	植物園 B D 35区	29	吉野治雄	保存				調77	甕棺・配石の移築復元
1976	病院 A H 17区	34	泉拓良	事前発掘	200	近世溝, 井戸, 集石	土師器, 瓦	埋78 a	
1976	教養部 A S 23区	35	吉野治雄	試掘	10	溝	縄文土器, 須恵器	埋77	
1976	北学部 B J 33区	36	宇野隆夫	試掘	10		縄文土器	埋77	
1976	和歌山県瀬戸		丹羽佑一	事前発掘	300	縄文時代土壙墓	縄文土器, 人骨	埋78 a	
1977	病院 A F 14区	39	岡田保良 宇野隆夫	事前発掘	800	古代護岸, 溝, 井戸	土師器, 瓦, 陶磁器	埋78 a, 埋81 a	
1977	医学部 A O 18区	41	泉拓良 吉野治雄	事前発掘	1200	中世溝, 土器溜, 井戸	土師器, 瓦, 陶磁器	埋79, 梶原03	
1977	北電氣部	43	吉野治雄 宇野隆夫	立合		溝, 土坑	須恵器, 土師器	埋78 a	

京都大学構内遺跡調査要項

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
1977	教養部 A Q23区 A N23区	48	宇野 隆夫	試掘	80	溝	弥生土器, 土師器, 瓦	埋79	
1977	白河北殿 比定地 A A18区	49	岡田 保良	試掘	40	溝	土師器, 瓦, 陶磁器	埋79	
1978	理学部 B E29区	54	岡田 保良 宇野 隆夫 吉野 治雄	事前発掘	500	弥生中期方形周溝墓, 中世火葬塚	弥生土器, 土師器, 瓦	埋79	火葬塚と方形周溝墓を現地保存
1978	農学部 B G32区	55	泉 拓良 宇野 隆夫	事前発掘	100	縄文土坑, 古代溝, 土坑	縄文土器, 土師器	埋79	
1978	北 部 B G31区	56	泉 拓良 宇野 隆夫	事前発掘	650	縄文晩期埋没林	縄文土器	埋80, 埋85	
1978	本 部 A W28区	57	岡田 保良 吉野 治雄	事前発掘	500	近世白川道	陶磁器, 土師器, 銭貨	埋80	
1978	本 部 A Y22区	60	泉 拓良	立 合		高野川旧河道		埋79	
1978	医学部 A N19区	64	吉野 治雄	立 合		井戸, 溝	弥生土器	埋79, 埋80	
1979	北 部 B H37区	66	吉野 治雄	試掘	46	土坑	土師器, 須恵器	埋80	
1979	教養部 A M24区	69	岡田 保良 清水 芳裕	試掘	8		弥生土器, 土師器	埋80	
1979	本 部 A Z30区	71	西川 幸治 浜崎 一志	試掘	30	中世溝	土師器, 瓦, 瓦器	埋80	
1979	医学部 A P19区	74	清水 芳裕 五十川 伸矢 吉野 治雄	事前発掘	2776	中世溝, 井戸, 土器溜	土師器, 瓦, 陶磁器, 旧石器	埋81 b	
1979	本 部 A T27区	75	五十川 伸矢	事前発掘	400	奈良後期竪穴住居, 中世土壙墓, 近世道路	土師器, 須恵器, 白磁	埋81 b	竪穴住居跡を現地保存
1979	北 部 B D32区	79	泉 拓良	立 合			瓦(平安)	埋80	
1980	本 部 A T27区	89	泉 拓良	事前発掘	115	近世道路, 堀	土師器, 近世陶磁器	埋81 b	
1980	本 部 A X28区	90	泉 拓良 五十川 伸矢 浜崎 一志	事前発掘	1120	近世白川道, 中世土器溜, 井戸, 建物	土師器, 瓦, 陶磁器, 銅鏃(弥生), 磨製石鏃	埋83	
1980	京都府 美 月		泉 拓良 清水 芳裕 五十川 伸矢 浜崎 一志 吉野 治雄	事前発掘	1468	弥生中期・後期水路, 土坑, 中世土器溜	弥生土器, 打製石斧, 瓦器, 陶磁器	埋83	立合調査中に遺跡を発見, 工事を中断し発掘調査
1980	教養部 A O21区	91	吉野 治雄	事前発掘	112	中世井戸, 土壙墓	土師器, 瓦器, 陶磁器	埋83	
1980	教養部 A M22区	93	吉野 治雄	立 合		火葬墓, 石列	瓦器, 陶器	埋81 b	
1980	本 部 実験排水	98	清水 芳裕	立 合		流路, 中世土器溜	土師器, 丸瓦	埋83	遺構実測
1981	理学部 B D30区	109	泉 拓良 浜崎 一志	事前発掘	272	古代建物, 近世瓦溜	土師器, 瓦, 陶磁器	埋83	

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
1981	和歌山県瀬戸		泉 拓良 清水 芳裕 五十川伸矢 浜崎 一志	事前発掘	1500	弥生土坑, 弥生配石, 古墳時代土坑	縄文土器,硬 玉管玉,弥生 土器,製塩土 器	埋84	
1981	本 部 A X28区	110	五十川伸矢 飛野 博文	事前発掘	34	中世土器溜	土師器,瓦,陶 磁器,硯	埋83	
1981	教 養 部 A P22区	111	五十川伸矢 飛野 博文	事前発掘	1716	古墳,古代 梵鐘鑄造遺 構,中世門, 溝,墓	縄文土器,弥 生土器,須恵 器,土師器,鑄 型,溶解炉	埋84	梵鐘鑄造遺 構を現地保 存
1981	京 都 市 本 山			分布調査			縄文土器,緑 釉陶器,灰釉 陶器	埋83	
1982	京 都 府 中 海 道		泉 拓良	試 掘	20	中世土器溜	縄文土器,土 師器	埋84	
1982	病 院 A F15区	122	清水 芳裕 浜崎 一志	事前発掘	1028	中世井戸, 溝	白磁	埋84	
1982	農 学 部 B F33区	123	清水 芳裕 浜崎 一志	事前発掘	787	縄文住居 跡,中世土 坑	縄文土器,土 師器	埋84	
1982	和歌山県瀬戸		泉 拓良	事前発掘	297	古代製塩炉	縄文土器,弥 生土器,製塩 土器	埋84	古代製塩炉 を移築保存
1982	本 部 A T29区	124	泉 拓良 飛野 博文	事前発掘	890	中世濠,建 物	土師器,瓦器, 陶磁器	埋86	
1982	農 学 部 B E33区	125	泉 拓良 飛野 博文	事前発掘	803	中世・近世 水田,溝	土師器,瓦器, 陶磁器	埋86	
1983	医 学 部 A N20区	134	泉 拓良 五十川伸矢	事前発掘	863	中世井戸, 土取り穴	須恵器,瓦器, 土師器	埋86	
1983	北 部 B F31区	135	清水 芳裕 五十川伸矢	事前発掘	737	縄文埋没 林,古代・中 世溝	縄文土器,土 師器,緑釉陶 器	埋87, 富井98	
1983	医 学 部 A M19区	139	泉 拓良 浜崎 一志	立 合		中世土取り 穴	土師器,瓦器, 石鍋	埋86	
1984	病 院 A F19区	141	浜崎 一志 宮本 一夫	事前発掘	863	近世池,井 戸,野壺	縄文土器,蓮 月焼	埋87	
1984	病 院 A J19区	142	清水 芳裕 浜崎 一志	事前発掘	260	中世土坑, 近世土取り 穴	土師器,近世 陶磁器	埋87	
1984	医 学 部 A N18区	143	五十川伸矢 宮本 一夫	事前発掘	1920	中世井戸, 土取り穴, 中世梵鐘鑄 造遺構	土師器,瓦器, 鑄型	埋88	
1985	北 部 B J31区	153	清水 芳裕 宮本 一夫	事前発掘	624	古代溝,建 物跡,土坑, 近世溝	弥生土器,土 師器,須恵器	埋88	
1985	病 院 A J18区	154	清水 芳裕 浜崎 一志 菱田 哲郎	事前発掘	4295	中世井戸, 近世土取り 穴	土師器,近世 陶磁器	埋89	
1985	病 院 A J19区	155	五十川伸矢 宮本 一夫	事前発掘	3000	中世井戸, 近世土取り 穴	土師器,近世 陶磁器,鑄型	埋89	
1986	教 養 部 A P25区	167	清水 芳裕 宮本 一夫 難波 洋三	事前発掘	599	中世・近世 溝	土師器,近世 陶磁器	埋89	
1986	本 部 A X30区	168	清水 芳裕 難波 洋三	事前発掘	330	古代土坑, 中世道	土師器,陶磁 器	埋89	

京大大学構内遺跡調査要項

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(㎡)	遺構	遺物	文献	備考
1986	医学部 AL20区	169	浜崎一志 難波洋三	事前発掘	331	近世土取り 穴	土師器, 陶磁 器	埋90	
1986	教養部 AL23区	170	清水芳裕 五十川伸矢 浜崎一志	試掘	24	中世溝	土師器, 瓦器, 陶器	埋89	
1987	北 部 BD33区	180	浜崎一志 千葉豊	事前発掘	618	土坑, 河川	縄文土器, 土 師器, 須恵器	埋90	
1987	本 部 AW27区	181	五十川伸矢 千葉豊	事前発掘	1604	中世土坑, 近世道路	縄文土器, 土 師器, 陶磁器	埋92	
1987	北 部 BH35区	182	清水芳裕	試掘	16	包含層	土師器, 須恵 器	埋90	
1987	北 部 BD28区	183	清水芳裕	試掘	12	包含層	土師器, 須恵 器	埋92	
1987	本 部 AT25区	188	清水芳裕	立合		近世尾張藩 邸堀		埋90	
1988	牛ノ宮町 AR19区	190	清水芳裕 森下章司	事前発掘	216	中世土坑, 近世道路	土師器, 瓦, 陶 磁器	埋92	
1988	病 院 AH19区	191	浜崎一志 千葉豊 森下章司	事前発掘	2495	中世土坑, 溝	土師器, 瓦, 陶 磁器	埋93	
1988	病 院 AE12区	192	千葉豊 森下章司 宮原恵美子	事前発掘	599	近世道路, 溝, 野壺, 井 戸	土師器, 瓦, 陶 磁器	埋93	
1989	病 院 AE13区	198	千葉豊 森下章司 宮原恵美子	事前発掘	805	近世井戸, 野壺, 柵列	土師器, 陶磁 器, 瓦	埋93	
1991	病 院 AG14区	200	千葉豊 森下章司	事前発掘	394	近世井戸, 道路	土師器, 陶磁 器	埋95	
1991	教養部 AR21区	202	五十川伸矢 浜崎一志 森下章司	立合		中世土坑	土師器	埋93	
1992	医学部 AM17区	207	五十川伸矢 森下章司	事前発掘	1950	中世井戸, 土器溜	土師器, 陶磁 器	埋95	
1992	北 部 BA28区	208	浜崎一志 千葉豊	事前発掘	1242	噴砂, 古代 埋納遺構, 近世堀	縄文土器, 土 師器, 陶磁器, 棧瓦	埋95	
1992	和歌山県 瀬 戸 部 AV30区	213	浜崎一志 伊藤淳史 千葉豊 伊藤淳史	立合		縄文包含層	縄文土器, 石 器	埋95	
1992	北 部 BV30区	214	伊藤淳史 伊藤淳史	事前発掘	1480	中世砂取り 穴, 近世野 壺	土師器, 陶磁 器	埋97	
1993	北 部 BB28区	217	清水芳裕 古賀秀策	事前発掘	1323	古代溝, 中 世土坑	土師器, 陶磁 器	埋97	
1993	本 部 AW25区	218	千葉豊 吉井秀夫	事前発掘	929	中世井戸, 濠, 溝, 土坑	縄文土器, 石 器, 土師器, 陶 磁器	埋97	
1993	本 部 AU30区	219	伊藤淳史 古賀秀策	事前発掘	1074	弥生流路, 古代溝, 中 世土器溜	弥生土器, 土 師器, 陶磁器	埋97	
1993	総合人間 学部 AO22区	220	五十川伸矢 伊藤淳史	事前発掘	4080	弥生水田, 古代梵鐘鑄 造遺構, 中 世井戸, 溝	縄文土器, 弥 生土器, 土師 器, 陶磁器	埋99, 伊藤10	梵鐘鑄造遺 構を現地保 存
1993	北 部 BF34区	221	千葉豊 吉田 広	事前発掘	1228	古代土器 溜, 土坑, 中 世・近世道 路	土師器, 陶磁 器	埋98	

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
1993	病院 AF12区	222	伊藤 淳史	試掘	113	近世道路	土師器, 陶磁器	埋97	
1994	北学部 BF30区	229	千葉 豊 古賀 秀策 吉田 広	事前発掘	530	縄文貯蔵穴, 弥生方形周溝墓, 平安土墳墓	縄文土器, 弥生土器, 土師器	埋98	
1994	本学部 AX25区	230	古賀 秀策 吉田 広	事前発掘	1314	古代溝, 土器溜	土師器, 陶磁器	埋99	
1995	総合人間学部 AR25区	238	伊藤 淳史 古賀 秀策	事前発掘	2092	弥生土器棺墓, 古代溝, 土坑, 中世溝	弥生土器, 土師器, 陶磁器, 瓦	埋00	
1995	病院 AG20区	239	千葉 豊 吉田 広	事前発掘	2260	縄文流路, 弥生流路, 中世井戸, 近世大溝	縄文土器, 弥生土器, 土師器, 蓮月焼	埋00	
1995	病院 AF20区	240	千葉 豊 吉田 広	事前発掘	280	近世池, 土坑	土師器, 陶磁器	埋00	
1995	本学部 AX26区	241	古賀 秀策 吉田 広	事前発掘	627	中世大溝, 近世柵列	土師器, 陶磁器	埋99	
1996	医学部 AN20区	248	五十川 伸矢 古賀 秀策	事前発掘	510	縄文流路, 中世土取り穴, 近世井戸	縄文土器, 弥生土器, 土師器, 陶磁器	埋00	
1996	総合人間学部 AR24区	249	伊藤 淳史 富井 眞	事前発掘	330	中世掘立柱建物, 土坑, 溝	弥生土器, 土師器, 陶磁器, 銭貨	埋02	
1997	総合人間学部 AR23区	254	伊藤 淳史	立合		中世瓦溜	弥生土器, 土師器, 陶磁器, 瓦	埋02	弥生~中世包含層
1998	総合人間学部 AN22区	261	千葉 豊 古賀 秀策 阪口 英毅	事前発掘	1800	縄文流路, 弥生方形周溝墓, 中世溝・土坑・土器溜・石室	縄文土器, 弥生土器, 土師器, 陶磁器, 瓦	埋05	
1998	本学部 AU28区	262	伊藤 淳史 富井 眞	事前発掘	543	中世土坑, 近世柱穴	土師器, 陶磁器, 瓦	埋02	
1998	総合人間学部 AL24区	264	古賀 秀策 千葉 豊	立合			弥生土器, 土師器, 陶磁器	埋02	弥生~近世包含層
1999	病院 AF20区	269	千葉 豊 阪口 英毅	事前発掘	49	中世井戸, 土坑	縄文土器, 土師器, 陶磁器	埋03	
1999	医学部 AO17区	270	伊藤 淳史 富井 眞	事前発掘	2028	中世井戸, 集石, 土器溜	土師器, 瓦, 陶磁器	埋03	
1999	本学部 AW26区	271	千葉 豊 阪口 英毅	事前発掘	1913	古墳時代溝, 中世井戸, 瓦溜, 溝, 近世溝	縄文土器, 須恵器, 土師器, 瓦, 陶磁器	埋03	
1999	本学部 AX22区	272	富井 眞	立合		時期不明溝, 高野川系流路攻撃面		埋03	
2000	北学部 BC28区	276	伊藤 淳史 富井 眞	事前発掘	2158	弥生水田, 中世溝, 近世井戸	縄文土器, 弥生土器, 石器, 陶磁器	埋05	

京都大学構内遺跡調査要項

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
2000	本 部 A T 21区	277	千葉 豊 阪口 英毅	事前発掘	2654	終末期古墳 周濠, 中近 世白川道, 尾張藩邸水 路・堀	縄文土器, 土 師器, 陶磁器, 鉄鍋, 馬具, 銭 貨	埋06	
2000	病 院 A E 19区	278	千葉 豊 富井 眞	事前発掘	8000	縄文流路, 古代土坑, 中世井戸, 近世井戸・ 土坑・池	縄文土器, 土 師器, 近世陶 磁器, 瓦	埋07	
2000	病 院 A E 18区	279	阪口 英毅	試 掘	320	近世土坑	土師器, 陶磁 器	埋05	近世包含層
2001	吉 田 南 A R 24区	288	伊藤 淳史 梶原 義実	事前発掘	2375	奈良時代掘 立柱建物, 平安時代経 塚, 古代・中 世溝, 柵	縄文土器, 弥 生土器, 石器, 土師器, 陶磁 器, 青銅製経 筒, ガラス玉, 瓦	埋06	
2001	病 院 A F 12区	290	清水 芳裕 千葉 豊	立 合		近世柱穴	土師器	埋06	
2001	病 院 A F 13区	291	清水 芳裕 千葉 豊	立 合		近世柱穴	土師器, 陶磁 器	埋06	
2001	本 部 A T 25区	293	清水 芳裕 千葉 豊	立 合		近世尾張藩 邸堀		埋06	
2002	本 部 A U 25区	296	伊藤 淳史 梶原 義実	事前発掘	1070	古代埋甕, 中世白川道・ 井戸, 近世 集石	縄文土器, 土 師器, 近世陶 磁器・瓦	埋07	
2002	北 部 B D 28区	297	富井 眞 吉江 崇	事前発掘	1925	縄文堅果集 積・埋没林, 古代道路, 近世野壺	縄文土器, 弥 生土器, 石器, 陶磁器	埋07	
2002	医 学 部 A R 19区	298	千葉 豊 梶原 義実	事前発掘	1200	縄文流路, 中 世道路・井 戸, 近世土取 り穴・野壺	縄文土器, 土 師器, 陶磁器, 近世陶磁器	埋08	
2002	北 部 B F 32区	299	富井 眞 吉江 崇	事前発掘	1900	縄文建物跡・ 焼土・土坑, 中世砂取り 穴, 近世溝	縄文土器, 石 器, 土師器, 陶 磁器, 近世墓 石	埋08	
2002	吉 田 南 A R 25区	302	千葉 豊	立 合		古代・中世・ 近世溝	土師器, 陶磁 器, 中世瓦, 磁 器, 将棋駒	埋07	
2003	医 学 部 A P 18区	308	伊藤 淳史 吉江 崇	事前発掘	2125	中世道路・井 戸・溝・集石・ 土器溜・野壺 群, 近世井 戸・溝	土師器, 瓦器, 陶磁器, 瓦, 石 鍋, 近世陶磁 器	埋08	
2003	北 部 B D 33区	311	富井 眞	立 合		砂取り穴, 野壺		文09	中・近世包 含層
2004	北 部 B C 30区	320	千葉 豊	事前発掘	85.5	古代土坑・ 溝, 中世土 坑	縄文土器, 弥 生土器, 土師 器, 陶磁器, 須 恵器, 瓦器	文09	
2005	本 部 B A 22区	321	富井 眞 吉江 崇	事前発掘	98	近世溝・瓦 溜	縄文土器, 石 器, 磁器, 近世 陶磁器・瓦	文09	

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
2005	吉田南A P21区	322	伊藤 淳史	事前発掘	48	古墳周溝, 古代土坑・溝, 中世土坑・集石	縄文土器, 土師器, 陶磁器, 須恵器, 瓦器, 鞆羽口	文09	
2004	美山	323	清水 芳裕 伊藤 淳史	立 合				文09	
2004	北 部 B C35区	325	吉江 崇	立 合		古代道路?		文09	297地点の古代道路とつながるか
2005	本 部 A W24区	329	伊藤 淳史	立 合		近世白川道, 近世遺物溜, 煉瓦積水路	近世陶磁器	文09	縄文包含層
2005	北 部 B D30区	330	富井 眞	立 合			縄文土器	文09	中・近世包含層
2005	本 部 A T22区	331	千葉 豊	立 合		近世白川道	近世陶器	文09	中世包含層
2006	本 部 A T26区	335	伊藤 淳史	立 合		近世尾張藩邸堀	近世陶器	文09	
2006	本 部 A V24区	336	伊藤 淳史	立 合		中世白川道, 近世遺物溜	土師器, 近世陶磁器・瓦	文09	
2001 ~ 2004	桂	337	千葉 豊	分 布 立 合		石垣	埴, 瓦	文09	
2007	病院 A G16区	338	富井 眞 笹川 尚紀	事前発掘	3700	中世井戸, 近世井戸・集石, 石垣	縄文土器, 土師器, 陶磁器, 瓦	文10	
2007	病院 A F14区	339	千葉 豊	事前発掘	713	中世道路・井戸・集石	縄文土器, 土師器, 陶磁器	文10	
2007	和歌山県瀬戸	346	佐藤 純一	立 合		古代土坑	土師器	第1章	古代包含層
2008	西 部 A W20区	348	伊藤 淳史 笹川 尚紀	事前発掘	2081			整理中	
2008	病院 A G13区	349	千葉 豊 富井 眞	事前発掘	2164	近世井戸・野壺・土坑・溝	近世陶磁器・土製品	第2章	
2008	北 部 B E33区	350	富井 眞	立 合			弥生土器	第1章	先史包含層・流路
2008	病院 A H14区	351	千葉 豊	立 合			陶磁器	第1章	近世包含層
2008	西 部 A U20区	352	笹川 尚紀	立 合				第1章	中・近世包含層
2008	北 部 B G33区	353	清水 芳裕	立 合				第1章	
2008	本 部 A Y30区	354	千葉 豊	立 合				第1章	

報 告 書 抄 録

ふりがな	きょうとだいがくこうないせきちようさけんきゅうねんぼう2008ねんど							
書名	京都大学構内遺跡調査研究年報2008年度							
編著者名	上原真人, 清水芳裕, 千葉豊, 伊藤淳史, 富井眞, 笹川尚紀							
編集機関	京都大学文化財総合研究センター							
所在地	〒606-8501 京都府京都市左京区吉田本町 TEL 075-753-7691							
発行年月日	2011年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査 期間	調査 面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
びょういんこうない 病院構内 AG13区	きょうとふきようちしききょうく 京都府京都市左京区 しょうごいんかわらまち 聖護院川原町	26100	-	35° 01' 00"	135° 46' 35"	2008 0728 2008 1031	2164	iPS細胞研究棟新営
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
病院構内 AG13区	田畑	江戸時代	井戸 野壺 土坑・溝・柱穴	6 9 多数	土師器, 陶磁器, 土 製品, 銭貨		江戸時代の二朱金が出 土した。	

緯度・経度は日本測地系（第Ⅵ座標系）にもとづく

第Ⅱ部 京都大学文化財総合研究センター紀要XXI

円覚寺・東名寺・東明寺にまつわる基礎的考察

笹川尚紀

円覚寺・東名寺・東明寺にまつわる基礎的考察

笹川尚紀

1 はじめに

京都大学埋蔵文化財研究センターは、平成6年に北部構内の基礎物理学研究所研究棟建設予定地全域の発掘調査を実施した(221地点。図22参照)。その結果、古代から近世の遺構、縄文時代から江戸時代の遺物が検出された。なかでも特筆すべきは、平安時代前期から中期の年代が与えられる溝・土坑・土器溜といった遺構、土師器・黒色土器・瓦といった多量の遺物である。東西溝S D45西端からは、一括して廃棄されたと目される遺物に混じって、9世紀後半に位置づけられる東海産の黒笹90号窯式の緑釉・灰釉陶器の椀・皿などがいくつか確認されており⁽¹⁾、異彩を放っている。

これら遺構・遺物に対しては、清和太上天皇が終焉を迎えた場所となる円覚寺と関係する可能性が示唆されている⁽²⁾。しかしながら、角田文衛氏は円覚寺の所在を他所に求めており⁽³⁾、問題を抱えている。さらに、角田氏は『拾芥抄』の記述などを踏まえ、藤原在衡の粟田山庄は祖父の山蔭から伝領したものであること、粟田山庄を改めて成立した東明寺は京都大学北部構内に位置し、理学部植物園やグラウンドから検出されている瓦類はそれとつながりを持つことなどを推測しており⁽⁴⁾、注意を要する。

本稿は、北部構内において古代に一体どのような施設が存在したのか、文献史料を博捜することで明らかにしていくことを目的とする。分析の対象はもちろん、すでに候補として挙げられている円覚寺・東明寺(粟田山庄)となる。そして、それらとともに、粟田寺(東名寺)もその組上に載せていく所存である。粟田寺に関しては、なお検討すべき課題が残されており、且つ北部構内に寺域がかかっている可能性も存するからである。

2 円覚寺の所在

まずは、円覚寺の沿革について概観しよう。

貞観18年(876)11月29日、清和は、子である幼い皇太子・貞明親王(陽成)に皇位を譲った。その詔によれば、譲位の理由として自身の病と近年における災害の頻発が挙げられている⁽⁵⁾。その後、清和院(染殿宮とも。上京区染殿町の辺り)⁽⁶⁾を居所とし仏道に専心していた清和は、元慶3年(879)5月4日、鴨川の東に位置する右大臣・藤原基経の

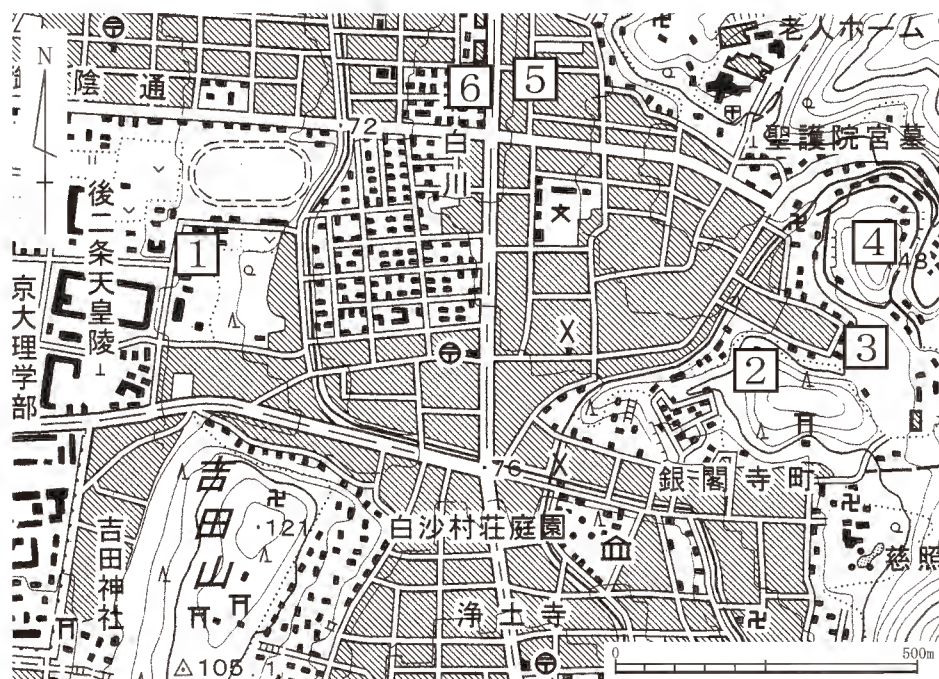


図22 221地点周辺 縮尺1/12500

- 1 221地点 2 北白川天神宮 3 照高院址
4 丸山 5 北白川廃寺（東方基壇） 6 北白川廃寺（塔跡）

山庄・粟田院へと遷った⁽⁷⁾。その目的は落飾入道するためであった。5月8日、清和は権少僧都・宗叡のもとでそれを逃げている⁽⁸⁾。同日、右大臣家の家政職員・菅原永津に対し、粟田山荘の造営を監督した褒賞として外従五位下の位階が授けられている。よって、その完成はこの時点からあまり潮るものではなかったことが推察される。

粟田院に居を移した清和は、10月23日の戌の時（午後7時～9時）、翌日早朝に大和国へと出立するため、粟田寺に移動し宿泊する⁽⁹⁾。翌24日の寅の時（午前3時～5時）に同寺を出発した清和は⁽¹⁰⁾、宗叡らとともに、山城国の貞観寺、大和国の東大寺・香山・神野・法輪・比蘇（現光）・竜門・和堂・大瀧、摂津国の勝尾山といった名山仏寺を巡覧した後、山城国の海印寺を経て、元慶4年3月中頃に丹波国の水尾山（右京区嵯峨水尾付近）に入る⁽¹¹⁾。そして、そこを終焉の地と定め、仏堂の建設に着手するに至る。同年8月23日には水尾山を下り、それが整備されるまでの間、嵯峨の棲霞観に身を寄せることになった⁽¹²⁾。棲霞観は左大臣・源融^{とおる}の山庄であり⁽¹³⁾、現在の清涼寺の地（右京区嵯峨釈迦堂藤ノ木町）

円覚寺の所在

に所在した。ところが、清和は体調を崩し、11月25日には病を押して棲霞観から円覚寺へと移動する。このことを記す『日本三代実録』元慶4年11月25日乙亥条が円覚寺の初見となる。ここでは同寺がもともと右大臣の粟田山庄であったことが説明されている。しかしながら、この段階で粟田山庄が寺院となっていたかは定かでなく、もとより『日本三代実録』編纂時の加筆の可能性も残ろう。

円覚寺へと移った清和は、12月4日に31歳の若さで死去する⁽¹⁴⁾。水尾山で終焉を迎えられなかったのは、重病の身では人里離れた水尾山へと到ることは困難を極めたから、ないしは仏堂、すなわち水尾山寺が造営途上にあったからといった理由が挙げられよう。そして、棲霞観から京都盆地を横断して円覚寺へと向かい、そこを臨終の場と決したのは、出家落飾を果たしたことが大きな原因となったのであろう。12月7日には山城国愛宕郡の上粟田山で火葬に付され、遺骨は水尾山上に置かれている⁽¹⁵⁾。その場所が水尾山寺と指呼の間にあったことはまず疑えまい。清和は遺詔で山陵を築かないよう指示しており⁽¹⁶⁾、それが遵守された結果といえる。しかるに、『日本三代実録』元慶5年12月27日辛丑条には、「水尾山先太上天皇山陵」とみえており、あるいは程なく山陵が営まれたのかもしれないが、詳細は不明である。

清和が物故して以降、円覚寺では周忌御齋会など種々の仏事が行われた⁽¹⁷⁾。そのようななか元慶5年3月13日には、官寺として位置づけられるに至る⁽¹⁸⁾。また、7月22日には、「造仏造寺、縫綾灌頂二具等料」として、円覚寺に白米100斛・黒米100斛を送る旨の勅が出されて⁽¹⁹⁾、粟田山庄の既存の建造物を活用しつつ、寺院の造営が進められていたことが窺われる。仁和2年(886)6月20日、稲1000束を山城国の国司に預け、毎年それを庶民に貸し付けることで得られる利息をもって、円覚寺の常灯分に充てることを求めた清和院の申請が許可されている。その申牒には、円覚寺について「南北二堂、莊^{しんちよう}嚴仏像^{ごさいえ}」と記されており⁽²⁰⁾、この頃にはすでに寺観が整えられていたことがくみ取られる。

天曆3年(949)9月29日、陽成太上天皇は冷然院で死去する。その夕方には円覚寺へと移され⁽²¹⁾、10月3日には神楽岡(吉田山)の東の地に埋葬されている⁽²²⁾。そして、11月18日には、同寺で七々御忌^{しちしちのごき}が修された⁽²³⁾。円覚寺が用いられているのは、父である清和と深い結びつきを有する寺院であったからであろう。

貞元元年(976)6月18日、大地震に見舞われ、八省院・豊楽院・東寺などとともに関覚寺も顛倒する⁽²⁴⁾。この地震による損壊の程度は判然としない。けれども、後に菅原在良^{ありよし}(1041～1121)や中原広俊(1062～)が円覚寺を訪れていることに鑑みると⁽²⁵⁾、修繕がな

された可能性が強い。

『兵範記』保元元年（1156）7月11日条によれば、保元の乱の折、後白河天皇方の平清盛・源義朝らの率いる軍勢が、白川北殿などに加え、崇徳上皇方に荷担した源為義の「円覚寺住所」を焼き払ったとする⁽²⁶⁾。『保元物語』中にも、崇徳の三条烏丸の御所・藤原頼長の御宿所とともに、為義の北白河円覚寺の宿所が灰燼に帰したとみえる⁽²⁷⁾。さらに、『保元物語』中・下には、斬首となった為義およびその幼い4人の子ども、彼らの後を追って入水して果てた北の方（青墓の長者大炊の姉）の遺骨が円覚寺に納められたと綴られている⁽²⁸⁾。『平家物語』巻第12・紺掻之沙汰によると、為義の子である源義朝の首が、その召使いであった紺掻きの男によって東山円覚寺に隠し納められていたとあり、軍記物語では為義一族の墓所として扱われていることが知られる。その信憑性はともかく、『兵範記』の記述から、円覚寺が兵火に襲われたことは確実であろう。

鎌倉時代中頃の成立とされる『拾芥抄』下・諸寺部第9・諸寺に「円覚寺〈北白河。〉（〈 〉は分注を表す）」⁽²⁹⁾、弘安2年（1279）正月23日の奥書を有する『阿婆縛抄』巻第200・諸寺略記上でも「円覚寺〈北白川。〉」⁽³⁰⁾とみえている。罹災の後、復興を遂げていることが推察される⁽³¹⁾。

円覚寺の退転の時期を考える上で見過ごせない史料は、「寛永三丙寅年十月日／朱雀権現堂中興二世／近蓮社隣誉（／は改行を表す）」という奥書を有する『朱雀権現堂縁起』（下京区朱雀裏畑町に所在する権現寺所蔵）である。そのうちの「当寺一名称=円覚寺=事并源為義墳墓事」では、為義が七条朱雀で処刑されて以降、義朝がその首を北白河の円覚寺に納めて墓を建立したとする『保元物語』と同様の記述を展開した後、「中比彼寺退転の後、名将の墳墓なれば湮没することを惜みて、むかし切れ給ひし跡とて当寺境内に移し立。今にいたり古跡あり。その昔の寺名ををのつからこゝによひて円覚寺といひけるならし」と綴られている⁽³²⁾。この叙述により、寛永3年（1626）には円覚寺が存在していなかったことが押さえられる。おそらくは、中世後期に退転するに至ったと想定される⁽³³⁾。

以上、管見の限りではあるが、円覚寺の変遷について略述した。続いては、同寺の所在に関して考察を加えていこう。

正徳元年（1711）に成立した『山城名勝志』^{やましろめいしようし}巻第13・愛宕郡部3・円覚寺の項では、『拾芥抄』の北白河とともに、「土人云、鳥居小路西、二条末南田、字曰=円覚寺=」という分注が掲げられている⁽³⁴⁾。すなわち、円覚寺という地名が、かつて左京区岡崎円勝寺町の京都市美術館の辺りに存していたことが知られる。享保3年（1718）刊の『諸嗣宗脈記』

円覚寺の所在

下・天台宗には、円珍の弟子・敬一きやういつに関して「粟田口円覚寺」という尻付がみえ⁽³⁵⁾、また享保19年成立の『日本輿地通志』畿内部巻第5・山城国5・愛宕郡では、粟田院について「粟田口村北有_二地名円覚寺_一。即此 清和天皇離宮也」と記されている⁽³⁶⁾。これらにおいても、『山城名勝志』で語られている箇所が指し示されていると考えられる。

杉山信三氏は、この付近には12世紀前半に最勝寺・円勝寺が設けられていることを踏まえ、もしそこに円覚寺が所在していたのなら、その頃以前に同寺が廃絶していたと考えなければならないとする。ところが、『保元物語』や『平家物語』の記載より、12世紀後半に至ってもなおその存続が確認されることから、岡崎辺りにではなく北白河に求めるのが適当であるとする⁽³⁷⁾。かかる理解は、おおむね首肯してもよからう。

粟田という地名の範囲を確認するに、寛仁2年(1018)11月25日付の太政官符を見過ごすことができない⁽³⁸⁾。賀茂上下大神宮に愛宕郡の8郷を寄進するという内容のもので、御祖社おやに蓼倉たでくら・栗野くるすの・上粟田⁽³⁹⁾・出雲わけいかずち、別雷社に賀茂・小野にしごり・錦部・大野の周辺4郷が与えられている。8郷の四至のうち、東限が延暦寺の四至、南限が皇城北大路(一条大路)⁽⁴⁰⁾および同末と決められている⁽⁴¹⁾。諸郷の比定地を考え合わせると、上粟田郷の範囲は一条大路末以北に及んでいたことが押さえられる。この点に徴するに、粟田という地名を冠する粟田院が北白河に所在していたと捉えても決して不自然とはいえない。

では、北白河であるとして、そのなかの一体どの辺りに比定されるのであろうか。見逃しえないのは、『本朝無題詩』収載の菅原在良による漢詩の注記から、天満宮祠の西に接して円覚寺が位置していたことが読み取られる点だ。ゆえに、天満宮の所在がわかれば、おのずと円覚寺のそれも絞り込むことが可能となろう。その所在を考えるために取り上げるべきは、次の史料である⁽⁴²⁾。

『諸院宮御移徙部類記』下・『平戸記』寛喜2年(1230)8月21日条⁽⁴³⁾

(前略)今日北白河殿御移徙也。(中略)次出御。室町南行,(中略)□行到_二朱雀大路_一,更北折行,更到_二陽明門大路_一。又東折到_二河原_一,北行自_二鷹司末_一東行,過_二天満宮前_一到北白河□□。

北白河院(藤原陳子)が、持明院殿(上京区安楽小路町付近)から改修の済んだ北白河殿へと移ったことが述べられている。北白河院は、承久の乱後に幕府によって担ぎ出され、皇位を経ないまま院政を行うことになった後高倉院の妃であった。北白河殿は、北白河院が伝領していた邸第であるものの、年月を経て破損が著しく、甥にあたる西園寺公経のもとで修理が行われ完成をみたことが『平戸記』同日条に記されている⁽⁴⁴⁾。上掲の史料

によれば、北白河院は陽明門大路（近衛大路）を東に進んで鴨川を渡った後、鷹司小路末を東に向かい、天満宮の前を経て北白河殿に到着している。鷹司小路末を東に進めば、神楽岡に突きあたり、つまるところ天満宮は神楽岡北麓からさほど遠からぬ地に祀られていたことが推測される。注意すべきは、左京区北白川仕伏町に所在する北白川天神宮である。両者を無関係とするのは憚られ、すでに指摘されている通り、天神宮は天満宮の後身と捉えるのが至当となろう⁽⁴⁵⁾。明治44年に刊行された『京都府愛宕郡村志』によれば、天神神社（北白川天神宮）は、もと白川の西・字久保田宮の前（北白川久保田町という町名が存する）にあったものの、足利義政の発願によって文明年中（1469～87）に現在地に遷されたとされる⁽⁴⁶⁾。しかしながら、角田文衛氏はこの伝承には信頼は寄せられないとし、且つ北白河殿の所在を照高院址⁽⁴⁷⁾に求めることで、天満宮はもともと現社地に鎮座しており、北白河院はその前を通過して北白河殿に入ったとする。そして、それを踏まえた上で、北白川天神宮の西側、北白川下池田町に円覚寺が位置していたと主張される⁽⁴⁸⁾。

もとより、北白川天神宮の原鎮座地に関する所伝は俄には信用しえない。けれども、天満宮および北白河殿の比定に関する角田氏の見解は明証に乏しく、支持することは躊躇される。結局のところ、天満宮の所在を特定することは困難を極めるといえる。

そこで、視点を変え、北白河殿の位置に関して考究を展開する。これについては、先掲の『平戸記』の記事とともに、以下の史料を逸することができない。

『経俊卿記』嘉禎3年（1237）12月26日条⁽⁴⁹⁾

廿六日 天晴風静。今夜安嘉門院新御所御移徙也。（中略）

路次

北白川殿惣門西行，河原南行，一条□ □富小路北行，至持明院大路。

（後略）

安嘉門院^{あつかもんいん}が持明院殿の西に位置していたと目される新御所に移ったことが語られている⁽⁵⁰⁾。安嘉門院は後高倉院と北白河院との間の子で、後堀河天皇の同母姉にあたる。母が所有する北白河殿から指呼の場所に設けられていた御所を起点にして、新御所へと向かったことが推量される。そのルートに徴するに、北白河殿は一条大路末よりも北に位置していたことがくみ取られよう。

ところで、安嘉門院御所の所在をめぐるには、以下の史料が重要となる。

『明月記』文暦元年（1234）7月29日条

廿九日。〈丙寅。晦。〉天晴。已後雖陰雨不降。去夜々半許東方有火。〈程久。〉

円覚寺の所在

可_レ然家歟。河東遠而不_レ知_二其程_一不_レ見。(中略)今朝尋_二申興心房_一。(中略)使帰云、興心房北一町余馬場と云辺下人小屋一村焼云々。村中有_二堂等_一云々。其北安嘉門院浄土寺云々。

藤原定家は、28日夜半の鴨東地域で発生した火事について興心房に尋ねる。興心房は、その住寺・菩提院⁽⁵¹⁾ から北に1町(約110m)程、馬場という辺りの下人の小屋一村が焼亡したと返答する。左京区浄土寺馬場町、上・下馬場町という地名が存し、馬場はこれらと関係しよう。留意すべきは、火災に見舞われた馬場の北に「安嘉門院浄土寺」があったとする点である。この箇所に関しては、安嘉門院御所と浄土寺、安嘉門院の浄土寺御所という二通りの解釈が可能であって、その是非は軽々には決し難い。いずれにせよ、吉田山の北東辺りに安嘉門院御所が所在していたことは間違いなく、北白河殿もまた同様の場所に存していたことが想定される⁽⁵²⁾。

さらに、北白河殿の所在を絞り込むために、次の2つの史料に眼を向けたい。

『増鏡』中・第7・北野の雪

又安養寿院といひて、山の峰なる御堂にはつねにたてこもらせ給て、御観法などあるには、人のまいる事もたやすくなし。鳴子をかけてひかせ給てぞ、おのづから人をもめしける。

『紹運要略』立太子月立⁽⁵³⁾

後二条長子諱邦良前坊。(中略)正中三(嘉暦元)年丙寅三月廿日卯剋薨。春秋二十八。同二十六日先出_二東山太子堂_一。自_レ彼葬_二北白河殿上山_一。在坊九年。)

前者では、安嘉門院が山上にある安養寿院につねに籠もっていて、御観法などを行った際には、鳴子を引くことで人を召していたと記されている。安養寿院は北白河殿に付属する法華堂のことを指す⁽⁵⁴⁾。よって、北白河殿は山裾に立地していたことが知られる。

続いて、後者は、後二条天皇の皇子・邦良親王^{くによし}が正中3年(1326)に亡くなり、北白河殿の上の山に葬られたことを記す。徳治3年(1308)8月に死去した後二条の遺体は、北白河殿に渡されており⁽⁵⁵⁾、邦良が同所に葬られたのはこのことに由縁しよう。「葬_二北白河殿上山_一」とは、具体的には安養寿院に葬ったことを意味すると目される。この史料からも、北白河殿が山際に所在していたことが確かめられよう。

そこで、吉田山の北東付近、山裾という如上の2つの条件を満たすところを探ってみると、北白川天神宮が鎮座する丘陵(宮山)から左京区北白川丸山町の丸山に接する範囲のうちには、それに相応しい場所を見つけ出すことが叶わないのではないかと考える。詮

ずるところ、北白河殿・天満宮は、白川道に沿って設けられていたと推断する⁽⁵⁶⁾。

以上、北白河殿のおおよその所在を想定した。これに基づけば、天満宮は先の一帯のうちには属するか、ないしはそれよりもやや西方に位置していたと史料される。この点に徴するに、天満宮と隣接する円覚寺の所在を京都大学北部構内に求めてしまうわけにはいかないではなかろうか。さらに付言すると、『本朝無題詩』収録の「暮秋遊_二円覚寺_一」と題する中原広俊の漢詩には、「路崎嶇」という文言が用いられており、注意を要する。円覚寺から山路の険しく続いている様を見渡せたことが窺われ、丘陵に接するところに位置していたことが推想される。かくして、文献史料による限り、円覚寺は宮山から丸山にかけての裾部の何処かに所在していた公算が大きいと判断しておきたい。

3 2つの粟田寺

続いて、粟田寺に話題を移そう。

『延喜式』内蔵寮・五月五日条によると、同日の節に用いる飾物たる菖蒲^{おももの}の珮を送り供える15寺のうちの1つとして東名寺が挙げられている。土御門本^{つちみかど}(国立歴史民俗博物館蔵)などには、東名寺の傍注として「粟田寺也」が添えられている。土御門本は、元和3年(1617)5月から翌4年9月までの間に、土御門泰重によって書写・校合・朱点付けがなされたものとなる。その大部分は、一条家伝来の平安時代末期から鎌倉時代初期頃の書写とされる卷子本、ないしはその写本を転写した蓋然性が高いと指摘されている⁽⁵⁷⁾。よって、かかる傍書は一条家所蔵の卷子本の祖本にすでに存していた可能性は残るものの、未詳とせざるをえない。つまるところ、傍注が付された時期は判然とせず、これに基づき東名寺は粟田寺に等しいと断定してしまうのは早計となろう。

この問題を考える上で重要となるのが、『門葉記』巻第140・雑決1・十楽院門跡領目録に掲載されている寛喜元年(1229)8月11日「後堀河天皇宣旨」である⁽⁵⁸⁾。その内容は、前僧正・仁慶の「遺跡堂舎聖教并山路本房大小所領所職等」を同母兄にあたる尊性法親王家に相伝させることを命じたものとなる。仁慶が所有していたもののうち特筆すべきは、「北白河房」と「山城国東名寺壺所」である。前者には「件房者、故仁慶僧正占_二東名寺之辺_一、始嘗_二作此禪室_一。是則退老之居、棲息之砌也者」という説明が、後者には「号_二粟田_一」という割注が付されている。これら記述を総合すると、東名寺はまた粟田寺とも呼ばれ、且つ北白河に所在していたことが明らかとなる。仁慶は即位前の後堀河の師で、その後は護持僧を勤めるなど⁽⁵⁹⁾、後堀河と密接な関係にあった。また、北白河院とも近い

2つの粟田寺

間柄にあったことが認められる⁽⁶⁰⁾。仁慶は、寛喜元年3月末に日吉社^{じにん}神人殺害事件を契機として北白河院の子・尊性法親王が天台座主^{ざいす}を辞任したことを受け⁽⁶¹⁾、その後任となることを懇望した。後堀河もそれを支持したものの、延暦寺衆徒らの反撥に遭い、ついには良快を天台座主に補任する⁽⁶²⁾。そのことで落胆した仁慶は、怨恨を懐きつつ程なくして死去するに至る⁽⁶³⁾。後堀河が危篤に陥った際、仁慶の崇りによることが周囲で囁かれており⁽⁶⁴⁾、その死は当時の貴紳の脳裡に強く刻まれていたようである。仁慶が北白河に禅室を営んだ背景としては、後高倉王家の人々と係わり深い地であったことが挙げられよう。

かくして、北白河に存する東名寺が粟田寺と称されていたこと、且つ『延喜式』諸写本における傍注は事実に基づくものであることが判明した⁽⁶⁵⁾。しかるに、諸史料にみえる粟田寺がおしなべて東名寺に一致するかというと、そうとばかりは断言し切れない。

『いほぬし』⁽⁶⁶⁾

粟田寺にて、京をかへりみて、

都のみかへりみられし東路に駒の心にまかせてぞ行く

平安時代中期の僧・増基は、ある年の3月10日に都を出立し、遠江国へと向かう。出発時の和歌に続くものとなり、粟田寺において都の方を振り返りつつ詠まれたことが押さえられる。果たして、この粟田寺は何処にあったのであろうか。ゆるがせにしえないのは、この次に位置づけられている和歌が、「関山の水のほとりにて」詠まれている点だ。関山とは逢坂山^{おうさか}のことを指す。増基は関路⁽⁶⁷⁾（粟田山路⁽⁶⁸⁾）、すなわち蹴上・日ノ岡越えを辿ったことが判然となる。この点に徴するに、先の粟田寺は東山区粟田口の辺りに所在していたと解するのがすこぶる穏やかとなろう⁽⁶⁹⁾。北白河と粟田口付近に2つの粟田寺が存していたことに関しては、粟田郷が上・下に分けられていた点を軽視してはならない。前者が上粟田郷、後者が下粟田郷に位置していたが故に、粟田寺という呼称がそれぞれに与えられたと思料される。つまるところ、いくつかの史料に登場する粟田寺が一体どちらに該当するのか、逐一吟味していく必要があるといえる。

問題とすべき史料として、(ア)『東大寺要録』巻第3・「供養東大寺盧舎那大仏記文」⁽⁷⁰⁾、(イ)『日本三代実録』元慶3年10月23日己卯条・同4年12月10日己丑条・同5年正月7日丙辰条、(ウ)『左経記』寛仁3年(1019)10月14日条⁽⁷¹⁾が挙げられる。

まずは、(ウ)を取り上げる。寛仁3年3月16日、近江守・源経頼はみずからの俸禄から稲3500束を割き、それを出挙して得た利米をもって横川の首楞嚴院^{よかわ しゆりようごんいん}定心房の四季講料に充てるよう太政官に申請した。その許可は9月末頃に伝えられた⁽⁷²⁾。それを受けて、経頼は

10月14日に四季講に列し、加挙稲3500束を施入する旨を記した願文を表白する⁽⁷³⁾。それ以後、丈六堂で阿弥陀念仏・地藏講を修し、巳の刻（午前9時～11時）に及んで帰京のついでに花蔵寺（所在未詳）に立ち寄ったところ、堂が壊れ金色の仏像数体が露出しているのを目撃した。それゆえに、それらを粟田寺に運び移して入京したという。

平安京から比叡山に登る主要路としては、近江国からは東坂本、山城国からは西坂本を経由する2つのルートが挙げられる。天曆8年(954)10月16日、藤原師輔^{もろすけ}らは京を出立し、翌日^{おうさか}に会坂関・東坂を経て比叡山山上（東塔講堂）へと到達する。そこで、山城側より西坂を登ってきた源高明^{たかあきら}と合流するに至った⁽⁷⁴⁾。察するに、源経頼^{きんらざか}は雲母坂を下って西坂本（左京区修学院の辺り）に到り、そこから入京したとみるのが自然となる。そして、この点に照らすなら、仏像数体を運び込んだとされる粟田寺は、北白河の東名寺にあたる⁽⁷⁵⁾とみるのが至当となろう。東名寺にはそれらを収容しうる程の堂舎が存していたのだ。

続いて、(ア)に眼を移そう。斉衡2年(855)5月、東大寺の盧舎那大仏の頭部が崩れ落ちた⁽⁷⁵⁾。貞観3年3月14日、東大寺において无遮大会^{むしやおおえ}が催され、修復なった盧舎那大仏に対し開眼の儀式が執り行われている⁽⁷⁶⁾。それに伴い、平安京近辺に所在する延暦寺・拝志寺・梵釈寺・粟田寺・佐比寺・鳥部寺・檀林寺に対し、それぞれ綿が差をつけて支給された。ここにみえる粟田寺がいずれにあたるのか、確定することは難しい。けれども、東名寺は、五月五日の節の折、菖蒲の珮の送付に与る、朝廷とつながりを有する寺院であった点に鑑みると、それに該当する公算が大きいのではないと思われる。

最後に、(イ)についてみよう。前述したように、清和は大和国へと巡幸するため、粟田院から粟田寺へと移動している。この粟田寺の所在を突き止めるためには、『日本三代実録』元慶4年12月10日己丑条を検討の俎上に載せなければならない。清和死去後の初七の際、使者2名（うち1名は内蔵寮の官人）に仏の布施たる名香1斤・細屯綿1連、僧の布施たる調綿200屯を託し、七ヶ寺にそれぞれ派遣して転念功德を修させている。七ヶ寺をその記載順に掲げれば、粟田寺・円覚寺・常寂寺・禅林寺・貞観寺・観空寺・水尾山寺となる。先に詳述した円覚寺・水尾山寺、関連史料を他に見出しえない常寂寺を除き、残る諸寺について以下にいささか分析を加えておきたい。

粟田寺は、清和が巡幸する直前に身を寄せた粟田寺と吻合するとして支障あるまい。清和と関係を有する寺院であったがために、七ヶ寺のうちに加えられたと目される。

禅林寺は、河内国の観心寺を草創した真紹^{しんじょう}が、故藤原関雄の東山家⁽⁷⁷⁾を仁寿3年10月に買い取って一堂を建立し⁽⁷⁸⁾、そこに毘盧遮那仏など五仏を安置したことに始まる。貞観5

2つの粟田寺

年9月には定額寺じょうがくじとなり、と同時に禅林寺という寺号を賜っている⁽⁷⁹⁾。現在は永観堂（左京区永観堂町）という名で人口に膾炙する。禅林寺ならびに観心寺は、貞観10年正月に真紹から弟子の宗叡に譲られている⁽⁸⁰⁾。宗叡は清和が仏道修行に励む上で重要な役割を果たしたことは、前節で確認した。なお、元慶元年12月には、清和太上天皇御願の仏堂が禅林寺の寺域内に建てられたが故に、寺地がすぼまってしまった結果、愛宕郡の公田4町の寄進を受けている⁽⁸¹⁾。かような仏堂が禅林寺内に営まれたのも、清和と宗叡の密接な間柄を抜きにしてはおおよそ考え難い。

伏見区墨染町付近に比定される貞観寺は、仁寿2年（852）頃⁽⁸²⁾に設けられ、当初は嘉祥寺西院と呼ばれた。寺号が定まったのは、貞観4年7月27日のことであつた⁽⁸³⁾。清和の擁護を目的に、外祖父・藤原良房と生誕の時から伺候していた真雅しんがが相談し合つて創建したもので⁽⁸⁴⁾、貞観16年に伽藍の完成をみた⁽⁸⁵⁾。真雅の上表によって、清和の降誕の日である3月25日に学業を積んだ3名の者を得度させ、それらを嘉祥寺西院に住まわせて仏事に勤めるよう取り決められている⁽⁸⁶⁾。ところが、清和の死去後には貞観寺の申請により、その忌日である12月4日に先の日程が改められている⁽⁸⁷⁾。2つの事柄は、清和と同寺との結びつきの深さを知る上で十分とならう。清和が大和国巡幸の際に立ち寄り、またその三回忌の折、円覚・水尾とともに法会が催されているのも⁽⁸⁸⁾、まことに故あることであつた。

観空寺は現在、清涼寺の北、右京区嵯峨観空寺久保殿町に所在する。大覚寺地となつた葛野郡二条大山田地36町の西限は「観空寺并栖霞観東路」とあり⁽⁸⁹⁾、清涼寺の地に存した栖霞観とは至近の距離にあつたことが窺われる。同寺は嵯峨太上天皇の創建で、貞観12年8月に定額寺となつた。と同時に、嵯峨後裔の源氏をその檀越だんおつとすべき旨の清和による勅が發せられている⁽⁹⁰⁾。嵯峨源氏のうちで着目すべきは、源潔姫きよひめである。嵯峨の寵愛の子で、嵯峨が選んだ藤原良房のもとに嫁ぎ、清和の母となる藤原明子を儲けた⁽⁹¹⁾。潔姫は斉衡3年（856）6月に死去して、賀楽岡白川の地に埋葬されており⁽⁹²⁾、もとより観空寺の檀越のうちの一人として算え上げることはできない。けれども、外祖母の出身母体たる嵯峨源氏有縁の寺院としてみずから性格づけしている点は疎かにしえず、両者の関連性は小さくなかつたことがくみ取られよう。

かくして、常寂寺以外の諸寺について考察を終えた。清和との浅からぬ関係を基準にして選出されたことが明らかとなつた。ゆえに、常寂寺もまた同様の要因で初七の法要に連なつたことが推察される。ここで、粟田寺の所在の問題に立ち返ると、『日本三代実録』元慶4年12月10日己丑条における諸寺の記載順をないがしろにすることはできない。おおよ

その位置が押さえられている円覚寺・禅林寺・貞観寺・観空寺・水尾山寺に着目すると、平安宮を基点にして北東方向から時計回りに配列されていることが導き出せる。かかる見方が認められるとすれば、最初に記されている粟田寺は、増基が立ち寄った粟田寺ではなく、北白河の東名寺に求めていかなければなるまい。

以上の煩瑣な分析を経ることではじめて、清和に関係する粟田寺が東名寺に一致することが判然となった。加えて、諸史料に散見する粟田寺がおおむね東名寺を指していることもまた把えられた。清和と所縁の深い粟田寺につき、角田文衛氏は左京区北白川大堂町・東瀬ノ内町などに広がる北白川廃寺がそれに該当するとし、粟田朝臣^{あそん}氏の氏寺であったと力説する。北白川廃寺は、東西36m強・南北23m弱の東方基壇（瓦積基壇）、それから西に約80m、標高で約3.5m下がった地点に設けられた、一辺13.6mの瓦積基壇からなる塔跡（改修を受け最終的には一辺14.1mの石積基壇となる）などから構成される。東方基壇上の構築物は金堂であったと目され、その建立は7世紀後半に遡る。それよりやや遅れて塔の造営が開始され、8世紀初頭には前者に回廊、後者に掘立柱塼が取り付け、それぞれ院として整備されるに至るとい⁽⁹³⁾。

粟田朝臣氏の氏寺であったかはともかく、文献史料から想起される粟田寺の景観と、発掘調査によって明らかにされた伽藍規模とは決して不釣り合いになるとは思われない。それゆえに、角田氏の見解が成立する余地は十分に残されているといえる。その確実の度合を強めるためには、北白川廃寺の廃絶時期の解明に努めていくことが必須となる。北白川廃寺は平安時代中期には頽廃したとされるもの⁽⁹⁴⁾、仔細な分析の所産とはいえ、問題を孕んでいる。先に触れたように、東名寺は鎌倉時代前期に至ってもなお存続していたことが押さえられる。果たして北白川廃寺もまた同時期まで機能していたといえるのか、この点に関する考古学的な考究が俟たれるところとなろう。

4 粟田山庄の沿革

『拾芥抄』中・諸名所部第20には、「東明寺^{粟田}〈神楽岡北。左大臣在衡別業。有^二尚齒会^一。又号^二粟田殿^一。〉」とみえている。神楽岡（吉田山）の北にある東明寺は、もともと藤原在衡の粟田殿と呼ばれた別宅であったことを意味していよう。左京一条一坊に本邸を構えていた⁽⁹⁵⁾大納言・藤原在衡は、安和2年（969）3月13日、粟田山庄（東山別業^{べつぎやう}⁽⁹⁶⁾）において尚齒会^{しょうしかい}を開催した⁽⁹⁷⁾。在衡をはじめとする七叟^{しちそう}（7人の老人）が相会して高齡を祝する宴が営まれ、多くの漢詩が賦された⁽⁹⁸⁾。在衡は同月25日の左大臣・源高明の失脚（安和の変）

粟田山庄の沿革

に伴って右大臣に⁽⁹⁹⁾、天禄元年（970）正月には左大臣へと昇進する⁽¹⁰⁰⁾。それに就任して程なく、同年10月に79歳の生涯を閉じている⁽¹⁰¹⁾。

在衡の別業・粟田山庄に関しては、『山城名勝志』巻第13・愛宕郡部3・粟田山庄の項で、「勅撰名所和歌抄云、粟田殿、〈神楽岡北。〉在衡卿宅、山蔭中納言旧跡也」とみえ、享保19年（1734）成立の『日本輿地通志』畿内部巻第5・山城国之5・愛宕郡・古蹟・藤在衡公別業の項では、「在~~二~~神楽岡北~~一~~。見~~二~~拾芥抄~~一~~。藤山蔭卿宅址」と記されている。中納言を極官^{ごつかん}として仁和4年（888）に他界した⁽¹⁰²⁾藤原山蔭（陰）は、在衡の祖父にあたり、清和の近臣として知られる。太上天皇宮（染殿宮・清和院）の別当を務めた⁽¹⁰³⁾山蔭は、清和の退位および落飾入道に伴い、しばしば致仕を申請して清和に扈從することを望んだ⁽¹⁰⁴⁾。清和の大和国などの巡幸の折には、参議の職にありながら随行することを選んでいる⁽¹⁰⁵⁾。先掲の史料によれば、山蔭の邸宅が神楽岡の北に存し、それを孫の在衡が伝領したことを物語っていると目される。おそらく、角田文衛氏はこのような記述を踏まえ、本稿冒頭に触れたような指摘をするに及んだのであろう。しかしながら、確かな史料による裏付けをうることが叶わず、事実と捉えるには首をかしげざるをえない。かかる記載内容を吟味する上で見落とすことができないのは、藤原山蔭と吉田神社との関係である。

『大鏡』人・道長（藤氏物語）によると、山蔭中納言が氏神たる春日明神を勧請して吉田神社を創設したとする⁽¹⁰⁶⁾。また、寛弘8年（1011）頃の成立とされる『新撰年中行事』上・4月・下子日・吉田祭事⁽¹⁰⁷⁾、『大鏡』裏書⁽¹⁰⁸⁾、鎌倉時代前半の著述と推測される『年中行事抄』4月・中子日・吉田祭事⁽¹⁰⁹⁾、『帝王編年記』永延元年（987）条などでは、吉田祭はもともと山蔭（陰）一家（一族）によって祀られていたとする⁽¹¹⁰⁾。吉田社と山蔭一族との結びつきをめぐっては、『長秋記』長承元年（1132）5月15日条⁽¹¹¹⁾が興味深い事象を提供してくれる。

吉田神社領の水田4段をめぐり、同社と鴨御祖神社との間で相論が生じ、陣定^{じんのさだめ}で取り上げられた。吉田社司は、粟田左大臣（藤原在衡）が長者であった時、その私領を吉田社に施入したもので、長和4年（1015）の太政官符により社領として認定されている。それ以降、何の支障もなく領掌してきたものの、昨年より鴨御祖社司が妨害を加えてきたという。一方、鴨御祖社司は、寛仁2年（1018）に同社に寄進された愛宕郡4郷のうち、寺社領であっても官省符により認定されていないところでは、当社が官物3斗を徴収し、本所が地子を取り立てることになっている。4郷のうちに属する吉田社領は、官省符により荘田の領有や不輸租が許されたとする点は確かめられず、だからこそ官物3斗を徴収したのだと

いう。両者よりそれぞれ証拠となる文書を提出させ、検察に取り掛かったものの、その結果がどのように落ち着いたのかは定かではない。ただし、吉田社司が進上した長和4年の太政官符に対し、日記の著者であり陣定に列席した源師時は疑いの眼差しを向けており、注意を要する。粟田左大臣にまつわる事柄が真実であるならば、吉田神社と山蔭一族との深い間柄を証明するに十分となろう。仮にそれが事実ではなかったとしても、吉田社司が在衡を持ち出している点は等閑に付すことができず、同社と山蔭一族との密接な結びつきを前提にして案出されたものであることは動かし難い。少なくともこの当時、吉田神社の側でこの点が強く意識されていたことは引き出してもよからう。

このような吉田神社と藤原山蔭との係わりを念頭に置くことで、同社の近くに築造されたとされる在衡の粟田山庄は山蔭の邸第を踏襲したものだとする所伝が形作られるに及んだ可能性は否定できまい。つまるところ、『山域名勝志』などの記述は後世の所産であるとも推測され、その取り扱いには慎重にならざるをえない。

この点を確認した上で、粟田山庄のその後について追究していこう。

『江吏部集』上・天部⁽¹¹²⁾

七言。五月五日陪_二内相府池亭_一同賦_三雲峰入_二夏池_一應_レ教詩一首。(分注略)

夫朝市之人徇_レ禄，山林之士逃_レ名。(中略)於_レ是内相府東山之脚置_二一池亭_一。蓋安和左僕射開_二七叟会_一之地也。伝_レ之為_レ主，誠有_レ以矣。(後略)

『江吏部集』は大江匡衡の漢詩集である。詞書によると、匡衡はある年の5月5日に内相府(内大臣)の池亭に参上し、「雲の峰が夏の池に入る」という題で漢詩を賦したことがわかる。内大臣は、七日関白として著聞する藤原道兼を指す。道兼は、正暦2年(991)9月から同5年8月にかけてその任に就いており⁽¹¹³⁾、ある年は正暦3～5年に絞られる。注意を払うべきは傍線部である。道兼が東山の麓に池亭を営んだ場所は、安和左僕射、すなわち藤原在衡が尚齒会を開いたところに一致し、その地を伝領して主人となったと記す。つまり、在衡の粟田山庄が道兼の所有に帰していたことが捉えられる。

まずは、道兼の粟田山庄の様相について探ってみよう。

『栄花物語』巻第3⁽¹¹⁴⁾

かやうのことにつけても、大納言殿はいとうらやましよう、女君のおはせぬことを思さるべし。粟田といふ所にいみじうをかしき殿をえもいはず仕立てて、そこに通はせたまひて、御障子の絵には名ある所々をかかせたまひて、さべき人々に歌詠ませたまふ。(後略)

粟田山庄の沿革

冒頭の「かやうのこと」とは、藤原道隆の女・定子の入内および女御となったことを指す。道兼は兄の道隆が羨ましく、自身に女子がないことをさぞや残念に思っているに違いないと語る。それに続いて、道兼は粟田に見事な邸宅を営み、そこに通っていたことがみえている。かような叙述に従えば、定子が入内した正暦元年正月⁽¹¹⁵⁾、ないしは女御となった同年2月⁽¹¹⁶⁾をそれ程下らない時期に粟田山庄が築造されたこととなろう。そこで、『小右記』正暦元年11月15日条に眼をやるに、藤原実資は道兼と同車して粟田山庄に出向いたとあり、確実な史料における同山庄の初見となる。両者の記事を考え併せると、粟田山庄が設けられたのは正暦元年頃だったとして大きな誤りはあるまい。なお、『栄花物語』では、粟田山庄に名所が描かれた障子絵が存し、優れた歌人にそれを題材にした和歌を詠進させたとする。粟田山庄の障子には、季節ごとに異なる名所が描き出されており、和歌に加え漢詩もまた作成されたことが知られている⁽¹¹⁷⁾。

正暦4年2月、多くの公卿が伺候し、射や厩馬を競わせることが⁽¹¹⁸⁾、7月には相撲が行われている⁽¹¹⁹⁾。同年3月・5月には、東三条院・藤原詮子の行啓をみた⁽¹²⁰⁾。『栄花物語』巻第4によると、本邸である二条殿で長徳元年(995)5月8日に35歳の若さで亡くなった⁽¹²¹⁾道兼の亡骸は、粟田殿に運び込まれ、且つそこで四十九日の法要が執り行われたとする。先に引用した大江匡衡の漢詩には池亭とあり、「競渡之舟棹軽」という一節から、小舟を競わせる行事が池上で繰り広げられたことがわかる。粟田山庄にはかなり大きな池が伴っていたことが窺われよう。

それでは、道兼はどうして在衡の粟田山庄を伝領しえたのであろうか。刮目すべきは、道兼の三男・兼綱の母である。『尊卑分脈』^{そん び ぶん み や く}巻第4によれば、兼綱の母は、すぐ上の兄・兼隆と同様、藤原遠量^{と お か す}(兼家の弟で、道兼にとっては叔父にあたる)の女であると記す。ところが、それに加えて、「或云、母正四下国光女〈云々。〉」という異説が掲げられている。藤原国光は在衡の子であり、安和2年の尚齒会の折には、次男の忠輔とともに参加して漢詩を作成している⁽¹²²⁾。国光の生没年は不詳であり、大宰大貳の赴任について奏したことを記す『親信卿記』^{ちかのぶきようき}天禄3年(972)10月8日条⁽¹²³⁾が確かな史料に登場する最後となるかと思われる。ただし、『尊卑分脈』巻第4には、「正四下近江守治部卿」という傍書がみえるので、その後もしばらくは生存していたと解してよかろう。一方、国光の次男・忠輔は、『公卿補任』^{ぎようぶにん}長和2年(1013)条などから、天慶7年(944)の生まれであることが知られる。よって、応和元年(961)生まれの道兼のもとに忠輔の妹が嫁ぐことは、年齢的に不都合ではなからう。つまるところ、兼綱の母を国光の女とみた方が、粟田山庄の伝領について

スムーズに解釈することができ、それが事実であった蓋然性は相当に高いのではあるまいか。道兼の三男・兼綱は、永延2年（988）の誕生であり⁽¹²⁴⁾、その母と道兼との婚姻の時期は、980年代の半ばとみるのが穏当となろう。この年代は、道兼が粟田山庄を造営した正暦元年（990）頃よりも以前となる。想うに、在衡の死後、粟田山庄はその子・国光によって受け継がれていた。ところが、国光の女が道兼に嫁いたことが機縁となって譲与されることとなり（国光の死去がその大きな要因となったかもしれない）、道兼はそれに修繕を加えて壮大な別宅に仕立て上げたのではあるまいか⁽¹²⁵⁾。

粟田山庄のその後を概観するに、『尊卑分脈』巻第4によれば、道兼の次男・兼隆が「号ニ粟田左衛門督ニ」したとあって、注意を要する。粟田は粟田山庄に由来すると目され、道兼から兼隆に伝領されたことが推察される。兼隆は天喜元年（1053）10月に亡くなっており⁽¹²⁶⁾、その頃まで彼の管掌下にあった可能性が残る。それ以降どのような変遷を辿ったかは、次の史料が教えてくれる。

『本朝無題詩』巻第6・別業・420

暮春遊ニ粟田別業ニ三韻 惟宗孝言

勝地佳名何所感 勝地の佳名 何所をか感ふ
 粟田別業在城東 粟田の別業は 城東に在り
 花零履踏三春雪 花零ちて 履に陥む 三春の雪
 松老耳伝尚齒風 松老いて 耳に伝ふ 尚齒の風

昔日此地有ニ尚齒会ニ。故云。

法水前清波響冷 法水は前に清く 波響は冷じ
 如何蓮府為梵宮 如何にぞや 蓮府の梵宮と為れるとは

ある年の3月、^{これむねのたかこと}惟宗孝言が粟田別業に遊覧した際に作成された漢詩となる。第4句の注記から、粟田別業において尚齒会が開催されたことがわかり、それが在衡の粟田山庄に合致することが導き出せる。しかるに、第6句をみると、蓮府＝大臣の邸宅が梵宮＝寺院となっていたことが述べられており、結局のところ、道兼の粟田山庄は寺院と化していたことが押さえられる。『拾芥抄』でいうところの東明寺に該当するのであろう⁽¹²⁷⁾。惟宗孝言に関しては、長元7年（1034）頃に15歳前後、承德元年（1097）正月から程遠からぬ時点で死去したことが推測されている⁽¹²⁸⁾。兼隆が粟田左衛門督と号した点を勘案すると、先の漢詩の作成は11世紀後半の出来事であった公算が大きい。

なお、第5句に関して若干付言するに、法水は仏語で、『日本国語大辞典 第2版』第11

おわりに

卷によると、「仏の教え。仏の教えが衆生の煩惱を洗い清めることを水にたとえていう」とある。しかし、水面のうねりの音を意味する波響といった字句などに鑑みると、実際の水の広がりや前提にして用いられていると考えるべきであろう。本間洋一氏は、「寺の前を流れる川（白河か）を指して言うものであろう」とする注釈を付している⁽¹²⁹⁾。

ここで、平安時代の白川⁽¹³⁰⁾の流れを確認するに、参考とすべきは円成寺^{えんじょう}の所在である。円成寺は、寛平元年（889）に藤原淑子が建立したもので、その地はもともと淑子の夫・藤原氏宗が鬼籍に入ったところであった⁽¹³¹⁾。円成寺の所在を絞り込むためには、後一条天皇の葬所（山作所^{さんさくしよ}）にまつわる記事が重要となる⁽¹³²⁾。長元9年（1036）5月19日、後一条の遺体は、上東門院（土御門第）から神楽岡の南の路を東に向かい、円成寺の西の路より北に進んで山作所へと到着した⁽¹³³⁾。山作所は、神楽岡の東辺、一条大路末より以南、上東門（土御門）大路末より以北の間に設けられた⁽¹³⁴⁾。ゆえに、円成寺は神楽岡の東方に位置していたことが押さえられる。角田文衛氏は左京区鹿ヶ谷宮ノ前町辺りに比定しており⁽¹³⁵⁾、おそらくその付近に求めて大過なからう。ところで、円成寺の前身については、右大臣・藤原氏宗の薨伝^{こうでん}記事を見逃すことができない。それによれば、氏宗の死去に伴い、正二位を贈るため使者を東山白河第に派遣したとする⁽¹³⁶⁾。察するに、氏宗は別邸の東山白河第で終焉を迎え、それが後に寺院とされたのであろう。東山白河第という名称および円成寺の所在を考え併せるに、9世紀後半の白川本流は左京区北白川から吉田山の東方へと向かう、現在とほぼ同様の流れであったことが推量される。

かような事柄を踏まえれば、先の法水は、白川本流ないしは吉田山の北を流れる白川支流のことを指す可能性が残る。けれども、法水を河川に限定する必要はなく、道兼の粟田山庄には池が付属していたことに照らすに、それに該当する可能性も捨て切れまい。

以上、迂遠な考究の結果、藤原在衡の粟田山庄は、姻戚関係を媒介にして藤原道兼に伝領され、11世紀後半には東明寺という寺院に転じていたことが跡付けられた。

5 おわりに

3節にわたる検討の末、藤原在衡・藤原道兼の粟田山庄、および東明寺の遺構が京都大学北部構内の範囲に含まれるのではないかと想定した。2つの粟田寺のうち、東名寺は北白川廃寺に該当する可能性が存し、その廃絶時期にまつわる綿密な検討が望まれる。円覚寺については、そこに所在したと断定するのはなかなか難しく、ましてや藤原山蔭の別宅にいたっては、憶測の域を出ず、支持することには躊躇を覚える。

結局のところ、9世紀後半の遺構・遺物に対応するような建造物の存在を文献史料から抽出することは叶わなかった。ただし、221地点の調査の折には文字資料がいくつか確認されており⁽¹³⁷⁾、遺跡の性格を明らかにするためには、それらの発見に大いに期待を寄せなければなるまい。

なお、上述した結論は、あくまでも『拾芥抄』の記述に全面的に依拠したものであり、それが事実を伝えていなければ、もろくも崩れ去ってしまうことになる。それとても吉田神社と藤原山蔭一族との結びつきを前提にして、後世に按出された可能性も皆無ではあるまい。いずれが至当かをはっきりさせるためには、小致での分析結果と発掘調査の成果とを丹念に対比検討していくことが不可欠となろう。かような考察は後日に期することとし、ひとまずこの稚拙な論考を終えることにしたい。

平成22年8月30日に太子堂白毫寺において、「応永頃ノ古図写」をはじめとする古絵図4点の調査を実施した。その際、お世話になった金田成雄ご住職夫妻には、記して深甚の謝意を表したい。

〔注〕

- (1) 黒笹90号窯式の緑釉・灰釉陶器については、さしずめ齊藤孝正「猿投窯出土の灰釉・緑釉陶器碗・皿類の変遷」(『日本の美術』409 越州窯青磁と緑釉・灰釉陶器, 至文堂, 2000年)を参照。
- (2) 千葉豊「京都大学北部構内B F 34区の発掘調査」(『京都大学構内遺跡調査研究年報』1994年度, 京都大学埋蔵文化財研究センター, 1998年)。
- (3) 角田文衛「北白川廃寺の問題」(角田文衛著作集第2巻『国分寺と古代寺院』, 法蔵館, 1985年, 初出1970年)。なお、左京区北白川大堂町などに広がる北白川廃寺を円覚寺と粟田寺の複合遺跡と解するたなかしげひさ氏の見解が存するが(「北白川廃寺址は粟田寺と官寺円覚寺の複合遺蹟」〔『奈良朝以前寺院址の研究』, 白川書院, 1978年, 初出1976年〕), 論拠薄弱の感は否めず、俄に首肯することができない。
- (4) 『平安時代史事典』本編上・粟田郷の項(角田文衛執筆)。
- (5) 『日本三代実録』貞観18年11月29日壬寅条(『新訂増補国史大系』による。以下、特に出典を記さないものは全てこれに基づく)。
- (6) 染殿第(院)(『日本三代実録』貞観3年2月18日壬戌条など)と清和院との関係については、当初は同一で後に二分されたとする所説(太田静六『寝殿造の研究 新装版』第2章第6節3, 吉川弘文館, 2010年), 同一の境域内に南北に隣り合っていたとする見解(目崎徳衛「文徳・清和両天皇の御在所をめぐって―一律令政治衰退過程の一分析―」〔『貴族社会と古典文化』, 吉川弘文館, 1995年, 初出1970年〕)などが存する。
- (7) 『日本三代実録』元慶3年5月4日癸巳条。

注

- (8) 『日本三代実録』元慶3年5月8日丁酉条, 同4年12月4日癸未条, 同8年3月26日丁亥条。
- (9) 『日本三代実録』元慶3年10月23日己卯条。
- (10) 『日本三代実録』元慶3年10月24日庚辰条。
- (11) 『日本三代実録』元慶4年3月19日壬申条, 12月4日癸未条, 同5年正月7日丙辰条, 同8年3月26日丁亥条。
- (12) 『日本三代実録』元慶4年8月23日甲辰条。
- (13) 『日本三代実録』元慶4年11月25日乙亥条。
- (14) 『日本三代実録』元慶4年12月4日癸未条。
- (15) 『日本三代実録』元慶4年12月7日丙戌条。
- (16) 『日本三代実録』元慶4年12月4日癸未条。
- (17) 『日本三代実録』元慶4年12月10日己丑条, 11日庚寅条, 同5年12月4日戊寅条, 同6年12月4日壬寅条, 同7年12月4日丙申条。
- (18) 『日本三代実録』元慶5年3月13日辛酉条。
- (19) 『日本三代実録』元慶5年7月22日戊辰条。
- (20) 『日本三代実録』仁和2年6月20日戊辰条。『延喜式』^{しゆげいしき}主税寮上・出挙本稻条^{ほんとう}における山城国の「円覚寺料一千束」(同書は『神道大系』古典編11・12 延喜式〔上〕・〔下〕による)は、本条にみえる清和院の稲1000束を起源とする。なお、円覚寺の経済的基盤となった所領について触れておくと、元慶5年4月3日に山城国愛宕郡八条野尻里の空閑地5段が支給されている(『日本三代実録』同日庚辰条)。その場所を特定することは難しいものの、愛宕郡の条里にまつわる研究成果(米倉二郎「山城の条里と平安京」〔『史林』39—3, 1956年])に照らすに、円覚寺から程近い場所に位置していたことはまず疑いあるまい。また、『日本三代実録』元慶7年6月29日癸亥条によると、備前国御野郡における円覚寺庄の常荒田49町113歩に関して、永く輪租が免じられている。時代が下って、承元2年(1208)11月日「承信譲状」によれば、曼殊院院主・承信(「曼殊院門跡伝法師跡次第」〔『続群書類従』第4輯下 補任部])が大納言僧都御房に譲渡した相伝の私領の1つとして「円覚寺新御領畠式段」が掲げられている(『鎌倉遺文』古文書編第3巻・1766号)。その所在を絞り込むことは困難なものの、「新御領」とあるからには、八条野尻里の空閑地とは異なると見なすべきで、平安時代には所領の集積が図られていたことが窺われる。
- (21) 『日本紀略』天曆3年9月29日条。
- (22) 『日本紀略』天曆3年10月3日条。
- (23) 『日本紀略』天曆3年11月18日条。『本朝文粹』^{ほんちゆうもんずい}卷第14・412・大江朝綱^{あきつな}による天曆3年11月18日「陽成院卅九日御願文」(大曾根章介・金原理・後藤昭雄校注 新日本古典文学大系27『本朝文粹』, 岩波書店, 1992年)。
- (24) 『日本紀略』貞元元年6月18日条。
- (25) 『本朝無題詩』卷第9・652および653(新典社注釈叢書7・本間洋一注釈『本朝無題詩全注釈』3, 新典社, 1994年)。
- (26) 『増補史料大成』19 兵範記2。
- (27) 新院左大臣落ちたまふ事・朝敵の宿所焼き払ふ事(柳瀬喜代志・矢代和夫・松林靖明・信太周・犬井善壽校注・訳 新編日本古典文学全集41『将門記 陸奥話記 保元物語 平治物語』, 小学館, 2002年。同書収録の『保元物語』は、陽明文庫蔵〔近229・89〕本〔陽明叢書『保元物語』所収・乙本〕を底本とする)。なお、国立公文書館内閣文庫蔵半井本・中・朝敵ノ宿所^{なからい}焼キ払フ事には、「為義ガ宿所円学寺ノ館ニ火ヲ懸テ焼払ヌ。廻ノ在家数百家一時二灰燼ト成

円覚寺・東名寺・東明寺にまつわる基礎的考察

- ル」とみえる（栃木孝惟・日下力・益田宗・久保田淳校注 新日本古典文学大系43『保元物語 平治物語 承久記』、岩波書店、1992年）。
- (28) 中・為義最期の事、下・義朝幼少の弟悉く失はるる事および為義の北の方身を投げたまふ事。
- (29) 『改定増補故実叢書』22巻 禁秘抄考註・拾芥抄。
- (30) 『大日本仏教全書』第60巻・図像部10。
- (31) 『新千載和歌集』巻第9・834番歌は、前参議・飛鳥井雅有^{あすかいまさあり}（1241～1301）によるもので、「円覚寺にて仏事の庭に花のちるをみて」という題詞を有する（『新編国歌大観』第1巻 勅撰集編 歌集）。雅有は関東祇候の廷臣で、しばしば京・鎌倉を往来している。ゆえに、ここにみえる円覚寺は、弘安5年12月に供養が行われた鎌倉の円覚寺と一致する可能性も残る。
- (32) 川嶋美貴子「権現寺蔵『朱雀権現堂略縁起』と『朱雀権現堂縁起』」（『文化史学』65、2009年）。
- (33) 現在、右京区嵯峨水尾宮ノ脇町に円覚寺が存する。宝暦4年（1754）成立の『山城名跡巡行志』第4・葛野郡2・水尾山寺の項によると、水尾村の総堂がその当時、円覚寺と呼ばれていたとみえる（『新修京都叢書』第22巻）。大正4年刊の『京都坊目誌』から、この円覚寺をもと栗田院の円覚寺にあてる所説が存していたことが知られる。ただし、同書の作者である碓井小三郎が同寺を訪れ、そこに蔵されている記録にその証拠を求めようとしたところ、伝記が全く残っていなかったとする（上巻・上京第27学区〔岡崎町〕之部・古蹟・円覚寺ノ址の項〔『新修京都叢書』第19巻〕）。水尾は清和が葬られた場所となり、そのような事柄が機縁となって、水尾村の仏堂に円覚寺の名が与えられるに至った可能性は否定できまい。なお、円覚寺の門前には、平成21年3月に京都市によって設けられた「円覚寺（水尾山寺跡）」の説明板が立てられている。それには、鴨川の東の栗田山荘内にあった円覚寺は、応永27年（1420）に焼失し、水尾山寺が存した現在地に移されたこと、延宝7年（1679）の火災で灰燼に帰したものの、安永5年（1776）に再建されたことが書き綴られている。残念ながら、この記述がどういった史料に由来するのか突き止めることは叶わなかった。その内容の信憑性については後考に委ねることにしたい。
- (34) 『新修京都叢書』第14巻。
- (35) 『大日本史料』第1編之17。
- (36) 大日本地誌大系34『五畿内志・泉州志』第1巻。
- (37) 杉山信三「洛東の円覚寺について」（『院家建築の研究』、吉川弘文館、1981年、初出1955年）。
- (38) 『類聚符宣抄』^{るいじゆふせんしやう}第1、『小右記』寛仁3年7月9日条・裏書（同書は『大日本古記録』小右記1・4・5による）。
- (39) 高山寺本『和名類聚抄』^{わみやうるいじゆしやう}巻第6に、愛宕郡の郷として栗田が掲げられ、「有上下」という注が付されている（天理図書館善本叢書^{ぜんぽんそうしよ}和書之部第2巻『和名類聚抄 三宝類字集』、八木書店、1971年）。平安遷都以降、人口・戸数の増加に伴って、栗田郷が上下2つに分けられるに及んだことが推量される。『日本三代実録』元慶4年2月5日己丑条に下栗田郷がみえており、おのおの成立はこれ以前に求められる。
- (40) 角田文衛総監修・財団法人 古代学協会・古代学研究所編集『平安京提要』付図・平安京条坊復元図（角川書店、1994年）を参照。同図によれば、京都御苑の北の境から南に約300mのところ幅10丈の一条大路が敷設されていたとする。ちなみに、一条大路を東に延ばしていくと、京都大学本部構内の百周年時計台記念館の辺りに及ぶ。一条大路末は、鴨川の東のこのライン上に位置していたと推定される。
- (41) 後一条天皇の葬所（山作所）の場所、および遺骨を移し置くべき寺院などを探索するために

注

- 派遣された使者の報告によると、浄土寺のうちの故僧正明救^{みょうく}の旧室が後者に相応しいのではないかとし、加えて同寺が賀茂の四至外に位置するとする土民らの言を付している（『左経記』類聚雜例・長元9年〔1036〕5月13日条〔『増補史料大成』6 左経記〕）。浄土寺は寛和2年（986）3月以前に創建され（『日本紀略』寛和2年3月14日条が史料上の初出）、左京区浄土寺通りに所在していたと推測される。
- (42) 『水左記』永保元年（1081）7月27日条（『増補史料大成』8 水左記・永昌記）は、源俊房が亡父・師房の遺骨を雲林院より北白河の村上源氏の墓地に移して埋葬したことを語っている。同条「一条大路東行、到河原南折、自正親町末程経天□ □着白河御堂」の判読しえない数文字分に関して、角田文衛氏は「満宮前」を入れ「経天満宮前」と復元している（角田文衛「村上源氏の埜域」〔角田文衛著作集第4巻『王朝文化の諸相』、法蔵館、1984年、初出1969年〕。かかる指摘はすこぶる興味深く、成立する可能性は高いと思われる。けれども、本稿では慎重を帰し、検討素材として取り上げることを差し控えたい。
- (43) 『図書寮叢刊 仙洞御移徙部類記 下』。
- (44) 『明月記』寛喜元年5月13日条に、「北白河殿相国被修造之間」とみえている（同書は『明月記』第2・3〔国書刊行会〕による）。
- (45) 近世以前に遡る天満宮の史料としては、他に享祿2年（1529）7月7日「北白川天満宮鐘銘」（安永7年〔1778〕刊の『扶桑鐘銘集』第4巻所収〔堀田璋左右校訂『扶桑鐘銘集』、地人書館、1941年〕）のみしか見出すことができなかった。
- (46) 『洛北誌』旧京都府愛宕郡村志、大学堂書店、1970年復刻。
- (47) 照高院は、江戸時代初期に北白河に再建された天台宗の寺院で、明和7年（1770）以降、聖護院門跡の支配下に置かれた。明治35年6月に建てられた「照高院宮址」碑（左京区北白川山田町に所在）に、白川村の「字宮山・字丸山間凡若干坪是為旧宮地域」と刻まれている。
- (48) 注（3）前掲論文。
- (49) 『図書寮叢刊 経俊卿記』。
- (50) 日下力「権女の姿—藤原成親の女の政治力」（『平家物語の誕生』、岩波書店、2001年、初出1995年）。
- (51) 今村みゑ子氏は、興心房の住寺・菩提院が菩提樹院の略称である可能性が強いことを指摘している（「定家と興心房」〔『明月記研究』2、1997年〕）。菩提樹院は、神楽岡の東に設けられた後一条天皇の葬所に、その母・上東門院（藤原彰子）によって創建された寺院となる（『日本紀略』長元9年〔1036〕5月19日条、『百鍊抄』長暦元年〔1037〕6月2日条）。
- (52) 杉山信三氏は、『勘仲記』弘安6年（1283）10月9日条「日出之程参北白川殿。今日奉為前安嘉門院五七日、被行曼荼羅供。室町院令修御。予奉行也。以上御所御持仏堂為道場。先奉仕堂莊嚴」（同書は『増補史料大成』34・35 勘仲記1・2による）から、北白河殿は上下2つの御所から成り立っていたとし、そのうちのいずれかが安嘉門院御所に該当する可能性を示唆している（「後高倉院の御葬地、北白川について」〔『史迹と美術』27—10、1957年〕）。
- (53) 『群書類従』第29輯 雑部。『紹運要略』立太子月立は、その奥書などによると、嘉暦元年（1326）6月27日に『紹運要略』を書き終ったのに伴い、平朝臣某が立太子に関し宇多以前は『扶桑略記』、それより後は「旧記」などを参照して抄出したものという。
- (54) 注（52）前掲論文。
- (55) 『一代要記』冬（同書は『続神道大系』朝儀祭祀編 一代要記〔1〕・〔3〕による）など。
- (56) 北白河殿の伝領に関して簡潔に述べておきたい。暦仁元年（1238）10月3日に死去した北白

河院の亡骸は、9日に北白河殿の法華堂に納められている（『経俊卿記』同日条）。その夫・後高倉院はすでに同殿に葬られていたと想定される（『百鍊抄』貞応2年〔1223〕5月14日条によると、後高倉院は「葬北白川」られたとする。『明月記』安貞元年〔1227〕2月14日条に「北白河殿〈御墓所〉」、天福2年〔1234〕4月22日「尊性法親王書状」に「北白川殿御幸始、以被奉拜御廟、為其詮候」（『鎌倉遺文』古文書編第7巻・4655号）と記されているのを踏まえると、北白川は北白河殿を指していると推断される）。その後、安嘉門院の所有となっていた同殿は、弘安6年（1283）9月4日の彼女の死に伴い、大覚寺統の龜山上皇の手中に落ちる（『勘仲記』弘安7年8月28日条）。以降、龜山から子の後宇多院（嘉元3年〔1305〕7月26日「龜山上皇処分状」〔『鎌倉遺文』古文書編第29巻・22285号〕）、後宇多院から子の尊治親王（後醍醐）に伝えられるものの、一期の後は直系の孫たる邦良親王に譲与するよう取り決められている（徳治3年〔1308〕閏8月3日「後宇多上皇讓状案」〔『鎌倉遺文』古文書編第30巻・23369号〕）。北白河殿は、鎌倉時代末期から南北朝期にかけての動乱の際、退転するに至ったと推測される。

- (57) 田島公「土御門本『延喜式』覚書」（門脇禎二編『日本古代国家の展開』下巻、思文閣出版、1995年）。なお、虎尾俊哉「解説」（虎尾俊哉編・訳注日本史料『延喜式 上』、集英社、2000年）を参照。
- (58) 『大正新修大蔵経』図像・第12巻。『鎌倉遺文』古文書編第6巻・3861号。
- (59) 『明月記』寛喜元年4月23日条、『華頂要略』63・山下御本坊・十楽院（『大日本史料』第5編之5）など。
- (60) 『明月記』安貞元年（1227）正月17日条によると、円忠の大僧正辞任に伴い、円基・実尊がそれぞれ大僧正・僧正に補任された。権僧正・仁慶は、同母弟の実尊に先を越されたことを恨み、護持僧および権僧正を辞すると訴える。その結果、後堀河はその主張を聞き入れ、北白河院もまた僧正就任に力添えをしたという。
- (61) 『明月記』寛喜元年4月1日条など。
- (62) 『明月記』寛喜元年4月6日・10日条、文暦元年（1234）8月11日条など。
- (63) 『明月記』寛喜元年4月23日条など。なお、仁慶の墓が北白河に設けられたことは、『明月記』嘉禎元年（1235）10月19日条より知られる。
- (64) 『明月記』文暦元年8月5日条。
- (65) 『永昌記』嘉承元年（1106）9月2日条に、「今日於因幡守隆時堂宇、東名寺上人供養一切経」とみえている。藤原隆時の堂宇とは白河堂を指し、承德元年（1097）8月21日に供養が行われている（『中右記』同日条〔同書は『大日本古記録』中右記3・6による〕）。ところが、『中右記』嘉承元年9月2日条では、「今日東光寺聖人於白河小堂、供養新写一切経云々」とあって、東名寺・東光寺という相異が認められる。東光寺は、陽成の生母たる藤原高子の御願により元慶年中に創建された（『類聚三代格』巻第2・延喜5年〔905〕3月9日付太政官符。なお、鎌倉時代初期頃の成立とされる『伊呂波字類抄』2・土・諸寺〔同書は『室町初期写 十卷本 伊呂波字類抄』巻1・2および巻3・4〈雄松堂出版、1987年〉による〕・『一代要記』春では元慶2年、『扶桑略記』元慶3年末尾では同3年の建立とする）。その所在は六勝寺の1つ・最勝寺の北方に求められている（杉山信三「東光寺について」〔『日本建築学会研究報告』30、1955年〕）。
- (66) 林壽彦『増基法師「いほぬし」注解』、三弥井書店、2006年。
- (67) 『本朝文粹』巻第11・323・源順「秋日遊白河院同賦秋花逐露開」。
- (68) 『日本紀略』天曆3年（949）5月22日条、『小右記』長和5年4月10日条。

- (69) 増淵勝一『いはぬし精講』, 国研出版, 2002年。

なお、増基が立ち寄った粟田寺に係わり、下京区本塩竈町に所在する太子堂白毫寺^{びやくこう}所蔵の4点の古絵図について触れておきたい。古絵図は、「応永頃ノ古図写」と注記するもの1点(Aとする)、「古図ノ写」と書き込まれたもの3点(Bとする)となる。太子堂白毫寺は、16世紀末以前には現在の知恩院(東山区林下町)の辺りに存した。古絵図はいずれも、その当時の白毫寺とその周辺を描き出している。A・Bは内容的に非常に相似している。ただし、白毫寺と隣接する(大谷)本願寺の描き方に若干の相違が認められる。

Aについて藤井学氏は、記載されている一心院が天文23年(1554)に没した念称を開山とすることを踏まえ、応永(1394~1428)頃の白毫寺付近の景観を示しているとは捉え難いとする。しかるに、三条末の北に白川本流が東西に記されていることに着目し、近世にはそのような流れは絶えていることから、中世末の粟田口付近を表していると推測する(京都市編『京都の歴史』新装版・第3巻 近世の胎動・第2章第1節、京都市史編さん所, 1979年)。松尾剛次氏はかかる指摘を踏襲し、(大谷)本願寺がAに比べBでより大きく描かれている点に注意を払い、本願寺が太子堂領分へと進出したことを想察することで、BはAよりも新しい状況を表している可能性を示唆する(『京都東山太子堂考』〔『中世律宗と死の文化』, 吉川弘文館, 2010年, 初出2007年〕)。筆者の関心からA・Bを見渡すに、白川本流から支流である小川が分岐する辺り、白川本流の南・三条末の北・最勝四天王寺の小川を挟んだ西向側に粟田寺が書き記されている点を看過することができない。この粟田寺は、増基が立ち寄った粟田寺に合致する公算が大きい。藤井氏の見解が妥当であるならば、中世末期にまでその法灯を伝えていたことになろう。

しかしながら、藤井氏の所説には検討の余地が残されていると考える。というのは、A・Bともに「中古京師内外地図」(『改定増補故実叢書』38巻 大内裏図・中古京師内外地図他)と内容的に相当に似通っているからだ。同図は森幸安が寛延3年(1750)にまとめたもので、平安時代から応仁の乱にいたるまでの名所旧跡などを書き記した歴史地図となる(詳しくは、上杉和央「『ナゾのカルトグラフィヤ』の実像」・「森幸安の地誌と地図」〔『江戸知識人と地図』, 京都大学学術出版会, 2010年, 初出2005・2007年〕を参照)。特徴的な共通点を挙げると、「中古京師内外地図」では、鍛冶池について「宇治拾遺ニ見ユ」と注記する。これと全く同じものがA・Bに掲げられている。また、「中古京師内外地図」における白毫寺および大谷本願寺の描き方は、Bにはほぼ一致する。

もとより、「中古京師内外地図」はA・Bを基にして書き記されたとも考えられよう。けれども、そう断言するには障碍が存する。最勝四天王寺(院)を取り上げよう。同院は後鳥羽院によって承元元年(1207)に建立された(『百鍊抄』承元元年11月23日・27日条)。慈鎮和尚(慈円)は元久2年(1205)4月に三条白河房を後鳥羽院に寄進しており、その地に最勝四天王院が創建されたのであった(『門葉記』寺院4・三条白河房〔『大正新修大蔵経』図像・第12〕)。ところが、承久元年(1219)、後鳥羽院の御所の1つである五辻殿^{いつつじ}(上京区西五辻東町付近)に移建する作業が開始される(『百鍊抄』同年7月19日条, 同2年10月18日条など)。貞応元年(1222)4月には、その跡地は慈鎮和尚に返却されるに至った(『門葉記』門主行状1・慈鎮和尚, 寺院4・三条白河房など。詳しくは、福山敏男「最勝四天王院とその障子絵」〔『日本建築史の研究』訂正版, 綜芸舎, 1980年, 初出1939年〕を参照)。かかる変遷を押さえれば、中世末期に粟田口付近に最勝四天王院が聳え立っていたとはおよそ考え難い。つまるところ、A・Bは「中古京師内外地図」に依拠してまとめられた可能性が高い。

そこで、「中古京師内外地図」の粟田寺の記載に眼を向けるに、それに続いて「三代実録ニ見ユ」と綴られている。『日本三代実録』に登場する粟田寺は清和と関連を有し、後述するように、

円覚寺・東名寺・東明寺にまつわる基礎的考察

北白河に存する東名寺に合致すると考えられる。よって、森幸安の比定には従えず、ましてやそれを増基が訪れた粟田寺に結びつけることは到底許されまい。

- (70) 筒井英俊校訂『東大寺要録』(国書刊行会)。
- (71) 『増補史料大成』6 左経記。
- (72) 『門葉記』寺院3・横河・寛仁3年9月23日付民部省符(『大日本史料』第2編之14)。
- (73) 『門葉記』寺院3・横河・寛仁3年10月14日「源経頼施入願文」(『大日本史料』第2編之14)。
- (74) 『九曆』逸文・天曆8年10月16・17日条(『大日本古記録』九曆)。
- (75) 『日本文徳天皇実録』齊衡2年5月庚午条。
- (76) 『日本三代実録』貞観3年3月14日戊子条。
- (77) 『日本文徳天皇実録』仁寿3年2月甲戌条。
- (78) 貞観10年正月23日「権少僧都真紹付属状」(『河内長野市史』第4巻・史料編1)。
- (79) 『日本三代実録』貞観5年9月6日乙未条。
- (80) 注(78)前掲文書、『東寺文書』乙号外・「禅林観心両寺座主職相承次第」(真紹から正和2年〔1313〕10月就任の益守まで、30代にわたる両寺の座主が記されている。京都府立総合資料館架蔵の写真帳〔『東寺文書』神泉苑・乙号外・宝菩提院〈請求記号：中集古S232・233・234〉〕によるなど。真紹・宗観については、川尻秋生「『観心寺縁起資財帳』の作成目的」(『日本古代の格と資財帳』、吉川弘文館、2003年、初出1987年)を参照。
- (81) 『日本三代実録』元慶元年12月27日癸巳条。
- (82) 寛平5年(893)6月3日『故僧正法印大和尚位真雅伝記』(『弘法大師伝全集』復刻 第10巻)など。
- (83) 『日本三代実録』貞観14年7月19日丁亥条、『類聚三代格』巻第2・同日付太政官符。
- (84) 『日本三代実録』貞観16年3月23日壬午条、元慶3年正月3日癸巳条など。
- (85) 『日本三代実録』貞観16年3月23日壬午条。なお、貞観寺の詳細については、竹居明男「嘉祥寺と貞観寺」(『日本古代仏教の文化史』、吉川弘文館、1998年、初出1983年)を参照。
- (86) 『日本三代実録』貞観元年3月19日乙亥条、『類聚三代格』巻第2・天安3年3月19日付太政官符。
- (87) 『類聚三代格』巻第2・元慶7年12月5日付太政官符。
- (88) 『日本三代実録』元慶6年12月4日壬寅条。
- (89) 『日本三代実録』元慶5年8月23日己亥条。
- (90) 『日本三代実録』貞観12年8月26日丙午条。
- (91) 『日本文徳天皇実録』齊衡3年6月丙申条。
- (92) 注(91)前掲記事。『日本三代実録』天安2年11月26日癸未条には「神楽岡冢」と記されている。貞観5年3月には墓の四至が定められている(『日本三代実録』同年同月15日丁丑条)。藤原良房は愛宕郡白川の辺りに葬られており(『日本三代実録』貞観14年9月4日辛未条)、その近辺に墓所が設けられたことが察せられる。『延喜式』諸陵寮には、前者が愛宕墓、後者が後愛宕墓として登場する。また、藤原明子の白河陵が母である源潔姫の愛宕墓から至近のところに営まれていたことが知られる。
- (93) 網伸也「北白川廃寺の伽藍復原—最近の発掘調査成果による—」(杉山信三先生米寿記念論集『平安京歴史研究』、杉山信三先生米寿記念論集刊行会、1993年)、同「北白川廃寺の造営過程—北山背古代寺院の考古学的考察—」(『古代』97、1994年)。
- (94) 注(40)前掲書第3部第3章1(関口力・高橋潔執筆)。

注

- (95) 『朝野群載』^{あさのぐんざい} 卷第21・雑文上・応和元年(961)8月15日「左京三条四坊売買家地券文」。なお、『日本紀略』天禄元年(970)11月9日条には、「故左大臣在衡家有_二失火_一」とみえており、左京一条一坊に存した邸第が火災に見舞われたものと推量される。
- (96) 『本朝文粹』卷第9・246・菅原文時「暮春藤亜相山庄尚齒会詩」、『栗田左府尚齒会詩』所収・菅原輔正による唱和詩の題詩(『群書類従』第9輯 文筆部・消息部)。
- (97) 『日本紀略』安和2年3月13日条。
- (98) 七叟および漢詩の詳細については、後藤昭雄「安和二年栗田殿尚齒会詩考」(『国語と国文学』64—2, 1987年)を参照。
- (99) 『日本紀略』安和2年3月25日条。
- (100) 『日本紀略』天禄元年正月27日条。
- (101) 『日本紀略』天禄元年10月10日条。
- (102) 『日本紀略』仁和4年2月4日条。
- (103) 『日本三代実録』元慶元年閏2月15日丁亥条。
- (104) 『日本三代実録』貞観18年12月8日辛亥条、元慶元年正月5日丁丑条、閏2月3日乙亥条、同3年5月5日甲午条など。
- (105) 『日本三代実録』元慶3年10月24日庚辰条。
- (106) 橘健二・加藤静子校注・訳 新編日本古典文学全集34『大鏡』, 小学館, 1996年。
- (107) 西本昌弘編『新撰年中行事』, 八木書店, 2010年。
- (108) 松村博司校注・日本古典文学大系21『大鏡』, 岩波書店, 1960年。
- (109) 『続群書類従』第10輯上 官職部・律令部・公事部。
- (110) 若干敷衍しておくに、永仁2年(1294)6月に二条前大納言教良が撰した草稿本を翌年閏2月に中臣祐永^{なかとみのすけなが}が書写した『春日社私記』には、吉田社について貞観18年に藤原山蔭がはじめて祭事を行ったと記す(『神道大系』神社編13 春日)。藤原為実(1266~1333)は「すべらぎもたのむ宮るとなりにけりたゞ山かげのなごりばかりに」と吉田社に関して詠み上げている(『玉葉和歌集』卷第20・2799番歌〔岩佐美代子・笠間注釈叢刊22『玉葉和歌集全注釈』下巻, 笠間書院, 1996年)。「鈴鹿家記」貞治3年(1364)正月6日条では「貞観三(辛卯)四月三日, 藤原中納言殿春日勸請」とみえる(『改訂史籍集覧』第24冊・新加別記類第39)。江戸時代初期の成立と目される『二十二社註式』には「或云, 人皇五十六代清和天皇貞観年中鎮座。中納言山蔭卿, 始奉_レ渡_レ之勸請云々」とある(『群書類従』第2輯 神祇部)。なお、『伊呂波字類抄』4・与・諸社・吉田社では「永延元年山陰中納言奉_レ鎮_レ之」と記されているものの、永延元年(987)には山蔭は生存していない。並木和子氏は、吉田神社は藤原山蔭によって創始され、当初は藤原氏全体が祭祀に与るのではなく、山蔭一族のみが奉斎にあたったと推測している(『平安中期の吉田神社について』〔『風俗』21—3, 1982年)〕。ちなみに、13世紀後半の成立と説かれている(横田隆志「『長谷寺験記』の成立年代」〔『日本文学』59, 2010年)など)『長谷寺験記』^{せでらげんき}下巻・第13では、元慶6年3月、藤原山蔭は播磨守として任国に下向する途次、遣唐使・大神御井が唐の地より流した霊木を明石浦に得て、踵を返し「東山吉田ノ亭」に戻ったとする。この「東山吉田ノ亭」に対し「今吉田社は也」という分注が添えられている(新典社善本叢書2『長谷寺験記』, 新典社, 1977年)。吉田神社の前身が藤原山蔭の邸宅であったかどうかは、確たる史料が存せず、判然としない。なお、応仁の乱以前の吉田神社の鎮座地に関しては、京都大学吉田南構内南半に求める推論が提出されている(福山敏男「鶴岡八幡宮と吉田神社」〔福山敏男著作集4『神社建築の研究』, 中央公論美術出版, 1984年, 初刊1977年)〕。
- (111) 『増補史料大成』17 長秋記2。

- (112) 『群書類従』第9輯 文筆部・消息部。なお、解説にあたっては、木戸裕子「江吏部集試注(三)」(『鹿児島県立短期大学紀要』49, 1998年)を参考にした。
- (113) 『日本紀略』正暦2年9月7日条, 同5年8月28日条。
- (114) 山中裕・秋山虔・池田尚隆・福長進校注・訳 新編日本古典文学全集31『栄花物語①』, 小学館, 1995年。
- (115) 『日本紀略』正暦元年正月25日条。
- (116) 『日本紀略』正暦元年2月11日条。
- (117) 熊本守雄「粟田山庄障子絵と和歌と漢詩一恵慶集と江吏部集一」(『国語と国文学』44—7, 1967年)。
- (118) 『小右記』正暦4年2月6日条。
- (119) 『北山抄』巻第8・大将要抄(『改定増補故実叢書』31巻 内裏儀式・内裏儀式疑義弁他)。
- (120) 『小右記』正暦4年3月6日条, 5月30日条。
- (121) 『日本紀略』長徳元年5月8日条など。
- (122) 『粟田左府尚齒会詩』。
- (123) 陽明叢書記録文書篇第6輯『平記・大府記・永昌記・愚昧記』, 思文閣出版, 1988年。なお、『江家次第』巻第20・帥若大式赴任事に同内容のものが確認されるものの, そこでは藤原国光ではなく源国光とされている(『改定増補故実叢書』2巻 江家次第)。
- (124) 『尊卑分脈』巻第4。『栄花物語』巻第4には、「この粟田殿の君達, はかばかしうおとなびたまへるもなし。いと若う毛ふくだみてぞ二人おはすめるも, いとあはれに見えたまふ」とみえ, 道兼死去当時, 2人の子息(兼隆と兼綱)はまだ幼かったとされる。なお, 道兼の長子・福垂(足)は早世している(『小右記』永祚元年〔989〕8月13日条, 『大鏡』地など)。
- (125) 道兼の粟田山庄に関しては, その所在を粟田口に断定する指摘が見受けられる(注〔4〕前掲書・粟田山庄の項〔加納重文執筆〕, 注〔40〕前掲書第3部第5章1〔藤本孝一執筆〕など)。ただし, どういった史料に依拠したのか, その点が一切触れられていない。さらに遡ると, 「中古京師内外地図」では, 最勝寺の西方, 大炊御門末と冷泉末の間に「粟田山庄/二条関白道兼公」を配置している。これもまたその根拠は分明ではない。
- 建長6年(1254)成立の『古今著聞集』巻第4・文学第5・121・「尚齒会の起源と天承元年三月藤原宗忠の尚齒会の事」に「大納言在衡卿, 粟田口の山庄」(西尾光一・小林保治校注 新潮日本古典集成〔第59回〕『古今著聞集 上』, 新潮社, 1983年), 15世紀中葉にまとめられた『塩囊鈔』巻第11・15に「粟田口ノ左大臣在衡卿」(日本古典全集『塩囊鈔』)とみえ, 在衡の別宅が粟田口に存したと主張している。けれども, 両書ともに成立時期は新しく, 事実を物語っているのかすこぶる心許ない。なお, 正保3年(1646)4月日「醍醐寺々領堂舎目録案」では, 慈心院(多宝塔一基)に関し, 粟田関白(道兼)が建立し, もとは洛陽粟田口にあったとする(『大日本古文書』家わけ第19・醍醐寺文書之3・633)。ここに道兼と粟田口とのつながりが見て取れる。しかしながら, 平安時代末頃に著された『醍醐雑事記』巻第2では, 慈心院の塔に関し, 藤原資隆らが父である重兼(基)の上に粟田より移し建てたと記されている(中島俊司編『醍醐雑事記』〔醍醐寺〕。重兼・資隆父子は道兼の4・5世孫にあたり(『尊卑分脈』巻第4), このような血縁関係に立脚して, 道兼建立といった所伝がその由緒を深めるために創出された可能性が存する。よって, 前の文書の記載を踏まえ, 道兼と粟田口との係わりを強調することは早計となろう。
- (126) 『公卿補任』寛徳3年(1046)条, 『尊卑分脈』巻第4。
- (127) 寛文5年(1665)の序を有する『扶桑京華志』巻之3・古蹟・東明寺の項には, 「僧正覚尋旧

注

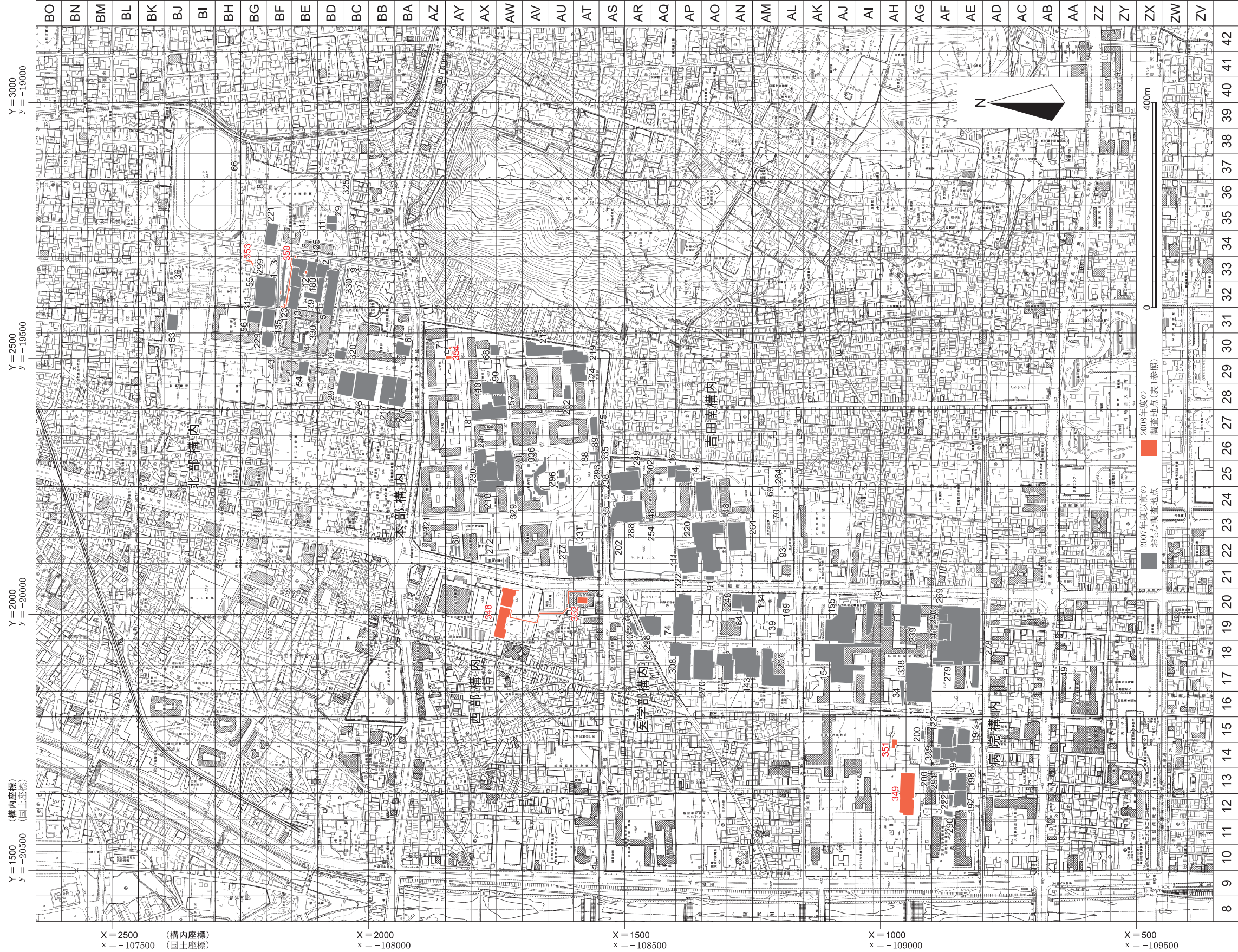
名=大毘盧舎那寺。僧都濟覺改=今名=」という文章が掲げられている（『新修京都叢書』第22巻）。覚尋は、『水左記』承保4年（1077）6月16日条などにみえる天台座主などを務めた権僧正・覚尋（1012～81）、濟覺は、『中右記』元永2年（1119）3月朔日条（『増補史料大成』13中右記5）などにみえる濟覺を指しているのかもしれないが、詳細は不明である。興味深い記述ではあるけれども、その信憑性を確かめるのは困難を極める。

- (128) 吉田靖雄「惟宗孝言伝考—11世紀の文人・家司・受領—」（『歴史研究』20, 1982年）。
- (129) 注（25）前掲書。
- (130) 白川という名称は、花崗岩の風化によって生じた白砂に由来する。白川砂は庭園などに多く用いられた（『明月記』建保5年〔1217〕2月8日条、『看聞日記』永享8年〔1436〕8月15日条〔『図書寮叢刊 看聞日記5』〕などを参照）。白砂の豊富さを物語る興味深い事例を紹介しておこう。正中2年（1325）6月26日、激しい雷雨により京都は大洪水に見舞われた。白川も例外ではなく、河の水が溢れ、小家はみな流され、死人が多数発生したという（『花園天皇宸記』同日条・裏書〔『史料纂集80 花園天皇宸記 第3』〕）。それから約三箇月後、藤原道平は北白河の辺りへと向かった。6月の大洪水の後、白川の辺りの白砂が数十町に広がり、その景観はまるで紀伊の吹上浜ふきあげはまのようだという噂を耳にし、それを見物するためであった（『後光明照院関白日記』正中2年9月19日条〔小川剛生「『後光明照院関白日記（道平公記）』解題・翻刻・人名索引」〈『調査研究報告』22, 国文学研究資料館文献資料部, 2001年〕））。
- (131) 『日本紀略』寛平元年3月25日条、『類聚三代格』巻第3・延喜6年（906）9月19日付太政官符。
- (132) 『権記』寛弘8年（1011）11月16日条（『増補史料大成』5 権記2・帥記）に記される後冷泉太上天皇の葬送の際の経路なども参照のこと。
- (133) 『左経記』類聚雑例・長元9年5月19日条。
- (134) 『左経記』類聚雑例・長元9年5月13日条。
- (135) 角田文衛「尚侍藤原淑子」（角田文衛著作集第5巻『平安人物志 上』, 法蔵館, 1984年, 初出1966年）。
- (136) 『日本三代実録』貞観14年2月7日丁未条。
- (137) 9世紀末には埋没していたとされる東西溝S D45（長さ28m・幅0.7～1m。ただし、西側は南北道路S F 1によって破壊されている）西端からは、一括して廃棄されたと思われる多量の遺物が検出されている。それらのうち「土師器・黒色土器・灰釉陶器には、墨書のあるものが10数点確認できているが、いずれも判読には至っていない」との指摘がなされている（注〔2〕前掲）。これらについて筆者は改めて釈読を試みたものの、墨痕が非常に薄く、読み切ることが叶わなかった。ただし、字数を確定しえるものがいくつか存するので、ここに紹介しておく。
- 遺物番号 I 185（黒色土器・碗）：「□」（体部外面。横位置で1文字だけ確認できる。木偏の漢字）。I 189（黒色土器・碗）：「□/□□」（底部外面）。I 218（灰釉陶器・皿〔黒笹90号窯式〕）：「□□」（底部外面。1字目は行人偏の漢字）。I 219（灰釉陶器・皿〔黒笹90号窯式〕）：「□□」（底部外面。1字目は行人偏の漢字）。I 218とI 219の墨書は同一であると判断される。ただし、I 219の墨書はにじんでいるので、筆跡が等しいかは定かではない。I 224（灰釉陶器・皿〔黒笹90号窯式〕）：「□□」（底部外面。1字ないしは2字）。

京都大学構内遺跡調査研究年報 2008年度

図 版

- 1 京都大学吉田キャンパスの地区割と調査地点
- 2～5 京都大学病院構内 A G 13区の発掘調査



Y = 3000
y = -19000

Y = 2500
y = -19500

Y = 2000
y = -20000

Y = 1500 (構内座標)
y = -20500 (国土座標)

X = 2500 (構内座標)
x = -107500 (国土座標)

X = 2000
x = -108000

X = 1500
x = -108500

X = 1000
x = -109000

X = 500
x = -109500

2008年度の調査地点(表1参照)
2007年度以前の調査地点

8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42

BO BN BM BL BK BJ BI BH BG BF BE BD BC BB BA AZ AY AX AW AV AU AT AS AR AQ AP AO AN AM AL AK AJ AI AH AG AF AE AD AC AB AA ZZ ZY ZX ZW ZV



1 完掘後の調査区全景（西から）



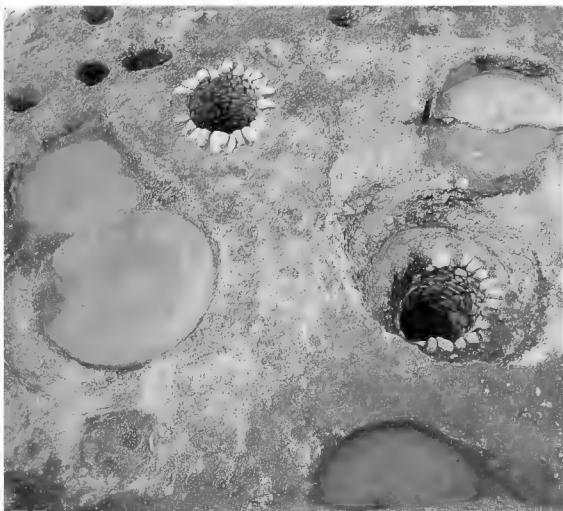
2 調査区東辺全景（南から）



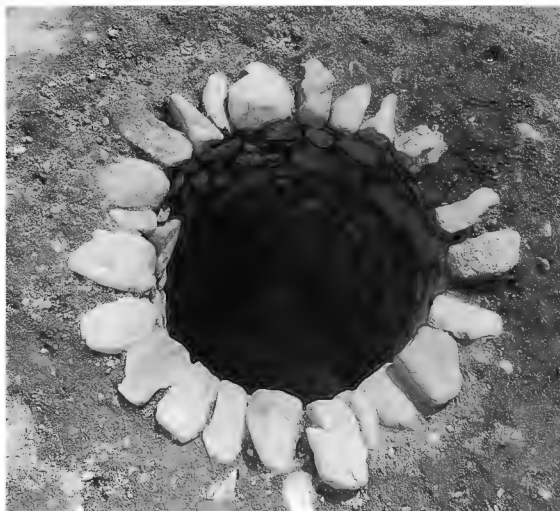
3 東西畔の層位（南西から）



4 井戸SE19（南から）



1 南辺の井戸・野壺群（南から）



2 井戸SE3（北から）



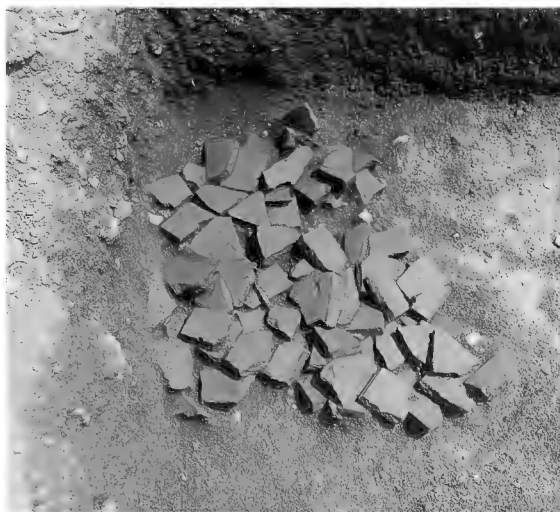
3 井戸SE6（西から）



4 井戸SE15（北東から）



5 土坑SP1（南から）



6 瓦溜まりSX1（西から）



1/3

I 49 1/1



I 276



1/1

I 280 1/1

I 282



1/1

I 292 1/1

I 300



1/1

I 298 1/1

I 310

S E19出土遺物 (I 49陶器), 土製品 (I 276・I 280・I 282・I 292・I 298・I 300・I 310人形)



土製品 (I 312・I 313・I 315玩具, I 327～I 330・I 402・I 419・I 425・I 436泥面子), 銭貨 (I 549 寛永通宝, I 567文久永宝, I 568二朱金)

2011年3月31日 発行

京都大学構内遺跡調査研究年報
2008年度

編	集	京都大学文化財総合研究センター
発	行	京都市左京区吉田本町
印	刷	三星商事印刷株式会社
製	本	京都市中京区新町通竹屋町下ル弁財天町300